

504  
78

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始



504  
78

# やそ何はと教宗

著 イトスルト  
譯 夫一藤加



社 秋 春

504-78



宗教とは何ぞや

トスルトイ著

加藤一夫 譯



ГЕРБЪ РОДА ГРАФОВЪ ТОЛСТЫХЪ,

春秋社



宗教とは何ぞや



加藤一夫譯

宗教とは何ぞや

宗教とは何ぞや

加藤一夫譯

凡ての人類社會に於いて、その存在のある時期に至ると、宗教がその最初の目的を見失つて、段々と遠くに離れ行き、その根本の意義を失ひ、そして遂には永久に固定した形式に結晶し、かくして人間の生活の上に及ぼす力が益々弱くなつて行く時があつた。

そんな時には、教養のある小數者は既定宗教の教訓を信ずることを止める。そしてたゞ、既定の生活體制の中に一般の庶民を保つて置かんがためには左様する事が必要だと考へるところから、それを信じて居る様な風をして見せるに過ぎない。然るに一般庶民はたとひその惰性の力でもつて宗教の既定形式を信じて居るとは云つても、最早宗教の要求するところに従つては生活を送らないで、たゞ慣習や國法によつて指導されて行くに過ぎない。

それは諸種の人間社會に於いて繰返し繰返したことであつた。しかし今吾々の基督教社會に起つて居るが如きことは、未だかつて決して起らなかつたところである。庶民の上に最も大なる勢力を有して居る、富める、小數の支配的智識的階級のものが、たゞに現存の宗教を信じないばかりでなく、如何なる宗教も最早毫も必要でないと確信したり、又は、一般に傳へられて居る宗教の眞實を疑つて居る者どもに對して、その一般に行はれて居る宗教よりも合理的で明瞭である宗教的教訓を受納れる

様にさせやうとはしないで、反つて宗教は概して最早その盛期が過ぎ去つてしまつたもの、また、嘗て無用であるばかりでなく、恰も人體の虫様垂の如く有害なる社會機關であるとすら思はせやうとしたりするそんなことが。

斯る人々は宗教を見るのに、それが吾々の内的經驗によつて知られたる者とはしないで、外的な現象とする。云はゞ、それは、ある人々にとつついた、そして唯その外的な徴候によつてのみ診察するとの出来る病氣の様なものだとするのである。

此等の人々の中にある者の意見に従へば、宗教は自然の諸相に或る精神を賦與するところから起つたのである（生氣説）。他の者の説に従へば、それは亡くなつた祖先と交通することが出来ること云ふ假想から生じたのである。更にまた他の者の説に従へば、それは自然力に對する恐怖から起つたのである。しかし今日の學者達は曰ふ。既に科學が、木にも石にも精神を賦與することが出来ないことや、死せる祖先は今生きて居る者どもが何をなして居るかを知らないこと云ふことや、自然の現象は自然的原因によつて説明するを得ると云ふことを證明した以上、宗教の必要がなくなつてしまつた。それと共にまた、人民が今迄、自分で自分を因らせて居た（宗教信仰の結果として）それ等一切の制限の必要もなくなつた。と。これ等の學者の説によれば、そこには無智の時代があつた。宗教時代がそれである。それは最早、すつと以前から人類によつて捨てられて居る、たゞその時々の問題的な徴候が残つて居るばかりである。次に形而上學的時代が來た、それも亦今は廢つてしまつた。しかし吾々、光輝されたる人民は、科學時代に住んで居る。實證科學の時代、それは宗教を押しつけ、人類が宗教の迷

信的教説に従つて居る間は未だ、かつて到達し得なかつた高さにまで發展せしめるのであらう。と。  
 千九百一年の初めつ方に、有名なる佛蘭西の學者ブートローは一つの講演をし、その聴衆に向つて曰つた、宗教の時代が過ぎ去つた、そしてそれは科學によつて代られねばならぬと。私が特に此の講演を引合に出したのは、それが教養ある世界の首都に於いて、而も世界的に認められて居る學者によつて述べられたものであるからである。しかし此の同じ思想は不斷に、そして至るところで、哲學的議論から始まつて新聞紙の小品欄に至るまで、凡ゆる種類の形式でもつて表白されて居る。

ブートローはその講演に於いて曰つて居る。以前は、人類を動かした二つの原動力があつた。力と宗教とがそれである。しかし此れ等の原動力は今や不必要になつた、何となればその代りに吾々は科學をもつて居るからと。ブートローの意味する科學とは(凡ての熱心なる科學の信徒と等しく)人間の知つて居るものゝ全範圍を包括し、それを一々調子よく結合し、組織だて、そしてかくすることによつてその獲得する與件が確實に眞理であると云つた様なものを指すのである。しかし實際に於いてかゝる科學は存在しない。今日科學と稱んで居るものは、その多くは全く無用な、偶然な、關聯のない、断片的智識から成り立つて居るものであつて、確實疑ふべからざる眞理を提供する代りに、多くの場合、今日眞理として示されたかと思へば、明日は誤謬として排斥されるが如き途方もない迷妄を提供する。かくて、ブートローが宗教に代らなければならぬと云ふものは實は存在しない何者かである。と云ふことが明白である。それ故にブートロー及び彼と同意見の人々によつてなされたところの、科學が宗教に代らなければならぬと云ふ斷定は、全く不合理な科學無謬説の信仰——教會無謬説

の信仰と同じであるところの——の上に築き上げられた全く我儘勝手な斷定に過ぎない。

而も自ら教養のある人だと思ひ、もしくはさう云はれて居る人々は、そこには既に、宗教に代るべき、また代り得べき、否、既にそれに代つたとさへ思はれて居る科學が存在して居ると確信しきつて居る。

『宗教は最早すたれた。科學以外の如何なる者の信仰も無智である。科學は必要なる一切を整理するであらう、そして人はたゞ科學によつてのみその生活を導かれねばならぬ。これは實に科學者それ自身及び、群衆の何れもによつて考へられ語られる事である。その群衆自らとしては、科學とは餘程遠くかけ離れて居るのにも拘らず、科學者を信じ、そして彼等と共に、宗教は舊くさい迷信に過ぎない、それ故に吾々はたゞ科學によつてのみその生活を指導されなければならぬと斷定する。即ち、實際に於いて何者によつても導かれるなど云ふのである。何となれば科學はその本來の目的(存在する一切のものを研究すると云ふ)から云つて人の生活に向つて何等の指導をも與へることが出来ないから。』

註 I、千九百一年一月の "Revue de Paris" を見よ。

二

現代の學者たちは決定した。宗教は無用である、科學はそれに代るであらう、否、既に代つて居ると。しかし事實は尙も殘存して居る。今も亦昔の如く如何なる人類社會も、また、如何なる合理的な

人間も、宗教なしには存在しなかつた、否、存在し得ないと云ふ事實が残存して居る。私が特に合理的と云ふ字を用ひたのは、不合理な人間は、恰も獸類がなす様に宗教なしにも生きられるからである。しかし合理的な人間は宗教なしには生きられない。何となれば宗教のみが、合理的な人間に何をなさねばならぬか。何を最初になして何を次にすべきかを示し、以て彼の要する指導を與へるからである。合理的な人間が宗教なしには生きられないのは、全く、理性こそ彼の本性の特質だからである。凡ゆる動物は、その行爲の直接の結果を思量して其の行爲を（その直接な欲望を充さんとする要求に押しやられて引きつけられるそれ等の物を除いては）する様に指導される。動物は、それがもつて居る斯かる理解の方法によつてその結果を思量した後、その行動をそれらの結果に適合させる。そして常に何等の躊躇もなく、此等の思量に従つて同一の方法で行動する。たとへば、蜜蜂は蜜を探しに飛んで行き、そしてそれを巢房の中に貯へておく。と云ふのは冬になると自分達及びその若いものゝために食物が必要だと云ふことを知つて居るからである。そして此等の思量を越えては何者も知らない、また知り得ない。鳥がその巢をつくる時だとか、北から南に移住し、そしてまた還つて来る時も、また同じ様にする。凡ゆる動物も亦、同じ様にする——それが直接理前な必要のために何事かをなすのでなく、此等結果が起るであらうと思ふところから喚び起された時には。しかし人間はさうでない。人間と動物との間の相違は、次の事實の中に存して居る。即ち動物のもつて居る認識能力は謂ふところの本能以外に出ることが出来ないのに反して、人間の根本的認識能力は理性であると云ふことである。蜜を集める蜜蜂は蜜を集めることが善い事であるか悪い事であるかに就いて疑ひを容

れる事が出来ない。しかし人はその穀物や果實を集むるに當つて、彼はこれからの收穫の見込みを減じつゝあるのではないか、隣人からその食を奪つて居るのではないかなどと考へざるを得ない。また彼は、彼が今養つて居る子たちが、今に彼の様になり、そしてずつと變つたものとなると云ふことを驚嘆しないでは居られない。人生に於ける行動の最も重大なる問題は合理的な人間によつては決定的に解決される事は出来ない。何となればそこには彼の知り得ない、有るだらうと思はれる餘り多い結果があるからである。合理的な凡ゆる人は知つて居る、少くとも感じて居る。人生の最も重要な問題に於いては、彼はその個人的衝動によつても導かれなからし、彼の活動の直接の結果を思量することによつても導かれなからしと云ふことを。何となれば、彼の先見し得る結果は、餘りに多數で、餘りに多様で、而も時としては自分及び他人に對して有害でもあり有益でもある様に證明するかの如くに、お互が矛盾してさへ居る様に見えるからである。一つの言ひ傳へがある。一人の天使が地上に降つて来て、ある信心深い家に入り、そこで搖籃に睡つて居る子供を殺した。何故かくの如きことをなしたかを訊かれた時天使は答へた。此の子は成長して非常な罪人となつて、此の家の幸福を破壊するであらうからと。しかしそれは、たゞに『人生は有用であるか無用であるか、若しくは有害であるか。』と云ふ問題に就いてばかりではない。人生の最も重要な問題の何一つをも、合理的な人間はその直接な結果や經驗を思量することによつては決定することが出来ない。合理的な人間は動物の行爲を指導するところの思量では満足が出来ない。ある人は自らを動物のうちの動物と——その日々を送つて住むで行く——見てもいい。もしくは幾世紀にも亘つて住むところの、家族や社會や國家の一員だと見

てもいふ。若しくは又自らを永遠に存在して居る無限なる全宇宙の一要素と見てもいふ、そしてまた必然的に然う考へなければならぬ。(何となれば理性は不可抗的に彼を此れに氣づかしめるから) 故に合理的な人間は、彼等の行爲にある感化を及ぼした無限に小さい人生の事象に就いて、數學で翻ふところの積分法をなすべきであり、そして常にそれをなした。と云ふのは即ち、彼等が人生の直接の事實にまでの關係の外に、全一と見られたる時間及び空間に於ける大なる全無限との關係を定めねばならぬ。そして人間が自らをその一部分として感じ、それから彼の行爲の指導を引き出すところの全體との關係を規定すると云ふことが即ち、謂ふところの宗教なるものなのである。それ故に宗教は常に合理的な人間及び一切の合理的な人類の生活上、必要にして缺くべからざる條件であつた、そしてさうでなくなることを得ない。

## 三

これが即ち、人と野獸とを分つところの最高の(即ち宗教的)意識を缺いて居ない人々が常に宗教を了解する方法である。宗教(religion)と云ふ言葉それ自身が既に、神々を敬ふと云ふ意味の *religere* 又は *religens* から來て居る。或は普通に想像されて居る如くに、結びつける(より高き力に義務的に)と云ふ意味の *religare* から來て居る。最も舊いそして普通な宗教の定義は「宗教とは神と人との間の連鎖である」と云ふことである。『Les obligations de l'homme envers Dieu; voilà la religion』「神に對する人間の義務、それが宗教である」とフーゲナールグが曰つた。同じ意味はまたシヨーベンハウエルやフ、

イエルバツハによつて曰はれた。彼等は「宗教の根柢は人間の神に信賴する意識」であると云つて居る。『La religion est une affaire entre chaque homme et Dieu』(宗教とは各人と神との間の事象である)とブーエが。『La religion est le resultat des besoins de l'ame et des effets de l'intelligence』(宗教とは心靈の要求から起つたものであつて叡智の結果である。)とコンスタンが。『宗教とは、人間がそれに依囑して居ると自分で思ふところの超人間的にして神祕な力と自己との關係を實現する或る特殊な手段である。』とルブレイ・ダアルブイエーラが。『宗教とは、人間の心靈と、彼が世界及び彼自身を支配して居ると感じて居る、そしてそれに彼が結ばれて居ると感じて居る、かの神祕な靈との間の關聯の上に築かれたる人生のある定義である。』とルブイエーユが。

かくの如くに宗教の本質は常に了解されて居た——そして今も尙人間最高の特質を奪はれてない者は、人が自分と自分の上にその力の及んで居るのを感じて居る無限者もしくは無限者達との間の關係を認識することに在ると云ふ風に了解して居る。そして此の關係は、たとひそれが國民の差別や時代の相違によつて違つては居ても——人間のために、世界に於ける彼等の運命を定義した。それからして、彼等の行爲に向つての指導が自然と流出して來た。猶太人は彼と無限者との關係をかう考へた。即ち、彼れは凡ての國民の間から特に神によつて擇ばれたる國民の一員である、それ故に彼は神の眼の前に於いて神と此の人民との間に結ばれたる契約を守らねばならぬと。希臘人は此の關係を、人は永遠の代表者たちに——神々に——依繋して居るのだから、その神々を怡ばす様なことをなすべきであると解した。婆羅門教徒は、自分自身が無限のブラーマ(梵)の一の顯現だから、生を拒否すること



によつて至高の存在と合體する様に努めねばならぬと解した。佛教徒は彼と無限との關係を解釋して、人は生活の一相から他相にまで流轉するので不可避的に苦惱する。そして此等の苦惱は情慾や肉慾から出て来る。それ故に彼の仕事は一切の情慾一切の肉慾を滅却してニルバナ(涅槃)に入ることゝ努むるにあるとした。凡ゆる宗教は、人と、人がそれにまで自らの結びつけられて居ることを感じて居る無限の生命との間に、彼の行爲に指導を與ふるある關係を樹立することである。それ故に、もし宗教にして人と無限との間に何等の關係をも樹立しないならば(たとへば偶像禮拜や妖術の場合に於けるが如く)その時には常にそれが眞の宗教でないばかりでなく、一つの墮落類廢に過ぎない。また、たとひ宗教が人と神との間に何等かの關係を樹立したとしても、それが、理性や、人間の近代知識と一致しない様な斷定によつて、従つて人が眞にその斷定を信ずることが出来ない様な仕方によつて、それをなすのなら、それも亦宗教でない、單なるニセ物に過ぎない。もしもその宗教にして、人の生命を無限の生命に結びつけなければ、それも亦宗教でない。人間の活動に對つて一定の方向を與へない様な命題の信仰も亦、宗教を構成しない。

眞の宗教は、人が彼の周圍に於ける無限の生命を認識するところの、理性や智識に適合する一つの關係であつて、それが彼の生命を無限に結びつけ、彼の行爲を指導する。

四

人間が宗教なしに生きた時代もなく息もないのに、而も今日の學者達は、恰度汗流が左側にあるも

斷言したモリエールの「心ならぬ醫者」の様に: *Vous n'avez changé tout a fait*、吾々は凡てそれを變更してしまつたのだ」と云ふ。そして吾々は宗教なしに住むことが出来る、また住むべきであると考へる。しかしそれにも拘らず、宗教は依然として過去に於けると同様に人間社會の主要なる元動力であつてまた心臓であるところの地位を變へない。そしてそれなしには、恰度心臓がないのと同じ様に、人は生きられない。そこには多くの異なる宗教があつた。また今もある。と云ふのは、無限や神や或は神々にまでの人間の關係の表白が、異なる國民の進歩發展の程度に従つて、時代によつて異り、處によつて異なるからである。しかし人間が合理的な生物になつてから此方と云ふもの、その如何なる社會に於いても宗教なしに生き得たことはない、また生きもしなかつた。

國民の生活に於いて、既存宗教が悪變され、そして最早生活を導くことをやめたかの如くに生活の背後に押しやられた時があつた、またそれは時々起る。しかしそれが此の人間の生活に對する作用の中止は(時々凡ての宗教に起るところの)一時的であつた。眞に生存して居る凡てのものと同じく、此れが——即ち、生れ、成長し、老衰し、死滅し、そしてまた生を得、以前よりはもつと完全な形式をとる様になるのが——宗教の特質である。宗教が餘程高い位置にまで發展した後には、いつも衰頽と無生命の時が来る。そしてまた今度は、復活の時代がそれにつき、以前よりも賢明にして明晰なる宗教的教理が建設される。斯くの如き、成長や衰頽や復活の時代が凡ての宗教に起つた。婆羅門の深刻なる宗教が老衰し始めるや否や、そしてその根本主義に適應しない固定せる淺劣なる形式に硬化し始めるや否や、一方に於いては婆羅門教それ自身の復興があり、他方に於いては、人間の理解を無限と

の關係にまで進めた高尚なる佛教の教が生れた。同じ頽廢が希臘や羅馬の宗教にも起つた。そしてその頽廢のどん底からして基督教が現はれた。同じことがまたビザンティウムに於いて偶像崇拜や多神教に墮落した教會基督教にも起つた、此の惡變されたる基督教を正さんとして、一方にはポリシズムが起り、他方には三位一體論や聖母禮拜に反對して一神的信仰をその根本教理としたる嚴密なるモハマダニズムが生じた。同じことはまた、宗教改革を惹き起したところの中世紀の法王的基督教にも起つた。かくて、宗教が人民の大多數の上に及ぼす感化力を弱めた時、それは一切の宗教的教訓の生命及び成長上、必然の状態である。と云ふのは、その眞個の意義に於ける凡ゆる宗教的教訓は、如何にそれが生硬未熟であつても、常に萬人にとつて一樣であるところの、人と無限との關係を定めるからの事である。凡ゆる宗教は人を無限に比べて一樣に實につまらない者だと見る。それ故に凡ゆる宗教は、それが神と見做すところのものゝ前に一切の人が平等であると云ふ概念をもつて居る。それが光であらうと、風であらうと、木であらうと、動物であらうと、英雄であらうと、死人であらうと——或は生ける——王であらうと（羅馬に於いて起つた様に）。かくて人間が平等だと云ふ認容は凡ゆる不可避的なそして根本的な特質である、しかし人間の平等が實際生活に於いて何處にも存在しなかつたし、今も又存在しないところから、新しい宗教的教訓が表はれるや否や（常に一切の人の平等説を抱含して居る）不平等である方が利益である人々は、直ちに、その教訓そのものを曲解することによつて此の本質的形貌をかくしてしまふ。而も此れは大部分意識してなされるのではない。ただ不平等の方が利益であるところの人々が——治者又は富者——その自らの地位を變更することなしに、その

教によつて是認せられたことを感じたいところから、出来るだけの手段をつくして、不平等を認可する解釋をその宗教的教訓に結びつけんとするのである。かくの如くにして自然と、自らを他人の主となした者が、そんなにする事を是認し得たと自認し得る程にも、宗教は曲解される。それがまた、一般民衆に傳達された時には、彼等に、權威をもてる者への臣従は彼等の信奉して居る宗教によつて要求されて居るのだと云ふ感念を積み込ましめる。

## 五

凡ての人間の活動は三つの原動因によつて喚起される。即ち感情と、理性と、暗示とである。このうちの最後に名づけられたものは彼の謂ゆる催眠術と稱するものである、時としては人間はただ感情の力の下に於いてのみ活動する——ただ彼の欲望するものを獲やうと努めながら。時としては彼は彼に何を爲す可きかを示す理性の力の下に於いてのみ活動する。時としては、而も随分頻繁に、人間は彼自身若しくは他人が、彼にある活動を暗示したために活動する。そして彼は無自覺の間にその暗示に服従する。生の正則な状態の下に於ては、三つの力が凡て人間の活動を敏活ならしめるために各々自分の分をつくす。感情は彼をある活動に向つて引き寄せる。理性はこの活動を過去の經驗や未來に對する期待、並びに現在の事情の光に依つて判断する。そして暗示は人間に、感情や理性を離れて、感情に依つて喚び起され理性に依つて是認された活動を實行させる。若し感情がなかつたならば、人間は何事も企てないであらう。もし理性がなかつたならば、人間は自分に取つても他人に取つても有

害な、多くの相矛盾する感情に一も二もなく服従するであらう。若し自己の、或ひは他人の暗示に従ふ能力がなかつたならば、人間はある特殊なる活動をなせと勤める感情を絶え間なく経験し、彼の理性をその感情の利益の確保の上に間断なく緊張させて置かなければならないであらう、だから、これらの三つの力は最も單純な人間の活動にすらも必要缺く可からざるものである。若し人間がある場所から他の場所へ歩くとすれば、それはかう云ふことから起るのである。則ち、感情が彼をある場所から他の場所へ動くことを強ひ、理性がこの意志を是認して、その實行の方法（この場合には——ある道路に沿ふて歩むこと）を指示し、そして肉體の筋肉がそれに服従して、指定された道路に沿うて動くからである。彼がその道を進んで行つて居る間、彼の感情も理性も共に、もし暗示に従ふ能力がなかつたならば起り得ない今一つの活動に向つて解放されて居る。これは有らゆる人間の活動に於いてもさうである。またそれらのうちでも最も重要なもの、即ち宗教的活動に於てもさうである。感情は神と人間の關係を定むることの必要を喚び起す。理性はそれを定義する。そして暗示はその關係から流れ出でる活動に人を強ひる。然しこれは、たゞ宗教が曲解されないで居る間だけのことである。曲解が始まるや否や、暗示に依つて演じられた部分が段々強くなつて、感情と理性の活動は鈍つて了ふ。暗示の方法は何時でも何處でも同じだ。それは人間の、暗示に對して最も敏感である時（幼年時代や、死、生、或は結婚等の如き、一生のうちでも最も重大な出來事の場合等）に乗することである。それから藝術、即ち建築や彫刻や繪畫や音楽や劇的演技等に依つて彼に作用<sup>た</sup>らきかけ、そして、彼が感受し易い状態に在る間に、（半催眠術に依つて個人の上に生ぜしめられたものに比較される）暗示者の

の欲するがまゝのことを彼に注入することに在る。

この過程は凡ての古代宗教に認められる、唱歌と香の煙に伴はれた、種々の寺院に於ける夥多しい映像に對する粗雑な偶像崇拜に墮した崇高なる婆羅門の宗教にも、虚飾的な歌曲や行列を有つた壯麗な寺院に於ける神の禮拜に變化した希伯來の宗教（豫言者等に依つて宣へられた）にも、測り知ることの出來ない喇嘛教に——その僧院や佛陀の映像や無数の虚飾的な儀式を有てる——變形した佛教の崇高な宗教にも。そしてその妖術と呪文とを有する道教にも。

凡ての宗教的教訓に於いてそれが曲解され始める時には、何時でもその擁護者達は先づ、人間の性を微弱にしか働かない状態にして置いて、さて、彼等が彼等に信じさせたいと思ふことを何でも暗示し、注入せんがために有らん限りの努力をした。そして凡ての宗教に於いて、墮落しつゝある宗教が逢はせられる凡ての曲解の基礎となる同じ三つの事を暗示する必要が發見された。第一に暗示されるのは、たゞその者だけが、人と神或は神々との間の仲保者として働き得る或る特種の人があると云ふことである。第二は、これらの人と神との間の仲保者に依つて語られたことの眞理を證明したり、確言したりするところの、奇蹟が行はれた、また行はれてゐると云ふことである。第三は、口でもつて繰返された。または書物でもつて書かれたある言葉がある。それは神の、或は神々の不變の意志を表白し、それ故に神聖にして誤りのないものであると云ふことである。そして、催眠術の力でこれらの命題が受け容れられるや否や、聽てまた、人と神との間に於ける仲保者の語る凡ても神聖なる眞理として受け容れられる、そしてかくして宗教を曲解せんとする目的が達せられる。即ち、人類の平等の

法則の隠蔽や、更には最大なる不平等の建設や断定や、社會階級への分離や、選民と異邦人との分離や、正統派と異端との分離や、聖者と罪人との分離等がそれである。まさにこのことが基督教内に起つた、また起りつゝある、人間の間の完全なる不平等が許容された。そして彼等は、單に、その教を理解するに當つて僧侶界と平信徒とに分つばかりでなく、社會的地位を理解するに當つては、力を有するものと力に服従す可きものとに分割する。——そしてそれは保羅の教と適合つて居るのであつて、神の命じ給うたものとして認容されてゐるのである。

## 六

たゞに僧侶と平信徒としてばかりでなく、また富める者と貧しき者、主人と奴隸としての人間の間の不平等は、他の宗教に依つてと同じ位決定的にして明白に、教會の基督教に依つても是認されてゐる。けれども福音書に記されて居る基督教の教理の最初の形式から(私達の知つてゐる)判斷すると、そこには既に他の宗教で用ひられた曲解の主なる方法が豫知され、それに對する明白な警戒が叫ばれて居るやうに見える。僧侶階級に對しては、何人も他人の師であつてはならないと云ふことが明白に云はれた(地にある者を父と稱ふること勿れ、——また導師の稱を受ること勿れ)。書物を神聖視することに對しては、精神は重要であるけれど、文字はさうではないと云ふこと、人間の傳説を信じてはならないと云ふこと、そして有らゆる律法と豫言者達(即ち、神聖な文書と看做されてゐる凡ての書物)はたゞ畢竟するところ、己れの欲するところを他人に施せと云ふことになると云ふことが述べられた。し

かし奇蹟に對して何も云はれてゐないとしても、そして、若し福音書そのものの中に耶蘇が行つたと想像される奇蹟が記されてあるにしても、それにも拘はらず、耶蘇が彼の教理の確實の證據を、奇蹟の上にはなく、教そのものゝ價值の上に置いたといふことは、教の全精神から云つて分明である。(人もし我を遣はしゝ者の旨に従はしゝこの教の神より出づるか又己に依りて言ふなるかを知るべし。)そしてその上に、基督教は人間の平等を主張する。それは最早、單に無限に對する人間の關係から演繹してはなく、人間が神の子として認められてゐることからして、凡ての人が兄弟であると云ふことの根本的教理としてある。

それ故に、人間の間の平等の自覺を破壊するが如き有様に基督教を曲解するのは不可能である可き筈のやうに見える。然し、人間の心は鋭敏である。そして(恐らく無自覺的に、または半自覺的に)福音書に含まれて居る警戒や、人間が平等であると云ふこの明白な宣言を無効にせんがために、まつたく新しい工夫が案出された。この工夫はたゞある種の文書にばかりでなく、教會と呼ばれた人間の一團に無誤謬性を與へることにあつた。(そしてその人達は、彼等が自身で選んだ人達にこの無謬性を繼承させる權利を有つてゐるのだ。)

福音書にまでの微かなる附け足しが發明された。それは、如何に耶蘇が、今まさに昇天せんとする時に際して、單に神來の理を他の者に教ふ可きばかりではなく(福音書の原文に従へば、彼はそれと同時に、一般には利用されない、蛇や毒には害はれない權利を遺した)——何れの人達が救はれ何れの人達が救はれないかを決定す可き權威、並びに、此力を他の者に與ふ可き絶対の權威を或る人々にわけ

與へたと云ふことを語る。そしてその結果は何うなつたかと云へば、教會の此の觀念が固く是認されるや否や、基督の教の曲解を妨げる凡ての福音書の誡めが無力にされたと云ふことである。何故なれば教會は理性に對しても、神聖視されてゐた文書に對しても、その何れよりも優勢であつたからである。理性は誤謬の源泉であると認められ、福音書は、常識が要求するやうにでなく、教會を構成する者に適するやうに證明された。

「偏く世界を廻て凡の人に福音を宣傳よ……信する者には左の如き奇跡したがふべし。我が名に依り……蛇を操へ毒を飲むとも害なく、(馬可傳一六、十五—十八)」

斯くして、宗教を曲解する昔の三つの手段は——僧侶、奇蹟、聖典スクリプチュアの無謬性——凡てそのまゝ基督教の中へ許された。神と人との間の仲保者は教會がさう云ふ媒介者を有つ事が必要であり、便宜であると認められたから受け容れられたのである。奇蹟の確實は不壞の教會がそれを證明したから認められたのである。聖書の神聖は、教會に依つてそれが認められたから認められたのである。

かくて他の凡ての宗教の様に基督教も亦曲解された、たゞそれは之れ丈けの相違をもつて居た。即ち基督教が最も明白にその根本的原理——神の子として凡ての人間は平等であると云ふ——を宣言したところからして、この根本的原理を穩すためには、此の概念の助けを借りて、他の宗教に於けるよりもづゝと大きい範圍にまで爲された。かくて如何なる宗教も、教會も基督教によつて説かれた教理程にも、そんなに明白に理性や現代の智識と相容れない、或はそんなにも不道徳なものを説きはしな

い、太陽以前の光の創造、六千年前の世界の創造、方舟内に於ける凡て動物の居住等のやうな、舊約聖書の馬鹿話や、神の命令だから子供や全住民を虐殺す可べしと云ふ命令のやうな多くの恐ろしい不道徳などは云はないとしても、馬鹿々々しい宗教の教理は澤山あつたし、また今もあるけれども、その宗教の主な行爲が自分の神様を食ふことにあるが如き、そんなものは會つてなかつたと、ゾルテールがよく云つた不條理な聖餐のことは云はないとしても、そんなことはみんな論じないで置くとしても、神の母が母であると共に處女であると云ふことや、天が打開いてそこから聲があつたと云ふことや、基督が天に飛び込んで行つて何處かそこで父の右手に坐つてゐると云ふことや、或は神は一であると共に三つである。梵天、毘瑟拏、溼婆(婆羅門教の三神にして、梵天は創造を掌り、毘瑟拏は往時を掌り、溼婆は破壊を掌る。譯者註)のやうに三神ではなく、一にして而も三であると云ふことよりも以上に不條理なことがあり得やうか？そして怒りほい執念深い神がアダムアダムの罪のため凡ての人間を罰し、そして、人間が彼を殺し、そのために咒はれるであらうと云ふことを豫知しながら、彼等を救はんがために彼の子を地上に遣はすと云ふ、そして罪よりの救ひは洗禮を受けることや、或はこれらのことが實際に起つたと云ふことや、神の子は人間が救はれるために人間に依つて殺されたと云ふことや、そして神はこれを信じない者を久遠の苦みを以て罰するだらうと云ふことを信することにあると云ふやうな、此處恐る可き教理よりも以上に不道徳なものがまたとあらうか。

だから、あの人達がこの宗教の主なるトグマの補足と考へるもの——例へば種々の聖物や、諸種の神母の聖像や、各々その特質を有つてゐる聖者に恩寵を乞ふために上げられる祈禱のやうな——はさ

て措き、そして又、新教の教理であるところの豫定説の如きに就いては云はないとしても——凡ての者に認められ、ニカヤ信条に述べられた此宗教の土臺は、人がそれを信じられないほどそれほど不條理で不道徳で、それほど正しい感情と常識とに反してゐる。人間は何んな種類の言葉をでも、その唇で反復することは出来るけれども、何等の意味もないものを信することは出来ない。『私は世界が六千年前に創造されたことを信する。』とも、『私は基督が天に昇つて父の傍に坐つてゐることを信する。』とも、『神は一であると同時に三である』とも、口では云へる——だが誰もそんなことを信じ得ない。その言葉には何の意味もないのだから。それ故にこの曲解された形式の基督教を告白してゐる近代の世界の人間は、本當は何物をも信じてはゐないのである。

そしてそれが當代の特徴なのである。

\* カザンヤ、イペリアンの奇蹟を働く聖像や、その他多くの『神の母』は悉く耶蘇の母マリヤの繪畫で、露西亞ではそれに色々の不思議な力が有るやうに云はれてゐる。

## 七

現時の人々は何物も信じてはゐない、而も、彼等は希伯來書(間違つて保羅の書だと云はれてゐる)から取つた信仰の虚偽なる定義をもつて、自ら信仰を有つてゐると想像してゐる。その定義に従つた信仰は『信仰は望まれたる物の本質にして未だ見られざるものゝ證據なり、』と云ふことである。然し——信仰は心の状態であつて客觀的實在ではないのだから、「本質」ではあり得ないと云ふことは云は

ないとしても——信仰はまた「未だ見られざるものゝ證據なり」ではない、何故なら書簡に云はれた「證據」はその文脈が示してゐるやうに、單に輕信である、そして輕信と信仰とは異なる二つである。

\* 以上の論議で根本的なのは、「希伯來書」の作者が信仰を定義して、それは「合理的に」人を神に關係させ「行爲の指導を供給する」と云ふことを示さなかつたのに反して、トルストイの理解では、それは正しく、宗教のそのやうに、信仰の本質的特徴であると云ふことだ。この一節はこの版には變更されてゐる。何故ならトルストイが最初それを書いた時は、それは主として「希伯來書」第十一章第一節の露西亞及びヒスラヴ譯に對してであつた、従つて英吉利の讀者には解し難い。が、今は英吉利の公認譯に合ふやうに言葉遣ひがされてゐる、だから、同じやうに、容易に、希臘原本に合ふやうな言葉遣ひが出来る。(英譯者モード註、)

信仰は希望でもなく輕信でもなく、靈の特別な状態である。信仰は人間が世に於ける彼の地位が彼をしてある種のことを爲さしめないでは居られないやうな種類のものであると云ふことの自覺である。人間が彼の信仰に従つて行爲するのは、わが露西亞の信仰問答に云はれてゐるやうに、見えざるものを見えるものやうに信するからでもなく、また、彼の期待を達しやうと希ふからでもなく、宇宙の間に於ける彼の地位を定義したので、自然と彼がその地位に従つて行動するからである。農業家が地を耕やし、航海者が海へ乗り出すのは、信仰問答の云ふやうに、彼等が見えざるを信じ、彼等の活動に對して報酬を受けやうと希ふからではなく(さう云ふ希望は在るが、しかしそれは彼等を指導するものではない)彼等は、その活動を彼等の天職と考へるからである。それと同じに宗教的に信じてゐる者がある方法で行爲するのは見えざるものを信するからでもなく、またその活動に對して報酬を

期待するからでもなく、宇宙に於ける彼の地位を理解したから、たゞ自己をその地位に叶ふやうにするからである。若し人が社會に於ける彼の地位を勞働者、職人、役人、或ひは商人のそれだと理解したとすれば、従つて彼は働くことが必要だと考へる。そして勞働者、職人、役人、商人として、彼は彼の仕事をやる。恰度そのやうに、何れかの方法で、世に於けるその地位を定義した一般の人間は、必然に且自然にその定義に叶つた行動をする（定義と云つても、それは寧ろ何うかすると定義よりも疊つた自覺である。）斯くの如く、例へば、世に於ける自分の地位を神に選ばれた國民の一員、即ちもし彼にして神の保護を樂まんがためには彼の命令を遵奉しなければならぬ様なものと定義した。或者はこれらの命令を遵奉するやうな風に生きるであらう。もしくは、自分の地位をもつて、種々の形式の生活を通過した、そして通過して居るもの、そして自分の未來の善悪は、自分の行爲の上に多少とも懸つてゐると云ふ假定の上に定義した他の人は、その定義に依つて生活を指導されるであらう。そして、彼の地位を、意識がその中で一時的に燃焼し、やがては永久に消滅して了はなければならぬところの原子の偶然なる結合のそれだと定義した第三者の行爲は最初の二人の者のそれとは違ふであらう。

これらの人達の行爲はかなり違つてゐるであらう、何故なれば彼等は彼等の地位を違つて定義したから。即ち、彼等は違つた信仰を有つてゐるから。信仰はたゞこれだけの相違をもつて居る外は全く宗教と同じものである。「宗教」と云ふ言葉をもつては、私達は私達の外部に於て觀察される何物かを意味する。私達が「信仰」と呼ぶところのものもそれと同じである、たゞそれは人がその内部に於いて

經驗するものである。信仰は人間が無限の宇宙に對して意識して居る關係である、そしてこの關係から彼の活動の方向がきまる。だから、眞の信仰は決して今日の知識に對して不合理でもなければ、相反するものでもなく、人が想像するやうに、また、*Credo quia absurdum*（不合理なるが故に我信す）と云つた教會の父に依つて表現されたやうに、超自然的或は不合理であると云ふことがその特質ではあり得ない、それと反對に眞の信仰の主張は、例へば證明はされなくとも、決して理性に反した、或ひは人智と相容れない何物をも含んでゐない。却つて信仰に依つて供給された概念なくしては不合理で且つ矛盾して居る様に見えるところの人生に於けるそれ等のものを常に説明する。

斯くの如く、例へば、宇宙、世界、動物、人間等を創造し、若しその民が彼の律法を守るならばそれを保護すると云ふことを約束したところの、至高、永遠、全能なる者を信じた古代希伯來人は、彼の智識にとつて不合理で相容れない何物をも信じなかつた。却つて、この信仰は、そう云ふ信仰なくしては彼に取つて説明し難かつた人生の多くのことを説明した。

同様に、我々の靈は動物の裏に住んでゐた、そして、我々の送る生活の善悪に従つてその靈は或はより高い動物に入り、或はより低い動物に入るのだと信じてゐる印度人は、この信仰の助けを借りて、それなくしては彼に説明がつかなく見えた多くのものを彼自身に説明した。

それは、生は悪であり、生の目的は欲望の絶滅に依つて達せられる平和であると考へる人に取つても同じである。彼は不合理なものを何も信じない、却つてその反對に、彼の生の觀察をその信仰がなかつた時よりも一層合理的にする何物かを信ずる。

それは、神が凡ての人間の精神的の父であり、最も高い人間の恩寵は人間が神の子であることと全人類の兄弟であることとを認める時に達せられると云ふことを信する眞の基督教徒に取つても同じである。

これらの信仰は凡て、例へ表明が出来ないにしても、それ自らは不合理でなく、反對にそれなくしては不合理に矛盾して見える人生の出来事に一層合理的の意義を與へる。その上、これらの信仰は凡て、宇宙に於ける人間の地位を定義することに依つて、不可抗的にその地位に適つた行爲を要求する。だから、若し宗教的教訓が何物も説明せずして、たゞ人生に就いての理解を混亂させる不合理な命題を主張するとすれば、最早それは信仰ではなく、眞の信仰の主要なる特質を既になくしてしまつたところの、また人から何物も要求するところではなく、反つて彼等の柔順なる要具となつた信仰の曲解物である。眞の信仰とその曲解物との主要な區別の一は、曲解された信仰に於ては、神が人の犠牲と祈禱とに應じて人間の欲求を満し人間に仕ふ可きを人間が要求するところにある。然し、眞の信仰に於ては、神はその意志の充足を人間に要求する。即ち人間が神に仕ふべきことを要求する、と云ふことを人が感ずる。

そして正しくこの信仰が當代の人間に缺けてゐるのだ——彼等はそれがどんなものだかをさへ了解しない。そして彼等は、信仰をもつて、信仰の本質として彼等に與へられたものを口に反覆することか、または、教會基督教が教へるやうに、彼等の欲求を達しさせるやうに扶けると稱するところの儀式の實行にありとする。

## 八

いまの世の人達は何等の信仰もなく生きてゐる。一部分、教養のある、富有な少数者は、教會催眠術から解放されたところで、何物をも信ぜず、有らゆる信仰を不條理か、さもなければ單に大多數者を屈從させて置く手段の如くに見る。莫大な、貧しい、無學な多數者——少數の例外を除けば、眞に誠實な人達から成つてゐる——は未だ教會の催眠術にかゝつてゐて、彼等に信仰として暗示されたものを今も尙ほ信じてゐるのだと考へてゐる。たとひそれは、人間に彼の地位を鮮明にしてやる代りに、只管それを眺めるだけなのだから本當は信仰ではないと云へ。

催眠術にかゝつて居る多數者に對する、何者も信じない不誠實な少數者の此の地位及び、關係は、今日の所謂基督教界の生を形づくるところの條件である。そしてこの生は——催眠術の手段を手握つてゐる少數者と、催眠術にかゝつた多數者との何れの支配者階級の殘虐や不道德やの理由によつても、勞働する大多數の群の打潰され痴鈍にされた状態のためによつても、共に實に恐るべきものである。宗教的衰頹の如何なる時代に於ても、有らゆる宗教、殊に基督教の重要な特質——人類平等の原理——の等閑や忘却も現代に於て降墮したほど低い水準に落ちたことは未だ曾つてなかつた。

現代に於いて、人間と人間との間に恐る可き殘虐の一つの重要な原因は——全然たる宗教の缺陥以外の——人間に彼等の行爲の結果を隠すところの上品に複雑化された生活である。如何にアッティラスや成吉思汗やその從者が殘虐であつたにしろ、面と向つて人を手づから殺すことは、さすがに彼等



と雖も不愉快であつたに違ひない。その虐殺の結果は——殺戮された者の近親者の哀悼、眼前に横たはる屍——一層に不愉快であつたに違ひない。だから彼等の残虐の結果はそれを減少させる傾向を有つてゐる。しかし今日では吾々は複雑な方法をもつて人を殺す。吾々の残虐の結果は残虐を拘束する様になる効果が少しもない程にも、其處にも注意深く掻き消され、そして吾々の眼から隠されて了ふ。斯くして一組の人間の他の組に對する残虐は愈々益々増加し來つて、遂には曾つて達したことのないやうな大きな面積にまで達する。

若し今日に於いて——ネロのやうな卓抜んでた悪人とは云はない——極く普通な商人が、その中で富める病人が浴みせんが爲めに人の血の池をつくり度いと欲するならば、(さうすることを學問のある診療者によつて命ぜられた時には)彼はさうすることを妨げられないであらう。(もし彼が受入れられて居る尊敬すべき形式を守りさへすれば、即ち人民をして彼等の血を流さしむるために暴力を用ひないで、たゞ、血を流すことなくして住むことを得ない地位に彼等を置くならば)そしてまた僧侶を備つて、かつて彼等が大砲や、鋼鐵艦や、監獄や絞首臺を聖別したやうに新しい池を聖別せしめ、又、科學者を備つて、かつて彼等が戦争や淫賣屋の必要の證據を發見したやうに斯かる制度の必要と名分の證據を發見せしめさへすれば……)

\*一八六四年のわが「傳染病豫防條例」(一八六六年帝國醫師會に依つて賛成された)に類似の法律が、公認國家の制度と共に未だ露西亞に存在した。

凡ての宗教の根本的原理——人間の平等——は今告白されてゐる宗教ではそれほど等閑視され、忘

却され、有らゆる種類の不合理なドグマの下に埋められてゐる。またこの同じ不平等は科學に於ても(生存競争及適者生存の學說中に)生の必然的な状態であると認められてゐる——少數支配者の便宜のためには幾百萬の生命を破壊する事も極く通例な必要な出來事であると考へられ、絶え間なく行はれて居る程にも。

今日の人間は十九世紀中に専門的科學に依つて成就された見事な前例なり、素晴らしい進歩なりに對する歡喜を、何うして十分に表白していゝかを知らない。

第十九世紀中に於けるほど自然力の征服のために斯くの如き物質的進歩が爲されたことは、未だ曾つて歴史にないことは疑ひない。然し、また、それと同時に、彌増しに獸性化された基督教の人類に依つて與へられたほど、人間の獸的傾向を抑へる凡ての力から解放された斯くの如き不道德な生活の例が未だ曾つて歴史中に存しなかつたことも疑はれない。第十九世紀中に成就された物質的進歩は偉大なものであつた。然しその進歩は、人類が曾つて成吉思汗や、アッティラや、ネロの時代に於てさへ犯さなかつたほどの、最も本質的な道德の要求を等閑視する事に依つて贏ち得られた。そして贏ち得られつゝあるのだ。

裝鋼艦や、鐵道や、トンネルや、印刷機や、レントゲン光線が大變よいものであることには疑ひはない。それはみんな大變よいものである、然しまた同じ様によいものは——ラスキンが云つてゐるやうに、他の何物とも比較にならないほどよいものは——人間の生命である、而もそれ等の中の幾百萬が、生命を美化するどころではなく、却つてそれを醜くする甲鐵艦や、鐵道や、トンネルの獲得のため

に今や無残にも滅ぼされて居るのだ。これに對する普通の答辯は、斯くの如く今行はれてゐる人間の生命の破壊を止める可き手段が既に發明されつゝある、時と共に發明されるであらうと云ふことである——然しそれは嘘だ。人間がその凡ての人を彼等の兄弟と考へない間は、そして人間の生命を有らゆるものゝうちで最も神聖なもの——それを支撐することが第一にして最も直接なる義務である以上、如何なる理由の下にも犠牲に供す可からざるもの——と考へない間は、即ち、人間がお互に宗教的に相遇さない間は、彼等は何時もある個人の利益のために相互の生命を滅ぼすであらう。百磅を費すことに依つて——彼の欲するがまゝに投げ入れられる幾許かの人命をもつて——同一の目的を達し能ふのにも拘らず、千磅を費すことを承諾するが如き馬鹿は一人もあるまい。市加古の鐵道では毎年ほど同数の人間が轢殺される。鐵道の所有者は、極めて自然に、これらの人の轢殺を防ぐ手段を探らない。何故なれば彼等は、被害者とその家族に對する年々の支出が、斯かる手段に費すものゝ利子よりも少ないと云ふことを計算してゐるから。

自己の利益のために人命を滅すこれらの人は輿論に依つて侮辱されるか、或はまた手段を講じさせられるやうなこともあるだらう、だが人間が宗教的ではない間は、そしてその行爲を神に見られるためではなく、人に見られるためにする間は、彼等は、ある場所では人の生命を保護する手段を講じながら、他の事ではまた、金儲けをする最上の材料として人の生命を取扱ふ。

もし人の生命を惜しみさへしなければ、自然を征服する事は、鐵道や、汽船や、博物館や何かを建設する事は、容易である。埃及の王達はその等のピラミッドを誇りとした、吾々はそれを面白がつて

る。(その建立のために犠牲に供せられた幾百萬の奴隸の生命をば忘れて了つて。)同様に吾々は吾々の展覽會場や、裝甲艦や、海底電線を面白がつてゐる——何を以て吾々がこれらのものに拂ふかを忘れて。吾々はこれを見て誇りに感じてはならない、それが凡て奴隸に依つてはならず、自由なる人間に依つて爲されるまでは。

基督教國民は亞米利加印度人や、印度人や、亞弗利加人を征服し屈從させた。いまやまた支那人を征服し屈從させつゝある。そしてさうすることを誇りとしてゐる。だが、實際、これらの征服と屈從とは基督教國民が征服された者達よりも精神的に優れてゐることからではなく、正反對に、彼等が彼等に對して精神的に遙かに劣等であることから結果するのである。印度人や支那人は勸定に入れないで置いても、ズールー人の間にさへ、ある行爲を命じ、他の行爲を禁ずる義務的な宗教上の規範があつた、今もある。然しわが基督教國民の間には何もありません。羅馬は正に羅馬が一切の宗教から脱した時に世を征服した。たゞより大なる程度に於ける同じものが今や基督教國民の状態である。彼等は凡て宗教を斥けた同一の状態にゐる。だから、彼の間には争論が在るにも拘はらず、彼等は凡て結合されて一つの強盜の盟社をつくつてゐる、そしてその中では、窃盜や略奪や背徳や殺人やが、單獨にもまた集合的にも、少しも良心の呵嘖を惹き起さないで(先達て支那にあつたやうに)最も大なる自滿を以てさへ行はれるのだ。ある者は何物をも信じないで、それを自慢にしてゐる。他の者はその自己の利益のために、普通人に催眠術をかけて、信仰として受納れさうとするものを信するが如き眞似をしてゐる。然るに更に他の者は——大多數者、全體としての普通人——彼等が受けさせら

れた催眠術的暗示を一つの信仰として受け容れる。そしてすぐれたる無信仰な催眠術者達が彼等に要求する凡てに奴隷のやうに服従してゐる。

そしてこれらの催眠術者の要求するものは、何等かの方法で彼等の生の空虚を満たさうと試みたネロや彼の如き凡ての者が常に要求したものの、即ち、彼等の不健全にして過度なる奢侈の満足である。奢侈は人間を奴隷にする以外の手段では得られない、そして人を奴隷とするや否や奢侈が増加する。奢侈の増加は不可避免的にその後には奴隷の増加を持ち來たす。何故なれば、たと凍え、飢え、そして缺乏に縛りつけられてゐる者だけが、「彼等」の欲することをしないで、彼等の主人の娯樂のためにのみ要求されることをして彼等の一生をつとけるであらうから。

## 九

創生記第六章には記者によつて記された深刻な意味の一節がある。神が洪水以前に、人間をして彼等に仕へしめんがためにと人間に與へた精神が、たと彼等自らの欲望のために使用されるのを見て、彼等を創造したことを後悔し、彼等を全く破壊しつくさない前に、人間の命を百二十年に縮めやうと決心したと。聖書に依つて見る、神をして人間の命を縮めさすに至つたその同じ事が、再びわが基督教界の人々の間に行はれてゐる。

理性は人間をして宇宙に對する彼等の關係を定議させる力である、そして凡ての人間は宇宙に對して同一關係の上に立つてゐるから、宗教——それはその關係の説明である——は人間を結合すると云

ふことになる。そして人間の間の結合は彼等に達し得可き肉體的及精神的の何れも最高の幸福を與へる。

最高にして最も完全なる理性を以てする完全なる結合、従つて完全なる幸福は、人類がその方向つて努力する理想である。そして凡ての宗教は、宇宙とは何であるか、その住民とは何であるかを問はれた時に、ある社會の凡ての人間に對して同一なる答を供給することに依つて彼等を結合する。そしてまた、彼等を結合することに依つて彼等をして幸福の獲得に一步を近づかしめる。けれども理性は、神に對する人間の關係及びそれに照應する人間の活動を定義する本來の器能を抛擲するや否や、肉に奉仕する様にされるのみならず、そして他の人間及び同じ生物との残酷なる闘争に奉仕する様にされる。そして人間の性質にも運命にも反してゐるところの惡の生活の辯明に使用される。そして、そこに大多數の人々が今惱んで居る恐るべき災厄や、そして人をして合理的なそして正當な生活に歸らしむる事は全く不可能だと見える様な状態が起つて來る。

最も粗雑な宗教の教理に依つて互に結合されて居る異教徒でさへも、吾々の時代の偽基督教國民(何等の宗教もなしに生活してゐる、そしてその中の最も進んだ人達は、宗教などは不必要だ、そんなものなしに生活する方が餘程いゝと彼等自らも確信し又他の者にも暗示する)よりはすつと真理の概念に近づいて居る。

異教徒の中には彼等の信仰が彼等の増加しつゝある智識や、また彼等の理性の要求と撞着するのを見て、もつと彼等の國民の精神的状態に適ひ、彼等の同邦人と同信者となし受け容れ易い新宗教を提出

し或は採用するところの人が見出されるかも知れない。然るに吾々の世界の人は——そのうちのあつたものは宗教をばそれを以て普通の連中を屈從させて置く道具だと看做し、他の者は凡ての宗教を馬鹿げたものと考へ、更に他の者（國民の大多數者）は、粗悪な欺瞞の催眠術の下に生きながら、彼等は眞の宗教を有つてゐるのだと考へてゐる——如何なる進んだ運動も分らなく、また眞理の方への如何なる接近もできなくなつて来る。

肉體的な生活に關する彼等の事物の改良や、彼等の精鍊された怠惰な論理（たゞに彼等の生活を辯明するばかりでなく、また歴史の如何なる時代の他の如何なる民衆よりも彼等が優越であることを證明しやうと目かけてゐるところの）に誇つて、彼等はその無智と不道德とに固定する、また、彼等が未だ曾つて人類の到達出来なかつた高所に立つてゐることや、無智と不道德との通路に沿つた一步一步が、文明と進歩とのより高い平面に彼等を上げると云ふことの確信でもつて固まつて了ふ。

## 10

人は自然に物質的（肉體的）活動と合理的（精神的）活動とを一致せしめようと願つてゐる。彼は何うにしかしてそれを一致せしむるに至るまでは平安を得ない。然しそれに達するには二つの異つた方法がある。一つは、或る一つの動作又は諸動作の必要と欲求とに對し理性を用ゐて決定を與へ、然る後にその決定に基いて行動することである、他の方法は、感情の力によつて行動し、然る後にその爲したる行動に對する智的説明もしくは辯明を發明することである。

人の理性と動作とを合致せしむる第一の方法は、或る宗教を有し、その宗教の教理に基いて何を爲すべきであるか、何を爲すべからざるであるかを決定するのを特徴とする。第二の方法は、一般に、宗教的でなく、そして動作の性質を判断すべき何等の一般的標準を有しない。それ故に、常に行動を理性に服従さすことによらずして、感情に支配されて行動する結果、自らの爲したことを辯明せんがために理性を用ゐることによつて理性と動作とを一致せしむる人の特徴である。

宗教的の人は——彼自らの活動及び他人の活動のいづれが善であつて、いづれが惡であるかを知り、又、何故に甲が善であつて乙が惡であるかを知つて居る——その理性の要求と彼自身及び他人との間に何等かの矛盾を見る時には、彼は如何にすれば最もよく彼の動作をその理性の要求に一致せしむるを得るかと云ふことを察することによつて、それ等の矛盾を除去すべき手段を得んがために彼の理性の全力を用ゐることを惜まぬであらう、然し宗教のない人は——行動が彼に與ふる快樂を除いての外はその行動の性質を判別すべき標準を持つて居ないところの——感情の力に負かされて（その感情は多様で屢々矛盾してゐるものだが）職らず／＼のうちに矛盾の淵に墜ちるのである。そしてその矛盾に墜ちてしまふと云ふと、多少念入りの、そして巧みな、しかし常に不眞實な論證によつてその矛盾を解決し、若しくは隠蔽せんと試みる、それ故に眞に宗教的な人々の推理は常に單純で、直入的で、眞實であるのに反して、宗教を缺いて居る人々の心的活動は、特に煩瑣で繁雜で、そして不誠實なものとなる。

私は茲に通常な例を引かう、それは不行跡に一身を耽けらした人の例である。即ち、貞節のない、

眞實でない、若しくは結婚せず不行跡に一身を持崩す人の例である。若し彼にして宗教的であるならば、彼はこれのよくない事を知る、そして彼の理性の全努力は、此の悪徳から解脱すべき手段を見出すことに向けられる。そして彼は姦通者との交際を避け、彼の仕事の量を増し、嚴格なる生活を整へ、情慾の對象として女を見ることを自らに許さない様にする。そして、凡てこれは頗る明白であつて誰にでも理解が出来る。然し若しその不貞なる人が宗教をもつて居ない場合には、彼は直ちに、女と戀に陥ることは非常に善いことだと證言すべき有ゆる種類の説明の方法を工夫し初める。さうしてかくして我々は、靈魂の類縁や、美や、自由戀愛などに關して、最も複雑で、狡猾で、そして念入りの凡ての種類の理由を掴み出すのである。そして、これ等が擴がれば擴がる程問題は益々曖昧にされ、その本質的眞理が隠蔽される。

宗教なきこれ等の人々の間にもこれと同じことが活動及び思想の全野に起る。その基底に横はつてゐる矛盾を隠さんが爲めに、複雑で煩瑣な論究が積み上げられる。その論究は、有らゆる種類の不必要なるガラクタでもつて心を一ぱいにし、重要にして且つ本質的な事から人々の注意を背かしめ、又今日の人民が、それに注意することなくしてその中に住んで居る欺瞞に固まつてしまふ様にさすことによつてされる。『その行ひの悪しきによりて光を愛せず反つて暗を愛すればなり、凡て惡をなすものは光を惡み、其行の咎められざらんがために光に就らず』と福音書が言つて居る。

それ故に、今時の人々はその宗教に缺けてゐる結果として、最も慘酷で野獸的で、そして不道德な生活をなし、又、その複雑で煩瑣で、そして不利益な心的活動を——この種の生活の缺點を匿す事に

よつて——人々の多くが全く善惡眞偽の識別能力を失つてしまつた程の不必要なる錯綜と混亂にまで持ち來たらしめた。

吾々の時代の人々には、彼等が直接に且つ單純に近づき得るたゞの一つの問題も存しない、經濟的、國家的、政治的、外交的、科學的、勿論また哲學的及び宗教的の凡ゆる問題は、かくも人爲的に虚構的に表示される。そしてそれ故に、意味や言葉に對する念入りの曲解や詭辯や論議やの厚い衣でもつて包まれてしまひ、その結果はかゝる問題の一切の議論が、たゞある一點をグル／＼と回轉し、そして少しも進まない、聯結繩のない輪車の様に、そのために造られた一つの目的、即ちその中に人々の住んで居るまた行つて居る惡を自分及び他人から匿すことより外、何等の結果をも持ち來さないことになる。

## 一一

今日、科學と稱ばれて居るどの領界に於いても、人々が諸々の智識の世界の研究に向ける心的努力を無にする全く同じ特徴が見られる。その特徴と云ふのはこれである。即ち、すべてこれ等の科學的研究が、その解答を求めて居る根本の問題を避け、そして研究が何者にも導かずして、反つて進めば進む程混亂して來る様な第二次的な事を研究すると云ふことである。そしてこれは實に、何が研究されねばならぬか、何故に一つを前に研究して他を後にしなければならぬかを決定する宗教的人生觀の要求に従ふのでなしに、たゞ行きあたり次第にその研究の對象を撰擇する科學にとつてはこれより外

ではあり得ないのである。

たとへば今日流行の社會學及び經濟學の問題に於いて、そこには實際『ある人民が何もしないで居り、他の人民が彼等のために働いて居ると云ふのは一體何のためか』と云ふ唯一の問題がある様に見える。若しなほ一つの問題があるとすればそれはかうであらう。『何故人民は別々に働らいてお互に妨害し合ふのであるか、またもつと利益のある協力をなさないか』と。併し此の問題は第一の問題に含まれて居る。何となれば若し不平等がなかつたならば、闘争もない筈だから。實際こゝには只だ此の一つの問題しかない様に見える。然るに科學はそれに答へやうともそれを發議しやうとすらもしい。反つて遙かに縁遠いところからその議論を初め、その結論をして此の根本的問題を解決することの出来ない様な若しくは解決のたすけともなり得ない様な風にしてしまふ。議論は、今迄どんな風であつたのか、今、現在何うであるかと云ふ事に關したことから始められる。そして、過去及び現在が天に輝く星の進路の如く不變な何ものかの如くに考へられる。その結果、抽象的な概念が工夫される。——價格、資本、利得、利子——そして智識の複雑なる働きが、今ではもう既に百年も續いて居る論争の間に生じた。實際に於いて問題は極めて容易にそして單純に定め得るのだが。

その解決は、凡ての人は兄弟であり平等であるから、各々は自分か他人から爲して欲しい様に他人にもするといふ此の事の中に存する。それ故に、事件の眞個の中核は、誤れる宗教的律法の破壊と、眞律法の建設との中に在る。然るに吾々の基督教界の指導者たちは、嘗に此の解決を受納れたがらなればかりでなく、反つて斯る解決の可能を隠匿しようとする。そして此の目的のために怠惰なる智識上の遊戯をしてそれを科學だと云つて居る。

同じことはまた法學の領界にも起る、或る人はかう想像するであらう。その根本的な問題は、何故世には、他人に向つて暴行を加へ、掠奪し、牢屋に入れ、處刑し、戰場に送り出し、その他かうした多くの事をするを自らに許すところの人民が存して居るか云ふことであると。もしもそれがその問題に適應して居る唯一の見解——宗教的立場——から考へられさへするならば、此の問題は甚だ簡單である。宗教的見解から云へば、人はその隣人に暴行を働くことは出来ない。又、働くべきでない。それ故に此の問題を解するためには一事が必要である。即ち暴行を許容する一切の迷信と一切の詭辯とを破壊し、そして暴行の可能を明白に排斥するところの宗教的原理を人々に注文することである。

然るに、その指導者達は嘗にこれを禁じないばかりでなく、反つて此の解決の可能と必至とを人々に隠匿せんがために、有らん限りの心的詭計を用ひる。彼等は諸種の法律——民法、刑法、警察法、教會法、商法等——の山なす程の本を書く。そして此等の題目に就いて述べたり議論する。そして彼等が嘗に有用なる事をして居るばかりでなく、非常に重要な仕事をして居るのだと云ふ事を立派に斷言する、その本質に於いては平等である人々の間にあつて、何故ある者が他の者を審判し強制し掠奪し處刑するかと云ふ問題に就いては、彼等は、嘗に何等の答案をも與へないばかりでなく、そんな問題の在る事をすら認めない。彼等の教理に従へばこれ等の暴行は人によつて行はれるのではなくて、國家と稱するある種の抽象物によつて行はれるのである。

同じ様にまた、今日の科學者達は一切の根本的問題を避けて、それを通り越して行き、そして智識の全野に於ける内的矛盾を隠蔽する。

歴史の領域に於いてもそこには唯だ一つの問題がある。——全人類の千分の九百九十九を占めて居る勞働者達が何うして生きるかと云ふことがそれである。此の問題に對しては答へらしいものすらない。此の問題は存在さへしなかつた。しかしルイ十一世の胃痛だとか、英蘭土のエリザベスや恐怖王イワンの姦悪だとか、そして誰が彼等の宰相であつたとか、如何なる詩や喜劇が此等の王や宰相たちを喜ばしめんがために文學者達によつて作製されたとか云つた様な事に就いては、或る派の歴史家達によつて山なす書物が書かれて居る。かと思ふとまた、他の派の歴史家達は吾々に告げて、如何なる種類の土地に或る人民が住んだか、何を彼等は食つたか、何を賣つたか、何麼着物を着たかと云つた様な、そして概して人民の眞の生活に何等の力をも有つことの出来ない、寧ろ彼等の宗教の結果であつた（それを此の階級の歴史家達は、人民の食つた食物や着た着物の結果だと想像して居る）ところのものを語る。

しかし「勞働者は以前何麼風に住んで居たか」と云ふ問題に對する答へは、たゞ宗教を彼等の生活の必至の條件であつたと認識する事によつてのみ與へられる。それ故にその答へは國民の信奉した宗教（彼等の境遇を色々にしたところの）の研究によつてのみ見出される。

自然科學の研究をなすに當つても、或者は人間の常識を暗ます必要は殆んどなかつたと考へるであらう。しかし茲でもまた、今日の科學が採用した考へ方に從へば、『生物（植物及び動物）の世界は何

であるか、そして何うしてそれが更に小分されるか』と云つた様な問題に對する最も自然な答へを與へる代りにある意情な曖昧なそして全然不必要なお喋りが、（主として聖書の世界創造説に當つたものであるが）何うして有機體が存在するに至つたかと云ふことに關して始められる。本當は、それは人間が知る必要もなく知り得ないところのものであるのにも拘らず。何となれば此の起源は、たとひ吾々がそれを説明しても、常に果てしなき時間及び空間の中に吾々から隠されたまゝで居るから。そして此等の題目に就いて、學説や論争や補遺的學説などが發明された。幾百萬の書物となつた。そして、それから抽き出される案外な結論は、たゞ此の一事である。即ち、人間の從はねばならぬ人生の法則は、生存競争でなければならぬと云ふところの。

その上、工藝學や醫學の如き應用科學は、宗教的原理の指導がないので、不可避的に、その合理的な目的から離れ、そして誤れる方向を取り初める。かくて、工藝學は人民の勞役を輕める様にはしないで、たゞ富者の用ふる改善をのみ成就する。そしてその結果は、貧富の懸隔を更に／＼甚しくし主人と、奴隸との間を益々疎隔する様にする。若し何等かの利益が（パンの屑が）此等の發明や改善から勞働階級のものにも及んだとしても、それは決して人民のために企劃されたからではなく、たゞその性質上人民にも及ばないでは居られなかつたからである。

醫學に於いても同じである。それはたゞ、富める者のみがそれを收得することが出来る様な状態になつてしまつた程にもその誤れる方向に進んだ。然るに、庶民はその生活様式と貧とのために（そして貧民の生活の改善に關する問題が閉却された）と云ふ事實のために、たゞ、如何に醫學がその眞の目

的から迷ひ出たかと云ふことを最も明白に示すところの條件の下に於いてのみ、それを利用することを得る。

しかし此の根本的問題の回避及び曲解は、最も痛切に哲學と呼ばれて居るところの者のうちに於いて見られる。哲學にとつて答へなければならぬ一つの本質的問題は、『何を余はなさねばならぬか』と云ふ事である様に見える。そして基督教國民の哲學に於いては、此の問題に對する答へが——スピノーザやカントや（彼の實踐理論批判に於いて）やシヨベンハウエルや、特にルツソーなどの場合に於けるが如く、必要のない、曖昧なものと結び合はされて居るとは云へ、兎に角その答が與へられて居る。併しヘゲル（存在するものは何でも合理的だと教へたところの）から此方、『何をなさねばならぬか』と云ふ疑問は、その背影の方に押しやられてしまつて、哲學はたゞ、物をその有りのまゝに研究し、それを既に拵らへ上げられる理論にあてはめる事のみ没頭する様になつた。それが墮落の第一歩であつた。人間の思想を更に低い標準に導いた次ぎの階段は、たゞ單に、闘争が植物や動物の間に於いて觀察されると云ふ丈けの理由でもつて、生存闘争を人生の根本法則と認めたところに在る。その學説の變化の下に、弱者の滅亡は非難さるべき法則でないと斷定される。最後に第三の階段が來た。半狂のニイチエの獨創をもつてした子供らしい努力がそれである。それは物事を全體として若しくは聯絡のあるものとして表はさない——それは全く根柢のない不道德な思想の出鱈目な接ぎ合せに過ぎない——而もこれは、進歩せる人々によつて哲學科學の最後の言葉として受納められた。『我等何を成すべきか』と云ふ質問に答へて、忠告は明らかに提出された。『爾の欲するがまゝに生きよ。他人

の生活を毫も顧慮するな』と。

若し、今日の基督教的人類が墮落したところの迷妄と獸性との恐るべき状態を疑ふものがあるならば、然らば、近頃阿弗利加及び支那に於いて行はれ、そして宣教師達によつて辯護せられ、世界の凡ての偉大なる人物によつて功勳として認められたところの罪惡に就いては言はなくとも、ニイチエの著書の方外なる成功ばかりでも、確實不動なる證據を供給して餘りがある。最も無遠慮に結果を目標したある支離滅裂な書きものが、大膽な、然し惻巧でない、病的な、誇大妄想に悩んで居る、一獨逸人によつて書かれて居る。此等の書物はその才能に於いてもその價値に於いても公衆の注意を要請すべき理由はない。かゝる書物は、たゞにカントやライブニッツやヒュームなどの時に於いてばかりでなく、今から五十年以前の時代に於いてすら一般の注目を惹かないばかりでなく、現はれる事すら出來なかつたであらう。然るに吾々の時代に於いては、所謂教養のある階級の一切のものによつてニイチエ君の謔言が歡ばれる。彼等は彼に就いて議論する、彼を説明する、そして彼の著作の無数の部數が凡ゆる種類の國語に印刷される。

ツルゲネエフは諧諷的に云つて居る。世には「顛倒されたる平凡事」があると。そしてそれ等は才能の缺けた、しかし注意を惹かんことを欲して居る人民によつて屢々用ゐられる。誰だつて、たとへば、水は濡めつほい事を知つて居る。而し突如として何人か、眞面目くさつて水が乾いて居る——氷でない、水が乾いて居る——と、云ふものがあつたならば、そしてもしその説が最も確らしく云はれさへすれば必ず一般の注意を惹く。



同じ様にまた、徳は、人の情慾を抑へて自己を否定したところに成立する事を全世界が知つて居る。これは昔に基督信徒ばかり（それとニイチエは戦つて居るのだと想像して居るところの）によつて知られて居るのではない。しかし婆羅門教に於いても、佛教に於いても、儒教に於いても、古えの波斯の宗教に於いても、一切の人類によつて認められたところの、永遠にして至高の法則である。然るに、突如として或る人が現はれて、自己否定や柔和や謙抑や愛など、凡て此等のものは人類を破滅させて居る害悪だと云ふ彼の發見を、彼は凡ての他の宗教の事を忘れて基督教に關して云つて居る）宣傳する。かゝる斷定が最初一時は人民を迷はすだらうと云ふことは理解する事が出来る。然し少し反省して見て、此の不思議な斷定の何等の證明をも、その著作の中に見出すことの出来ないところで、苟も合理的な人でさへあるならば、かゝる書物を拒絶し、たゞもう、今時かゝる書物が、その出版者を見出すなどとは、どんなに莫迦氣なことであるかを驚くべきである。ところが、ニイチエの著作に對しては、此の咒詛が採用されなかつた。偽文明人の大多數は眞面目に「超人」説を議論し、その著者をデカルトやライブニッツやカントを繼承したる大哲學者だとする。

そして凡てこれの起る所以は、今日の偽文明の多數者が、徳だとか、その主たる根柢である自己否定だとか愛だとか、凡て彼等の送つて居る動物的生活を制限したり非難する處のものを思ひ起さしむる様なことは好まないのと、自分の幸福と偉大とを他人の生活によつて築きあげるところの制度を辯明する——たとひそれが、ちぐはぐに、不合理に支離滅裂に説明されて居やうとも——利己主義や残忍の教理を（即ち彼等のよつてもつて生活して居る制度を）次第に歡迎する様になるのによるのである。

ある。

一一一

基督が學者とバリサイ人を咎めたのは、彼等が天國の鍵をとつて、自らも天國に入らねば他の者をも入らしめなかつたからである。

今日の博學なる學者も同じことをする。彼等は天國の鍵をもたないが、文化の鍵をもつて居る、そしてその中に自分でも入らねば他人をも入れない。

聖師——祭司は凡ゆる種類の欺瞞と催眠術をもつて、基督教は一切人の平等を宣言する教でない、それ故に今日の一切の生活體制を破壊する教でない。反つてそれは、それとは反對に物の現存の秩序を支配する、そして、星が區別される如く、人をも區別し、それを異りたる階級に屬するものと——現存の秩序が神によつて定められ、そしてそれに絶対に従はねばならぬと言ふことを認めて——見做さなければならぬと吾々に告げる教であると云ふ思想を人々に注入する。事實それは抑壓されて居る者に暗示して曰ふ、彼等の地位は神がさうであらん事を欲するところのものであり、彼等はその抑壓者に臣従して、柔順にして謙遜に、それを忍ばねばならぬ、而もその抑壓者たちは自ら少しも柔順で謙遜でもある必要がない。反つて皇帝だとか、國王だとか、法王だとか、監督だとか、或は凡ゆる種類の世俗的もしくは靈的貴人の如く、榮華と贅澤との間に——それを支へるのがそれに臣従するものゝ義務である——住みながら、他人を教へたり罰したりして正すべきである。そして支配階級は、

(彼等が力をこめて支持するところの此の偽教訓に感謝するがいゝ) 人民を支配し、彼等の怠惰と悪徳を支ふる手段を人民から献けしめるべきだと。而も此の催眠術から這れ出た唯一の人達は——それは科學的人民だ。彼等は此の催眠術から脱却したから人民をその抑壓から救ひ得る唯一の人達だ——人民を此の催眠術から脱れしめたいのだと口では言ふが、實際さうはしない。彼等はその目的を達するであらうことを成す代りに、その反對をする。そしてさうすることによつて人民に仕へるのだと想像する。

或る者は考へるかも知れない。此等の人々は——群衆を従はせるところの人々が最も恐れられるのは一體何と云ふことであるかと云ふことを皮相に觀察することからしてさへ——何が眞に人々を動かすか、何が眞に彼等が今占めて居る地位を保たしめるかと云ふことを見るだらう、そして彼等の全ての力をして、その根源に向けしむるであらうと。而も彼等は此等のことをなさないばかりでなく、全くそれは無用なことだと考へる。

それは恰度、此等の人々が事實を見ることを欲しなかつたかの如くである。彼等は致々として、そして眞摯に、凡ゆる種類の事を人民のためにする。しかしその第一に必要な一事を成すことをしない。彼等の活動は、恰度その筋肉を働かすことによつて汽車を動かさうとして居る人の活動の様である。ただ機關車に乗り、そして機關手が不斷にやつて居るのを見て居る通りのこと、即ち、シリンドルに蒸氣を送り込まんがために槓杆を動かす事をしなすればいゝのだのに。その蒸氣とは即ち人間の宗教的的人生觀である。そして彼等はただ、人民をその奴隸制より解放せんと欲せば、どれ位の精力

をもつてその努力をつづけなければならぬかを了解せんがためには、凡ての支配者達がどんな熱心をもつて此の動力を——それによつて支配者達は庶民の主人顔をするところの——自らに保留して置くかを注意して見さへすればいゝ。

土耳其の皇帝は何を護つたか、そしてそれを支ふるために何にしがみ着いて離れなかつたか。また露西亞の皇帝はある町に着くと何故に先づ偶像や聖徳の遺物に接吻するか。また、何故獨逸の皇帝はその教養の外飾でもつて自分を覆うて居るのにも拘らず、かくも屢々——適當であることもあるがな——いこともあるにしても——神や基督や宗教の神聖や宣誓などに就いて語るか。理由は實に簡單である。彼等は凡て彼等の権力が軍隊によつて存し、そしてその軍隊は、それが宗教によつてのみ存し得ると云ふことを知つて居るからである。そして若し富める者が、信仰して居る様な風を装ひ、教會に出席し、安息日を守り、概して特別に敬虔らしく見えても、それはただ、自己保存の本能が、彼等の社會に於ける特別に都合のいゝ地位は彼等の告白して居る宗教と密接なる關係を有して居ると云ふことを彼等に警告するからである。

此等の人々は、如何なる方法に於いて彼等の特權が宗教的欺瞞によつて居るかをまゝ知らない事がある。併し彼等の自己保存の本能は、彼等の力の依つて居る弱點が何處に存して居るかを示す、そして彼等は、何よりも先きに其弱點を防禦する。ある程度までは此等の人民は社會主義的及び革命的宣傳をさへ、常に許容する。またした。しかし宗教的基礎には決して觸れることを許さない。

それ故に、もし今日の進歩せる人々にして——學者、自由思想家、社會主義者、革命家、無政府主

義者——人民を動かした力が何であつたかと云ふことを發見するのには、歴史や心理學でもつても不十分であるとしても、此の顯著なる休徴は、その原動力が物質的條件の中に存して居るのではなくしてただ宗教のうちのみ存するのであると云ふことを確信せしむるに十分であるべきである。而も不思議なことには、今日の博學なる進歩せる人々は、極めて精細に諸々の國民生活状態を了解し、論議するにも拘らず、人の眼を聳動さすかくも著明なる事實を見ない。若しこれ等の人々にして、その利益ある小數者の地位を保持せんがために、故意と人民に宗教を知らさないで置くのならば、それは實に恐るべき唾棄すべき欺瞞である。かくの如くにする人々は、基督が特に排斥した偽善者である。(それは實に彼が排斥した唯一の人民である) 彼が斯かる人物を排斥したのは、如何なる怪物をも悪人も、斯かる人物によつて人生に持ち來される程の多くの惡を未だかつて決して人生に持ち來しはしなかつたからである。

しかし、若し此等の人々が誠實であるならば、此の不思議な盲目は、恰度一般人が偽宗教によつて催眠術をかけられた様に、今日の偽文明人も亦、人間がよつてもつて住んで居るまた住んで來た主要なる神經は最早必要がない、そして何か他のものによつて代られねばならぬと決定した偽科學の催眠術にかゝつて居るからである。

## — 三 —

學者の、——現代に於ける教養のある人々——此の迷妄及び欺瞞は現時の特徴である。そして此のう

ちにこそ基督教的人類の今生きて居る慘ましい境遇の原因、及び、それが益々深く沈み込んで居る野獸化の原因が存して居る。

庶民によつて支持されて居る偽宗教的信仰は特別に重要なものではない、また、ヒュームやゾルトーやルツソーなどによつて成された様に、直接に彼等と闘ふ價値もなければ必要もないと云ふことを斷定するのは、現代の進歩せる教養階級の常である。彼等は考へる。科學は——言ひ換へれば、彼等が人民の間に傳播した、關聯のない定めなき報告は——それ自身で目的を達することが出来る、そして人は、太陽が地球から幾百萬哩のところにあるか、如何なる金屬が太陽や星のうちに在るかを學ぶと、教會の教理を信することをやめるであらうと。

此の誠實なるもしくは不誠實なる、斷定もしくは假定の中に、偉大なる迷妄もしくは恐るべき欺瞞が存する。教育をするものがその傳へるのに就いて何處に注意しても爲過ぎるなどの事のあり得ない程、暗示に對する感受性の最も強い極幼少な時代からして、兒童は、理性や智識に適合しない處の所謂基督教的宗教と稱せられるもの、無意味にして不道德なる教理を注入される。彼は常識の受納れることの出来ない三位一體の教理を教へられる、その三神のうちの一神が人類の贖罪のために地上に降り給ひ、そして甦つて天に昇つたと教へられる。彼はまた、基督が再臨するであらうと云ふこと及び此の教理を信じないものは永遠の苦痛をもつて罰せられると云ふことを教へられる。彼はまた彼の欲するものを祈れと云ふこと及び、その他色々なことを教へられる。そして此の、理性や、今日の知識や、人間の良心や、と一致しない凡ての事が、兒童の印象され易い心裡に、消すことの出来ない

い迄に刻み込まれた時には、彼は彼の受納れたそして疑ふべからざる真理と同化した此等の教理から流れ出るところの矛盾の間に立ちて、出来るだけの道を見出す様にとほつて、きほりにされる。誰も如何にして此の矛盾を調和さしていゝか、さすべきかを教へはしない。よし神學者と稱するものがそれを調和ささうと試みても、それは事件を益々混乱さしてしまふに過ぎない。かくして人は、次第に理性は信頼するに足らない、それ故に何か役に立つものがなければならぬ、人間には善悪眞偽を判別し得る力が自分に備はつて居ない、それ故に彼にとつて最も大切な事——彼の行動——は何の中に存して居るか云ふことに就いては、彼の理性によつて導かれてはならない、他人が彼に告げるところに従はねばならぬと想像する様になる。そしてそれは、神學者の力をこめて支配するところの概念である。僧侶の扶けによつて不斷に人民の上に適用されて居る催眠的暗示の凡ゆる手段をもつて成人に加へられる斯かる教育は、人間の靈的世界に對して如何に恐るべき牽強附會を敢てしなければならぬかと云ふ事は明白である。

もし強い靈をもつて居る人があつて、非常な努力と苦惱との後に、やつとその幼時から教育せられ、成年になつてもさうだと確められて居た催眠的勢力から解説したとしても、理性に信頼してはならないと説得されたことから起つた心意の枉屈は何等の痕跡を残すことなくつてしまふことは出来ぬ。恰度生理的領界に於いて、強い病毒のためにうけた組織の感染が痕跡なしには消え去らない様に、此の欺瞞の催眠術から解脱した此の種の人は、丁度今這れ出て來た虚偽を憎むの餘り、進歩せる人々によつて鼓吹された見解を採用し、凡ゆる宗教をもつて人類進歩の道程に於けるある障礙だと見做す

様になるのは自然の理である。そしてその説を採用したところで、斯る人々はその師と共に原理を捨てる。——即ち、良心を失ひ、生活をたゞその情慾によつて送る。昔に彼は此のために自分を非難しないばかりでなく、それは彼を、人間の達し得る精神的發展の最高の地位に置くものだと思惟する。それは強い心をもつて居る人間に起り得ることである。もつと弱い人間は、たとひ疑ひを起す様なことがあつても、決してその自ら縛りつけられて居る欺瞞から完全に解放しはしない。しかし彼等が受納れたところの不條理の教理を辯明する諸々の狡猾に工夫された朦朧たる説を採用したり發明したりして、疑惑や迷霧や詭辯や自欺の世界に住みながら、庶民を瞞着する事に力を協せ、そしてその文化を妨げる。

しかし人民の大多數は、彼等の上に作用らく催眠術と闘ふ力もなく機會もないので、幾時代も幾時代も、彼等が今現に生活して居る通りに、人生の眞個の宗教的見解であるところの、人間至高の幸福を奪はれて生き、そして死ぬ。かくして常に、彼等を支配し彼等を欺く階級の、扱ひ易い道具として残されるであらう。

かの進歩せる學者達が、不必要で且つ直接に攻撃するに當らないと思惟するのはまさに此の恐るべき欺瞞である。彼等が此麼風に斷定するのは何う云ふ理由かと云ふ唯一の説明は（もしそれをなすものが誠實であるならば）彼等自らが偽科學の催眠術にかゝつて居ると云ふ事である。若し彼等にして誠實でないとするならば、然らば、彼等がさうする所以は、既定の信仰を攻撃することは不利であり屢々危険であると云ふ事實によつて説明される。何れにしても、偽宗教の告白が何等の害をなさない、

若しくは害があつても、大した事でない、それ故に人は宗教的欺瞞を破壊する事なしに文化を擴布し能ふ、と云ふ斷定は、全然誤つて居る。

人類はたゞ、僧侶が彼等をその中に引きとめて居る催眠術と、學者がその中に導き入れんとして居る催眠術との、その何れからも解脱することによつてのみ、その病弊から救はれる事を得る。一杯になつて居る壺に注ぎ入れんが爲めには、先づその中味を空にしなければならぬ。同じ様にまた、人をして、眞の宗教、即ち萬物の根源——神——にまでの眞の關係（人類の進歩發展に相應したる）及び此の關係から引き出されるところの彼等の活動の指導を受納れしめんがためには、彼が今かゝつて居る欺瞞から脱しめる必要がある。

一四

「しかし眞の宗教と云ふものが一體存して居るか。宗教は果てしなく異つてゐる。そして吾々は、その中の一つが最も近く吾々自身の趣味に適つて居ると云ふ事の理由をもつて、それを眞の宗教だと呼ぶ権利をもたない。」これはある種の病氣に於けるが如く（或人はそれから醫されたと感じて居るが、他の人は尙ほも惱んで居るところの）宗教の外的形式を眺めて居る者の言ふことである。併しこれは誤つて居る、宗教はその外形に於いては異つて居る。しかしその根本的原理に於いては凡て同じである。そして凡ての宗教にとつて根本的な、そしてそののみが今日に於いて吾々凡ての者に適應し、それを受納れる事のみが人間をその災厄から救ひ得るところの眞の宗教を構成するのは、まさに此等の原理である。

人類は長い間生活して來た、そしてその幾時代もの長い間を通じて、その實用的發明を製出し改善して來た様に、同様にまた、生活の根柢を形成する靈的原理、並びにこれ等の原理から生まれた行動の規則を造つたり改善したりしないでは居られない。よし盲者は此れを見ないとしても、それが存在しないと云ふ證據にはならない。

萬人に共通なる現時の宗教が——その特異性と曲解とをもつて居るある宗教としてではなく、吾々に知られ、人類の十分の九以上によつて信奉されて廣く行はれて居る凡ての宗教の中に同様に存在する原理から成立つて居る宗教として——存する。そして人々が未だ全く野獸化されないのは、凡ての國民の中でも最善の人々が、此の宗教に固着して、たとひ無意識的であるにしてもそれを告白するからである。そして彼等をしてそれを意識的に採用せしむる事を妨げるのは、僧侶や科學者の扶けによつて人々の上に作用はたかけける催眠術的欺瞞である。

此の眞宗教の原理は、それを人々の前に置くや否や、何か極めて親しみのあるあたり、前者であるかの如くに受納れられる程、人々にとつて自然的なものである。吾々にとつての眞の宗教は、その原理に於ける基督教である。そしてそれは婆羅門教や儒教や道教や希伯來教や佛教や又は回々教やの根本的原理（外的形式に於いてはなく）と一致する。同様にまた婆羅門教や儒教を告白して居る者にとつても、眞の宗教は凡て他の大宗教の根本的原理と調和する根本的原理のそれであらう。そして此等の原理は極めて簡單で、理解し易く、且つ明白である。

此等の原理はかうである。そこには一つの神、萬物の根源がある。人の衷にはその神的根源からの閃光がある。そしてそれは人間の生活の仕方によつて自らの衷に増すことも出来れば減する事も出来る。此の閃光を増大せんがためには、人はその情慾を抑へて彼自身の衷に愛を増さねばならぬ。そして此の結果を得べき實際的方法は汝が他人から爲してもらひ度い事を他人に向つてもなすことである。凡て此等の原理は婆羅門教にも希伯來教にも儒教にも回々教にも共通して居る。(もし佛教が神の定義を提供しないとしても、仍りそれは人間がそれと融合するところも、そして人が涅槃に達した時にはその中に没入すべきものを認める。かくて、人がそれと融合し、涅槃に於いてその衷に没入するところのものは、希伯來教や基督教や回々教に於いて神と稱ぶところのものと同じ根源である)

『しかしそれは宗教でない』これが今日の超自然、即ち、無意味をもつて宗教の主要なる特徴だと思惟する事になれて居る人々の言ふことである。『それは君の好む處の何か——哲學、倫理——推論である。しかし宗教でない』と。彼等に從へば宗教とは不條理で理解の出来ないもの(Credo quia absurdum)でなければならぬ。而も、長い間の曲解の行程に於いて、凡て此等の不條理なる奇蹟や超自然的出来事の念入りに作製され、そして今では凡ゆる宗教の根本的徴證の如くに思惟されるに至つたのは、たゞ此の原理からである。と云ふよりは寧ろそれ等が宗教的教理として説かれた結果によるのである。超自然や不合理が宗教の本質的特質を構成すると斷定するのは、恰度腐敗した林檎のみを觀て、いやな匂や有毒性が林檎と稱する果實の最始の特質だと斷定する様なものである。

宗教とは一切のものゝ根源と人間との關係、及び、その關係から生ずる人生の目的の定義である。

そしてそれは、その目的から生ずる行爲の規則を供給する。その根本的原理が凡ての信仰の中に在つて等しい普遍的宗教は、十分に此等の宗教的要求を充足する。それは人と神との關係を、部分と全體との關係として定義する。此の關係からして、それは人間の目的は彼の衷に在る神的要素を増大することに在ることを演繹する。そして此の目的は、自らされんと欲する事を他人になせと云ふ規則に適合した實際的要求を含有して居る。

他人から自分にしてもらひ度い事を他人になせと云ふが如き抽象的な規則は、斷食せよとか、祈禱せよとか、聖餐をとれとか云ふ様なより單純な規則の如く、行爲の義務的な規則又は道標となり得ないと云ふ様に人々は屢々疑ふ、そして私も亦一度は疑つた。しかしその疑ひに對する言ひ破ることの出来ない答へとして、たとへば、聖餐のパンを糞尿の上に吐き出すよりは寧ろ死を擇ぶが、而も人間の命令の下には容易にその兄弟をも殺すところの露西亞の農民の靈的狀態を以つてすればよい。

何故、他人から自分にしてもらひ度い事を他人になせと云ふ規則から流出し來る要求が、——兄弟を殺してはならぬ、他人を罵つてはならぬ、姦淫をしてはならぬ、復讐をしてはならぬ、自分の氣まぐれを満足させんがためにその兄弟の必要に乗じてはならぬ等が——何等明瞭なる内的意識の上に築かれて居るのではなくて、寧ろ輕信の上に成立つて居る信仰をもてる人々に向つて、今、聖餐や聖像などの神聖の信仰を強いて居るのと同じ強制をもつて注入されてはならぬか、そしてそれが義務的にそして不可犯的になつてはならないか。

現時の凡ての人に共通なる宗教の眞理は、非常に單純で解り易くて、そして各人の心情に近いものである。かくてそれはたゞ、人類の全生活を自づと變化させんがために、少年や青年に、三位一體や、處女聖母や、贖罪や、インドラやツリマアティや、天上に飛び去つたと云ふ佛陀や、マホメットの事などの如き、自分でも屢々信じてない、曖昧な、そして不條理な教理の代りに、その形而上學的本質から云ふと、神の靈萬人の中に在すと云ふことゝ、その實際的規則から云ふと、人は他人から自分になしてもらひ度いことを他人になすべきであると云ふこととの簡單明瞭なる眞理を教へ込まんがために兩親や支配者や教師にとつて非常に必要である様に見える。

もし、子供達が今、教へ込まれ、成年達が堅く信じさせられ一居る彼の信仰、即ち、神はアダムの罪を贖はんが爲に其子を送り給ふたとか、人間の従はねばならぬ教會をたてたとか、そしてそれから派生した規則として、人は何時、また何處に於いて祈りを捧げ供物を献げねばならぬとか、何時斷食しなければならぬとか、一週の何時仕事をしてはならぬとか云つた様な事の代りに、——もし人々にして、此處ことの代りに、神は靈にしてその映像は吾のうち<sup>うち</sup>に在り、その力を吾々は吾々の行爲によつて増すことが出來ると云ふ信仰を教へられ確められたならば、——もし彼等にして今日かの何うしてもそんな事の有り得ない出來事につける不必要なる傳説や、そんな物語から生れて來る無意味な儀式の規定などを教へられて居るのと同じに、もし此の原理及び此の原理から自然に派生して來るものを

教へられさへすれば、——その時こそは、不合理な鬭争や分裂の代りに、外交家や萬國公法や平和會議や經濟學者や凡ゆる種類の社會主義者やなどのたすけなしに、此の唯一の宗教によつて指示された平和にして親密なるそして幸福なる生活が人類にやつて來るであらう。

而も此の種のこととは少しも企てられなかつた。偽宗教の欺瞞が破られないばかりでなく、眞の宗教が宣べ傳へられないばかりでなく、反つて、人々は益々眞理を受納れる可能から遠く離れ去りつゝある。

人々が、斯くも自然で、必要で、そして可能であるところのことをなさない重なる原因は、今日の人々が、長い間宗教なくして住んで來た結果として、そんな風な生活の仕方をするのが當に正則であるばかりでなく、出來得べき唯一の事であるかの如く、彼等には思はれるに至つた程にも、暴力や刀劍や彈丸や牢屋や絞首臺などによつてその生存を構成し防禦するのに馴れて居るからである。當に現存の制度でもつて利益を得て居る者がそう考へて居るばかりでなく、それによつて惱まされて居るものでさへ、暴力が人類社會に於ける安寧秩序を保つ唯一の方法だと考へる程にも、彼等の上にかけてられた催眠術によつて迷はされて居る。而も人民をして彼等の苦惱の原因を理解せしむる事を妨げ、それ故にまた眞の社會組織を構造することを得せしめないのは、まさに暴力による此の公安の手筈と維持法とによるのである。

その結果は、かの悪性の噴出<sup>はきだ</sup>ものを身體の内部に追ひ込むでしまつて、病人をだまし、かくすることによつて病氣を益々わるくし、遂にはそれを醫すことの出來ないものとして了ふところの、善くな

い、悪意のある、醫者によつてなされるのと同じ様な結果になるであらう。

庶民を奴隸にして居る支配階級の人民は、考へ、そして曰ふ。'Après nous le déluge' (我々の後には大洪水だ)と。奴隸にした人民を迷妾と奴ニシスレブノント役の状態にとどめて置き、そしてそれを利用する権利を支配階級のものから妨げない様にするには、軍隊、僧侶、軍人、警官の手段並びに、刀劍、彈丸、牢屋、工場、絞首臺等の威嚇によるのが最も便利である様に見える。そして此れ正に、善き秩序を保つためだと稱して支配階級の人々のなすところである。しかし此より以上に善き社會制度の建設を妨げるものはない。實際、それは善き秩序の建設どころではなくて害悪の建設である。

もし、今も尙庶民の間に存して居る宗教的原理の遺物をもてる現時の基督教國民にして、社會秩序や道徳を保有する義務を自分の身に負へる人々のなす罪惡を——戦争や、處刑や、投獄や、課税や、發酵劑や、阿片の賣買によつて——不斷にその眼の前に於いて見なかつたならば、彼等は決してそれ等の惡行や欺瞞や暴行や殺人やの(それを彼等は今、かゝる事をなすのは人間にとつて善い事であり自然なことであると云ふ斷乎たる確信をもつて行つて居る)百分の一をも行つて居るなごゝは夢にも思はなかつたであらう。

人生の法則は此處のものである。即ち、それを改善する唯一の方法は、それが個人的なものであらうが、社會的なものであらうが、共に、完成に向ふ内的にして道徳的成生の方法によると云つた様なものである。そこでその生活を外的勢力や強制によつて改善しようとする人々の一切の努力は、たゞ、惡の最も有効なる擴布もしくは範例となるに役立つばかりである。それ故に常に生活を改善し得ないば

かりでなく、反つて惡を増さしむるばかりである。それは恰度、雪達摩の様に不斷に大きく大きくなる、そしてその生活を眞に改善し得るならん唯一の途を段々と人々から奪ひ去つてしまふ。

暴行や犯罪の實行が、秩序だとか道徳だとかの後見によつて法律の名の下に行はれば行はれる程、益々しけく、而も残酷になり、宗教として表はれた虚偽の催眠術によつて益々辯明される様になり、人々は益々、彼等の生活の法則はその同胞を愛しそれに奉仕することにあるのではなく、反つて互に鬭争し、貪り食ふ事を要求するところのものであると云ふ信仰に固められる様になる。

かくて彼等が、彼等をして野獸の水準にまで墮落せしむるところのその思想を固めらるればられる程、その中に彼等の住んで居る催眠的恍惚を振り拂ふことが難しくなり、彼等の生活の根柢として一切の人類に共通なる現時の眞宗教を受け納れる事が困難になる。

あるよくない集團グループが設立された。宗教の不在は暴力の上に築かれたる動物的生活をして可能ならしめる。暴力の上に築かれたる動物的生活は催眠術から解脱する。そして眞宗教の採用を益々不可能ならしめる。それ故に人々は今日に於いて自然にして、出來得べき、そして必要なる生活をしない。そして宗教の欺瞞と擬物とを破壊しない、そして眞宗教を同化し宣傳しない。

## 一六

此のたぶらかされて居る集團からして何等の結果が生じ得るか。そして若し生ずるなら、それは何處ものであるか。



先づ第一にそれは、人民の生活を彼等の利益になる様に指導する義務を自分の身に負うた政府が、吾々を此の社會から救ひ出すべきであると言ふ様に考へられる。それはまさしく、暴力の上に築かれたる生活體制を改め、そしてそれを相互奉仕及び愛の上に築かれたる合理的な體制に置き換へやうとした人々が、常に想像したところのものである。かくの如く基督教改革者は考へた。また歐洲共產主義の諸種の學說の建設者は考へた。そしてまた同じ様に有名なる支那の改革者墨子が考へた。彼は人民の福祉のために、學校の兒童に軍隊的學問や運動を教へない事、軍功ある成年に報償しないこと、そして兒童及び成年に敬と愛との規則を教へ、愛の功績に對して褒美と獎勵とを與ふべき事を政府に建言した。同じ様にまた私が嘗て識り合ひになつた、或は今知つて居る多くの百姓宗教改革者達が——スウタエフを始めとして、今では既に五度も皇帝に嘆願書を差出して、偽宗教の廢止を公布し、眞基督教の宣傳を命ぜん事を請ふたある老人に至るまで——考へ且つ曰つた。

人民の福祉を保護するために存在するのだと聲明する政府が、その福祉を安定にせんがために、決して人民に害をなさない、そしてたゞ最も効果のある結果を産出し能ふところの唯一の手段を用ゆることを欲しなければならぬと云ふことは極めて自然の事の様に入々は考へる。而も政府は昔に此の義務を實行しないばかりでなく、反つて、常にそして至るところで、非常な猜疑をもつて、かつて榮えたことのあつた誤れる衰へたる宗教を保護した。そして、人民に眞の宗教の原理を告げやうとした人々を凡ゆる方法をもつて迫害した。實際に於いて斯うするより外に途がなかつたのである。何となれば政府にとつては、今日の宗教の虚偽を暴露し、眞宗教を宣傳することは、樹の枝の上によつて居る人がその枝を伐り落すのと同じ事だからである。

然し、もし政府がこれをしてしないならば、それ等の學者達が——自らを偽宗教から解放したところ、彼等の教育と生活の支撐とのためにその勞働を與へた一般人に奉仕せんことを欲すと揚言するところの——慥かにそれを遂行するに相違ないと云ふ様に思はれる。然し此等の人も亦、政府と同様、これをしない。第一に彼等は、不愉快な思ひをする事や、政府の手によつて保護されて居る欺瞞を暴露する事によつて支配階級のものに迫害される危険を冒すなどは得な<sup>き</sup>ことではなく、それに、彼等の説に従へばその欺瞞は自然と消滅して行くものだからである。第二には、彼等は一切の宗教が最早精力の竭きた過誤であると思惟するから、彼等こそこれを破壊するであらうと期待されて居る欺瞞の代りに、人民に提供すべき何者をも有しないからである。

そこにはまだ、澤山の無智の人々が残つて居る。彼等は教會や政府の欺瞞の催眠術にかゝつて居る、それに彼等に注入された宗教の擬物をもつて眞の宗教だと信じ、眞宗教はもう他に決してない、またあり得ないと思つて居る。此等の庶民は常に、そして烈しい催眠術にかゝつて居る。時代より時代へと、彼等は僧侶や政府によつて保たれて居る恍惚状態の下に生れ、生き、そして死ぬ。よし彼等にしてその影響から脱れることが出来るとしても、今度は宗教を拒否する科學者の一派に走ることは疑を容れない。そして彼等の感化はその師の感化の如く無用で而も有害となる。

こんな風で、或者にとつてはそれは不利益であるし、他の者にとつては不可能である。

何等の結果も生じないかの如くに見える。

事實また非宗教的人物には此の地位から何等の結果も生じない、また生じ得ない、より高い支配階級に属するものは、たとひ彼等が庶民が今生活して居る、そしてより高い階級をして彼等を支配することを得しめて居る、あの妄迷と服役とを破壊しやうと心から企劃する様なことは決してない——世俗的目的でもつて支配されて居る彼等はそれをなし得ないのだ、同じ様にまた、奴隸階級に属して居る人々も、世俗的動機で導かれて居る間は、偽教訓を暴露し眞宗教を宣傳せんがために、より高い階級と戦闘を始むることによつて彼等の辛い境遇を一層に辛いものとしようとは欲し得ない。此等の仲間の何れもこれをなす動機をもたない。そしてもし彼等にして精巧であるなら決してそんな事を企てないであらう。

然し宗教的人物に於いてはさうでない。たとひ社會がどんなに腐敗墮落しては居ても、それなくしては人生が存し得ないところの宗教の聖火を生命がけでもつて護つて居るのを見出されるが如きかゝる人々に就いては、此等の人々が注意されず、萬人のために排斥せられ冷嘲され（我々露國民の間に於けるが如く）、その生活が世に著はれないで、流竄や牢屋や懲役隊やなどのうちに世を終へる様な時代がある。（吾々の時代はまさにそれだ）而も彼等は生きて居る。人類の合理的生活は彼等に依りかゝつて居る。そしてその中に人を縛らつて居る魔法國を破壊する事が出来、またするであらうところの

ものは、たとひその数が如何に少数であらうとも、此等の人々ばかりであらう。彼等はそれを成すことが出来る。何となれば、世俗的人物をして現存の社會組織に敵對する事から妨けた一切の不利益や危険は、嘗に此等の宗教的人物の障碍とならないばかりでなく、反つて虚偽に對して戦ふ熱心を増さしめ、彼が神來の眞理だと信じて居る事を言葉をもつて行爲をもつて告白せしめないでは置かないからである。若し彼にしてその支配階級に属して居るならば、嘗に彼は彼自身の有利なる地位をかくまは、んがために眞理を匿さうとしないばかりでなく、反つて、かゝる利得を憎む様になつて居るので、全力を盡してそれから脱れん事を努め、そして眞理を宣傳する。何となれば彼は最早、神に仕へる事より外には何等の目的を人生に有たないからである。若し彼にして奴隸階級に属して居るならば、然らば彼はまた同じ様に、彼と同じ地位に居るそれ等の人々に共通なるその肉體の生活の境遇を改善しようとして云ふ欲望に捕はれない。かゝる人々は虚偽を暴露し眞理を告白することによつて神の意志を成就するより外に何等の目的をもたない。そして如何なる苦惱も感嚇も彼が彼の生活に於いて認めるところの目的に適つて生きようとする事を止めさせはしない。彼等は共に斯くの如くに行動する。恰かも、世俗的人物が富を得んがために自ら努力し、掠奪を大目に見るのが自然である如く、或はその人から利益を得んことを期待して居る支配者の御機嫌をとるのが極めて自然であるが如く、それ程自然に。凡ての宗教的人物はかくの如くに行動する。何となれば、宗教によつて光耀された人間の心靈は最早非宗教的人物がなす様に單に此の世俗的生活ばかりでもつては生くることが出来ないから。しかし永遠にして無限なる生活を生きるから。そのためには、此の生活の苦惱も死も、その手の上に出

来た水泡か、もしくは畑を耕す耕作者の腕の疲れ程の意義をしか有たないから。

これ等は、人々が今閉ぢ込められて居る魔法國を破壊する人々である。如何にその數が少くとも如何にその社會上の地位が低くとも、如何にその教養や實力が貧弱であらうとも、火が枯れたる草原を燃やす事の確かであるが如くに、此等の人々も亦全世界を焰の中に持ち來し、長い間宗教がないので萎びて居た、そして今や生命の更新を喘ぎ求めて居るそれ等の人々の凡ての心情を燃やすことは確かである。

宗教とは、かつて起つたと想像されて居るある超自然的出來事や、ある祈禱及び儀式の必要などに對して、永遠不動に定められたる信仰ではない。また科學者が想像するが如くに、今日に於いては最早何等の意味もなく、人生に適用されもしない、昔の無智な人の迷信の殘物でもない。宗教とは、永遠の生命及び神にまでの人間のある關係である。理性及び現代の智識と一致する一つの關係である。そしてそれは、そのみが人類をその定められたる目的に向はしむるところのものである。

賢明なる希伯來の箴言は曰ふ『人の靈魂は神の燈火である』と。人は、神の光が彼の心靈を燃やすまでは一つの弱い哀れな動物に過ぎない、しかしその光が燃える時には（そしてそれは宗教によつて光耀された心靈の中に於いてのみ燃える）人は世界に於いて最も強い存在となる。これはまた、それより外で有り様がない、何となれば、その時彼の中に在りて活らくものは最早彼の力ではなくて、神の力であるからである。

それ故に、これが宗教なのである。またこれがそれを構成して居る本質なのである。（完）

## 宗教と道德

（獨逸倫理學會への回答）

貴下が余に、かう質問される、(一)余は何う云ふ風に、宗教と云ふ言葉を解釋して居るか、それから、(二)道徳を宗教から、余が解釋して居るその言葉の意味では、獨立したものとする事が出来るかと云ふ事を。

余は、是等の最も重大な、そしてよく要領を得た質問に答へる爲めに、全力を盡さう。

第一は、宗教とは神に依つて人間に與へられた特種の、眞正な啓示である、そしてその啓示に従つて、神を崇拜する事であると云ふにある。此の意味は、現存せる諸宗教のうち孰れか一つを信じ、勢ひその各別の宗教を、唯一の眞正なものと考へて居る人々に依つて、宗教に與へられるものである。第二の意味は、宗教とは或種の迷信的な諸信仰の集りであつて、又、斯る諸信仰と軌を同じくする、迷信的な、崇拜の一形式であると云ふにある。これは一般の無信仰者、又は世の人が、特に定めて宗教として居るものを承認しないやうな人々に依つて、宗教に與へられる意味である。第三の意味では、宗教は、賢しき人々に依つて工夫された信條と掟との集りであつて、一般の人々を慰め、情熱を制し、且つ群衆を統べ易くする爲めに必要なものとされるものである。この意味は、

宗教を宗教としてそれに對して冷淡ではあるが、それを政府の爲めの有用な道具であると考へて居る者に依つて、宗教に與へられるものである。

宗教は、第一の定義に従へば信頼するに足る、或る種の眞理である。そしてそれを、凡らゆる手段を盡くして宣傳する事は、人類の幸福のために望ましき且つ必要缺くべからざるものでさへもある。

第二の定義に據れば、宗教とは迷信の集りであつて、それより人が、凡らゆる出來得る限りの手段を盡して解放される事が、人類の幸福のために願はしき、又必要な事さへもある。

第三の定義に據ると、宗教は高い教養のある人には必要はないが、一般の人々の慰安と統御の爲めに必要缺くべからざる、従つて保存される必要のあるものである。

第一は、音楽とは格別な音響——即ち彼が最も良きものであると知り、且つ彼の最も愛好せるものであり、従つて、出來る丈け多くの人に教へられねばならぬものであると稱して居る一人の人が、音楽に關して與へでもしさうな定義に似て居る。

第二は、音楽を解しない、勢ひそれを嫌ふ人、それから、音楽とは人の喉又は口を以つてし、又は人の手を或る一つの樂器に當てる事に依る、諸音響からの所産である、故にそれは無益な、有害な仕事でさへあつて、それより人々を出來る丈け早く隔離さす必要があると云ふやうな人が、與へる定義に似て居る。

第三は、音楽は舞踏を教へる目的のために、又同じく隊の行進の爲めに、必要な物である。故にそれらの目的の爲めに保存される必要があると云ふやうな人に依つてなされる、音楽の定義に似て居る。

凡てこれらの定義の區々な事と不完全な事とは、彼等が音樂の根本的な特性を捉み得ないで、唯その特徴の或る部分だけを定義するといふ事實から、即ち定義者の考察點の違ひから生ずるものである。宗教に關して與へられた三つの定義に就いても、同じ事が云へる。

その定義の第一に據ると、宗教とは、定義者が本當に信じ切つて居る、或るものである。

第二の定義に據ると、それは、定義者の目から見ると、他の人々が誤つて信じて居る或る物である。

第三の定義に據ると、それは、定義者が、他の人々をして信ぜしめる事が有益であると思考する、その或る物である。

凡てこの三つの場合に於いて、定義される物は、宗教の眞の本質ではなくて、人々が信仰し、又は宗教と思惟して居る或る物である。

第一の定義では、宗教の概念は、定義者の抱いて居る信仰の代理をし、第二の定義では、他の人々の抱いて居る信仰の代理をして居る。即ちいづれもそれらの人々が宗教として居る或る物か。——然るに第三の定義では、宗教として人々に提供された或る物に對する、それらの人々の信仰の代理をして居る。

然し信仰とは何であるか？そして何故に人々は、彼等が抱く如き信仰を抱くのであるか？信仰とは何であるか、そしてそれは如何にして起るのであるか？

今日の教養ある人々の大多數の間では、各宗教の本質は、未知な大自然の現象に依つて惹起された迷信的な恐怖、それらの自然力の人格化と神格化、及びそれらに對する崇拜にあると云ふ事は、既定

の事實であると考へられて居る。

此の説は、批判もなしに、今日の教養ある人々に輕々しく承認されて居る。そして科學者達によつてそれが排斥されないのみならず、反つてそれらの人々の間に通常、その最も有力な辯護者を見出して居るのである。たとへ時折、宗教に他の起源と意味を附與する聲(例へばマックス・ミュラーやその他の人々のやうな)が聞えたとしても、それらの聲は殆んど耳を傾けられず且つ注意を向けられる事もなく、世間一般に宗教を無智と迷信との表れであるとする、その平凡な、且つ一人の異議もない承認の間を素通りして下ふ。久しからざる以前、十九世紀の初期に於いて、最も進歩した人達は——若しも(十八世紀の後期の佛國百科全書編纂者の如く)それらの人達も加特力教、新教、及び露國希臘正教を排斥したとしても——決して、宗教は各人に取つて一般に缺くべからざる生活の一條件であつた事、並びに今もさうである事を否定しはしなかつた。自然神教信者(例へばベルナルダン・ド・セントピエール・デイデロオ、又はルソオの如き)は云ふ迄もなく、ボルテールは神に捧ぐる紀念碑を建て、ロベスピエールは至上なる者の爲めの祝祭日を設けた。されど我等の時代——オーギュスト・コムトの輕薄にして淺薄なる教へに感謝すべきである。(彼は、多くの佛蘭西人の如く、確かに基督教を加特力教と同じものであると信じ、且つ加特力教に於いて、基督教の完全な實現を認めた)——に於いては、教養ある人々(常に熱心に、且つ最下等の説を承認するに吝かならざる)に依つて、宗教とは、唯、一つの特種な、人類の進歩に際して生き延びた一形相に過ぎない、そしてその今後の進歩に妨げとなるものであると云ふ事が、決定され、又承認されて居る。人類は既に、宗教的、形而上學的と云ふ二つの階段を

通つて、今や第三の、最高の——即ち科學的階段に入らうとして居る、故に人々の間に於ける凡ての宗教的な表れは、單に人類の靈的な器官の復活に過ぎなくて、とうの昔に、馬の第五番目の趾かたむねのやうに、一切の意義と重要さを失つて居るものであると云ふ事は、一般の承認するところである。

宗教の本質は、古代に於いてはデモクリタスの假想したやうに、又近代の哲學者や宗教史家の推定する如く、大自然の未知の力に依つて呼び起された恐怖、想像的な存在を信仰する事、及びそれらの存在を崇拜する事にあると云ふ事も、承認されてゐるところのものである。

然し、不可見にして超自然的な存在、乃至それに類する一存在への信仰心は、常に必ずしも、未知な自然力より——吾人が、最も進歩し、且つ高き教育ある前代の人々（ソクラテス、デカルト、ニュウトン）並びに吾等と同時代の數百の人々の場合に於いて見るが如く、（それらの人々の至高なる超自然的な存在の認識は、確かに未知の大自然力を恐怖する念より起りはしなかつたやうに、）起るものでないといふ考慮は、暫く此處に措くとしても、宗教は人間の、大自然の神祕的な力に對する迷信的な恐怖心から起ると云ふ推論は、實際、未知な、超自然的な存在に就いて概念を、人々に與へたところのものは何であるか？」と云ふこの肝要なる疑問に、何等の答へをも提出しない。

若しも人が雷や電光を恐れるとしたら、それらの人は、雷又は電光としてそれらを恐れるのである。何故にそれらの人々が、彼處此處と住處を變へて時々人々に矢を投げるジユビターのやうな、不可見な、そして超自然的な存在を、作り出さねばならぬ筈があらうか？

死の光景に打たれたる人々は、死を恐れるであらう。だが何故にそれらの人々が、想像的な交通を

世の人がなして居るところの死者の靈を、作り出さねばならぬ譯があるか？雷から人は身を蔽すかも知れない。死の恐怖は人をして、死を脱れる工夫をさすであらう。だが、若しも彼等が、自分の身を托してゐると假想する、一つの永遠な、力強い存在を作り出し、又は死者の代りに生ける靈魂を作り出したとしたならば、それは單に恐怖からでなくして、或る何か他の理由があつてである。そしてそれらの理由のうちこそ、明らかに、吾等が宗教と呼ぶところのもの、本質が存するのである。

その上、嘗て、例へば少年時代に於いてあるとはいへ、宗教的感情を経験した人は誰しも、自身の經驗に依つて、その感情は外的な、恐ろしき物質的な現象に依つてではなく、大自然の未知なる力とは何の交渉もない内的な意識——彼自身の微小なる事、頼り少き事、並びに罪深き事の意識に依つて、彼の内部に呼び起されたものであると云ふ事を、知つて居る。

故に、外的な觀察と個人的な經驗との兩方に依つて、人は、宗教とは大自然の不可見な力に對する迷信的な恐怖心から起つて、人々の進歩の或る時期にのみ適合する、諸神への崇拜ではなくして、全然恐怖及び教育の程度の弱れとも無關係な——教化の發達にも破壊される事のない、或る物であると云ふ事を、知る事が出来る。何故なれば、人間は、無限なる宇宙の中に有限であるといふ事、及び自身の罪深き事（例へば、彼のなし得る、又なさざるべからざる凡ての事をして居ないと云ふやうな）に就いての意識は、常に存在し來つたものであり、又人間が人間として生存する限り今後も、常に存在するであらうからである。

實際、人は誰しも、動物的な性能に依つて導かれて居る嬰兒並びに幼年時代の初期の、動物的な状態

態より脱するや否や——合理的な意識に目ざめるや否や、彼の周囲の凡てのものが、絶えず破壊される事なく、自らを新たにし、寸分も違はず、一つの永遠な法則に従つて生きて居る事、それから、彼自身宇宙間の他のものと切り放たれたものと知つて、獨り彼のみ、死に、無限の空間と終りなき時間の中に消滅し、且つ自身の行爲に對する惱ましき責任感——例へば、悪い行爲をして、もつと、善き行爲をし得たであらうにと云ふやうな意識に、苦しむべく宣告されて居る事に、氣付かざるを得ないのである。そして此の事が分ると、理性ある人は皆、立止つて、かう自問せざるを得ない、「此の永遠な、確固たる、終る事なき宇宙の間にあつて、此の我が一時的なる、變り易い、不安定な生存の意義は何であるか？」と。本當の人間生活に入るに當つて、人は此の疑問を脱れる事が出来ないものである。

その疑問は、皆の者に迫つて来る。そして何か一つ方法で、各人がそれに答へて居る。そしてその疑問に對する答のうちこそ、各宗教の本質が存するのである。その宗教の本質は、「何故に自分は生きて居るか、又自分の周囲の宇宙と自分との關係はどうであるか？」といふ疑問の答の中に存する。凡ての宗教哲學、凡ての神及び世界の起原に關する教義、並びに凡ての外的な儀式は——これらのものが通常宗教であると考へられて居るが——しかし宗教としての存在を明示するもの（これは、地理的、人種的並びに歴史的な條件に依つて違つて来る。）に過ぎない。最も進歩したものから最劣等のものに至る迄、宗教は一つとして、その根柢に、此の、人間と周囲の宇宙、及びその根元なる者との關係の確立を、持つて居ないものはない。如何に劣等な宗教上の儀式とはいへ、又如河に精鍊された禮拜

の儀式とはいへ、その根柢にこれを持つて居ないものはないのである。各宗教の教へは、その宗教の創始者が、（勢ひ他の凡ての者も亦）一個の人間として、その宇宙、その起原、及び根元なる者に對して持つと考へた、その關係を説き明かしたものである。

此等の説き現し方は、それらの宗教創始者の、人種的、並びに歴史的條件の相違、及びその宗教を採用する國民の如何に依つて、非常に多くの數に上つて居る。加ふるに凡てこれらの表現は、常に數百、又時とすると數千に上る群集の理解力よりは數年立ちまされた弟子達に依つて、色々な風に解釋され、且つ曲解されて居る。故に、人間の宇宙——即ち宗教——に對する關係は、非常に數に上るわけである。が、實際、人間が宇宙及び宇宙創造者に對して持つのは、唯三つの根本的な關係のみなのである。それは、（一）原始的、個人的關係、（二）異教的、社會的、即ち家族的國家的關係、（三）基督教的、即ち神的關係である。

突き詰めて云ふと、人間が世界に對して取りうる關係は、唯二つの根本的な關係となつてしまふ。即ち個人的關係、これは人生の意義は、獨立で獲得される、若しくは他の人々と協同で得られる個人の幸福にあるとする。次に基督教的關係、これは人生の意義は、人間を此の世に送つた神に奉仕するところに存するものである。初めの分類に擧げた三つのうちの第二——社會的——は本當のところ、唯第一の擴張したものに過ぎない。

此の人生觀の最初のもの、即ち最も古いもの——今は唯道德的發達の最下層の人々の間にのみ見出される——は、人が自身を自動的な生物と考へて、出来るだけ最大の個人的な幸福を、その獲得に依

つて他の人々に與へる苦痛などには無頓着に、得やうとして此の世に生きる事に存する。

此の非常に原始的な世界との關係(各嬰兒が、此の世に入り來つて最初に取つて生活する關係、人類が、その發達の最初の異教的な時期に於いて取つて生活し、且つ道徳上劣等な人々の多く及び野蠻人種が、今日尙取つて生活して居るその關係)から、古代の異教的宗教、並びに其後の宗教の最も低級な形のもの、即ち曲解された形に於ける佛教、道教、マホメット教、及び基督教が現れて來た。世界に對する此の關係から、更に近代の唯心論が現れて來る。それは、その根柢に、人間個性の永存と幸福とに對する欲求を持つてゐるものである。異教的な儀式、即ち卜占、人間と同じ生を享樂するものの神化、人間の爲めに仲間者をする聖者、及び人間の地上の幸福や災害除けの爲めに捧ぐる凡ての犠牲や祈禱等は、一切この人生觀から生ずる。

人間の世界に對する異教的關係の第二の形、即ち社會的關係、それを人間は發達次の階段に於いて取り——主として成年者が普通取る關係であるが——それは、人生の意義を別々な個人の幸福にあるとはせずして、人々の集團、即ち家族、黨派、國民、帝國乃至人類の幸福(恰も實證論者の宗教を確立せんとする企ての如く)にあるとする。

人間の世界に對する此の關係にあつては、人生の意義は、個人から家族、黨派、國民又は帝國へ——即ち個人々々の或る一集團へと移つて行つてゐる。そしてその集團の幸福が、生存の目的であるとして居るのである。此の考へ方から、或る型を持つた宗教の一切——長老的なもの、及び社會的のもの、即ち支那及び日本の宗教、「選ばれた人々」——猶太人の宗教、羅馬國教、吾人の教會と國家の宗

教(これは基督教の不都合なる名稱である。併しオーガスチンに依つて、斯る點に迄墮落させられたのである。)それから實證論者の企てる人道の宗教が、現れて來る。

支那及び日本に於ける祖先崇拜の一切の儀式、羅馬に於ける皇帝崇拜、神と選ばれたる人民との協和の保存を目的とする數限りない猶太人の儀式、及び國家の幸福若しくは戰爭の勝利の爲めの、一切の家族的な、社會的な、教會基督教徒の祈禱——は皆、かく宇宙に對する人間の關係を、解釋するところから由來するものである。

此の關係の第三の解し方、即ち基督教的な考へ方——それは、凡ての老年者が皆意識するものであり、又余の考へでは、人類も今や、その考へに入らうとしてゐる——は、人生の意義が最早や、個人乃至何かの人々の集團の目的を成就する事にあるらしく見えなくて、唯單に、人間及び全宇宙を、人間の目的のためにでなくそれ自身の爲めに創造した、その意志に奉仕する事にあるところにある。

世界に對する此の關係よりして、吾々に熟知の最高なる宗教の教へが出て來る。その幼芽は、既にピタゴラス派、テラピユウテス派、エセネス派、及び埃及教、波斯教、波羅門教、佛教徒並に道教信者等の最も代表的なものの中に、存在した居た。然しそれが完全なる、最終の表現を得たのは、唯、眞正なる曲解されざる意味に於ける基督教に於いてのみであつた。此の人生觀から生じて來たところのそれらの古代宗教の儀式の一切、及び吾らと同時代の、統一教徒、宇宙神教徒、クエーカー教徒、サーヴィアン・ナザレネ教徒、露西亞ドウホポール教徒及び一切の所謂合理的な宗派の崇拜の外的な



形式、即ち説教、讃美歌、會議、書類等は、人間の宇宙に對する此の關係を、宗教的に表示したものである。

有り得る一切の宗教は、如何なる種類のものにもあれ、そのものゝ性質の如何に依つて、此等三つの、宇宙の解し方に應じて分類する事が出来るものである。

人にして動物的狀態を脱出したものは誰しも、必然的に、此等の關係中の第一、又は第二、又は第三のものを採用する。そしてそれが、名義上どんな宗派に屬して居やうと、その人銘々の眞の宗教となるものである。

智能ある人は、彼を取巻く宇宙に對して、何かの關係を持つ事なくしてはその中に生活せざるを得ないが故に、人は皆、必然的に、彼自身と宇宙との間に、何かの關係を認知するものである。又人は尙未だ、吾人が知れる、宇宙に對する三つの關係のみを案出した丈けであるから——各人は必然的に此等三つのものゝうちの一つのを取り、且つ、欲しやうが欲しまいが、人類が割り當てられて居る、その三つの根本的な宗教のうちの一つに屬するといふ事になつて来る。

それ故に、基督教國の教養ある人々の間には非常に有り觸れて居るところの、彼らは進歩の頂上に達してしまつたが故に、最早や何らの宗教も要せず、又有しないと云ふ確説は、結局かう云ふ事に歸着する——即ち、吾々の時代に取つて唯一の自然な宗教であるところの基督を捨て、彼らはより低級な、社會的、家族的、國家的な宗教を、その事實に氣付く事なくして維持して居るのである。

宗教を持たぬ——即ち宇宙に對して何の關係も持たぬ——人は、心臓のない人のやうに有り得ない

事である。彼は恐らく、心臓を持つて居る事を知らないやうに、自身が宗教を持つて居る事も知らないかも知れぬ。しかし彼は心臓なくして生き得ぬと同じやうに、宗教なしでは生存する事が出来ない。宗教とは、人が、周圍の無限の宇宙に對し、又その起源と根元なる者に對して持つと自認するその關係である。そして理性的な人間は、必らず、それらのものに對して、何かの關係を持たざるを得ないものである。

併し恐らく貴下は、人間の宇宙に對する關係を決めるのは、宗教の仕事ではなく、哲學の、乃至、若し人が哲學を科學の一部分としてそれに抱合せしめるならば、普通の科學の仕事であると云はれるかも知れない。余はさうは思はぬ。その反對に、余は、哲學をもその一部分として含めての廣い意味に於ける科學が、人間の宇宙に對する關係を決定し得ると云ふ推定は、全くの誤謬であり、又吾人社會の教養ある階級に普及せる、宗教、科學、及び道徳に關する混亂の主たる原因であると考へる。

哲學をも含めての科學は、唯次ぎの如き理由のみに依つて、無限の宇宙若しくはその起源に對する人間の關係を決定する事が出来ないものである——即ち、それなくしては、如何なる思考上の働きも又は人間と宇宙との如何なる種類の關係も不可能なるそれは、哲學や宗教の起る前に、既に存在して居るべき筈であると云ふ理由に依つて。

人は、有り得る限りの身動きを以つてしても、自身が如何なる方向に動くべきかと云ふ事を見出し得ないものである。が併し、必要に應じて各運動が、何か或る方向に行はれて居ると同じやうに、哲學や宗教に於ける心的努力で、斯る心的努力をなすべき方向を見出す事は不可能の事である。が一切

の心的努力は、前以つてさうするやうに定められた、或る方向に、必然的に行はれてゐる。そして、常に、一切の心的作業の爲めに此の方向を指示するのが、宗教である。プラトーンよりシヨペンハウエルに至る凡ての知名な哲學者は、常に、又必然的に、宗教に依つて彼等に與へられた、一つの方向に従つて來て居る。プラトーン及び彼の追隨者の哲學は、個々人の爲め、及び國家内の個人の集團の爲め、出來得る限り最大の幸福を獲得する手段を探索する、異教徒的の宗教であつた。中世紀の教會基督教は、同様の異教的的人生觀より出發して、個人の爲めに濟度の道を攻究した。——即ちそれは來世に於て最大の個人的幸福を得んとする手段である。そして唯その神權政治的な企てに於いてのみ、社會の幸福の爲めの設備に、手をつけた丈であつた。

ヘーゲルやコムト兩者の近代哲學は、その根柢に、國家社會的宗教風の人生觀を持つて居る。シヨペンハウエルやハルトマンの厭世哲學は、猶太宗教風の宇宙論から自由にならうと欲して、不本意乍らも、佛教の哲學的根柢を探り用ひた。

常に哲學は、單に宗教が人と宇宙との間に設ける關係から生ずる結果の研究であつた、又後々も常にさうであらう。何故なれば、その關係がはつきり定められない間は、哲學が仕事し得べき材料が何もないからである。

制限された意味での實證的科學も亦、さうである。斯る科學は、常に、單に宗教が人間と宇宙との間に設けた或る關係の結果として研究を要求して現はれる、左様な事物や現象に關する一切の探求と考察に過ぎなかつたし、又後々迄もさうであらう。

科學は、科學者が今日幼稚にも假想する如き「凡らゆる物」の研究ではなく、それは不可能な事である。何故なれば、研究されるべき對象が數限りなくあるから。唯單に、宗教が、研究さるゝ事を待つ無数の事物、諸現象、並びに諸條件の中から、然るべき順序に、又はそれらの重要さの程度に應じて撰らび出す、左様な事柄の研究で常にあつたし、又今後もさうであるであらう。そして、かゝる譯に依つて、科學は一個の分ち難いものではなくして、宗教の數があるだけ、それだけ多くの科學がある譯である。各宗教は、一揃ひの研究對象を撰び出すものである。それ故に、各異れる時代及び人民の科學は、對象を見る證據なるその宗教の特質を、必然に帶びて來る。

斯くの如くして、文藝復興期に於いて再興され、且つ今日とても基督教徒なる名稱の下に、吾々の社會に榮えつゝある異教的科學は、常に、人が最大の幸福を獲得し得るそれら一切の條件、及びその目的とするところのものを増進し得る類ひの一切の現象に就いての、單なる研究であつたし、又今後もさうであるであらう。波羅門教徒及び佛教徒の哲學的科學は、常に、人に壓迫して掛る苦痛より脱れ得る、それらの條件の研究であつた。ヘブライ人の科學(猶太の法典)は常に、人が、その神との契約を果す爲めに遵奉しなければならぬ、且つ選ばれたる人民をして最高の天職をなさしむべき、條件に就いての單なる研究であり、又説明であつた。教會基督教の科學は、人が濟度を得る條件の探求であつたし、又今でもさうである。つひ今生れつゝあるやうな眞の基督教の科學は、人をしてそこより人が出て來たその最高の意志の要求、及びその要求を、如何にして人生に適用すべきかと云ふ事を知らしめ得る條件の探求である。

哲學も、又科學も、人間の宇宙に對する關係は確立する事が出来ない。何故なれば、その關係は、哲學や宗教の出来る前に、確立されねばならぬものであるから。更に此の理由——即ち、哲學をもその一部分として抱含しての科學は、知的に諸現象を研究するものである——が故に、人々は、研究者としての地位、及びその經驗する感情より獨立してはかの關係を決める事は不可能であるが爲めに。しかし人間の世界に對する關係は、智力のみにてはなく、感情に依つて、又は人間の靈的諸力の全結合に依つて決められるものである。如何に多く貴下が、眞に存在する者は、唯觀念のみである事——又は、又は、凡てのものは原子より成る事——又は生命の本質は物質であり、或ひは意志である事——又は、熱、光、運動、電氣は皆、一つの、そして同一なるエネルギーの異つた表出である事——を人に向つて感じ、苦しみ、喜び、恐れ且つ望む人間に向つて、確かめ又は説明しようとも、宇宙に於ける彼の位地を説明する事は、全然失敗に終るであらう。

その位地、従つて彼の宇宙に對する關係は、彼に宗教に依つて明示されて居る。宗教は彼に、かう云つて居る。「世界は汝らの爲めに存在す。故に人生より得られ得る凡てのものを取れ。」又は「汝は神に依つて愛さるる選ばれたる人民の一人である。故にその人民に奉仕せよ。神の要求する、凡ての事をなせ。然るときは、汝は汝の人民と共に、得られ得べき最大の幸福を享けるであらう。」又は「汝は至高なる意志の働はたらき人である。その者は汝を、一定の仕事をなすべく、此の世に送つたのである。その意志を知れ、そしてそれを果たせよ。然る時は、汝が爲し得る最も善き事を、汝自身の爲めになす事になるであらう。」

哲學や科學の敘説を解する爲めには、準備と研究とが必要である。併し宗教を解する爲めには、その必要がない。その理解力は各人に、及び最も制限されたる者や無智識の者にさへも、附與されて居るのである。

人が、周圍の世界、又はその起源に對する自身との關係を知る爲めには、哲學並びに科學上の孰れの智識をも要しない。(意識に累をなす智識の過剰は、寧ろそれを知る爲めの阻礙物である)が併し、彼は寸時の間でもいゝ、世上の勞苦を捨て、自身の物質的の無價値なる事の意識を持ち、そして眞摯さを保つ事——(聖書に説かれてある如く)、子供達や、最も素朴なる無學の人達の間で、最も度數多く遭遇される諸條件——を必要とする。かの吾人が屢次、非常に學問あり教養ある人々が、淺薄なる異教に停滯する事を續けて居るに反して、一方、最も素朴なる、無學にして又無教育なる人々が、全く明瞭に、自覺して、且つ容易くかの基督教の人生に對する最高なる解説を消化する事を目撃するのは實にかやうな理由からである。故に、例へば、非常に賢明な、高い教育のあるシヨベンハウエルが爲した如く、世には非常に上品な、教育の高い人々にして、人生の意義は個人的なる悅樂、及び苦痛の廻避にあると考へ、又は高き教育ある諸の僧正がなし來つた如く、聖奠により、又は神惠の力による靈魂の救濟にあるとするものがある。が一方、殆んど文盲な、露西亞の百姓の一信徒にして、人生の意義を、何らの心的な努力をなす事無くして、世界の大神(エピクテタス、マアカス・アウレリウス、セネカ)に依つて考へられたる如く——自身を神の意志の一働はたらき人、神の子と確認する事にあるとして居るものがある。

然し貴下は余に問はれるであらう。「何が此の種の、無哲學な無科學な智識の本質であるか？若しそれが哲學的な、又は科學的な智識でないとするならば、何であるか？如何にしてそれが説明し得られるか？」と。此等の質問に對しては、余は唯かく答へ得るのみである。宗教的智識とは、他の凡ての智識が依つて以つて生ずるものであり、且つ、他の一切の智識に先立ちてある者なる故に、吾人はそれを説明する事が出来ない、何故なれば、吾人はかくし得る手段を持たないからと。神學上の言葉では、此の智識は啓示と名付けられて居る。そして若し人が、その「啓示」なる言葉に神祕的な意味を附せないならば、その名稱は全く正しい。何故なれば此の智識は、研究に依り又は一個人乃至多數の人の勢力に依つて獲得されたものではなく、唯、一個人又は數人が、漸次それ自らを人類に向つて啓示しつゝある絶對の智慧の表示を享ける事に依つてのみ得られるものであるから。

何故一萬年以前に、人生の意義は一個人性の幸福に限られて居ない事を、人々は了解し得なかつたか、又何故に人生に關するより高き理解——家族的、社會的、國民的、國家的な人生觀——が、人々に示される時が來たのであるか？何故に、歴史上の記憶の湮滅して居ない頃に、基督教の人生觀が人々に知らしめられたのであるか？そして何故に、それが特にこの人々の人々にと云ふ工合にして、又、斯る時代に於いて、異つた形で、はたなく一つの形を取つて知らしめられたのであるか？その理由を、時代の歴史的な状態、生活、及び此の人生觀を自由のものとしてそれを最初に言表した人々の性格と特殊な性能などのうちに探求して、此等の疑問に答へんと試みる事は、恰も斯る疑問「何故に朝日が他の物に達する前に或る物丈けを照らすのであるか？」と云ふ事に答へんと試みるのに類似して

居る。眞理の太陽は、世界の上をより高く昇つて行くに従つて、より多くの物を照し出す、そしてその輝く光線を最初に受け、且つそれを映し出すに適したものに依つて先づ第一に、反映させられるものである。然し或る人々をして、昇り行く眞理を享受するに適せしめる性質は、心の、特種な能動的な性質ではなく、その反對に、大なる穿鑿的な知力とは共存する事罕れなる、心情の受動的な性質、即ち決して哲學的又は科學的な學識を以つて著名ではなかつた凡ての宗教創始者に依つて説かれたるを吾人が知る、かの世間的心勞の放棄、自身の物質的無價値なる事に就いての意識、及び大なる眞摯さがそれである。

余の考へに依れば、主要なる誤謬にして、又他の孰れのものよりも多く、人道の基督教的部門の眞の進歩を沮害するところのものは、次の事實に存する。即ち科學者（今日モーゼの席を占めて居るもの）が——文藝復興期の時代に再興されたる異教的な人生觀で自身を導き、且つ基督教の本質を、確かにその人生觀を粗笨に曲解した或者であると考へて、——基督教は人類が生き續かして來た一状態である事、及び彼らの持つ古代的な、異教的、國家社會的の人生觀（これこそ本當に腐れ果てた人生觀である）が、人生に就いての最高の解釋であり、又人類が未永くそれに縋り着かねばならぬものでもありと云ふ事を、決定したと云ふ事に。彼らは此の見解を保持して、基督教——人類の近付きつゝある最高の人生觀——を理解しないのみならず、實に彼らはそれを理解しようとする事すらしないのである。

此の誤解の重なる源は、科學者が基督教と別れ、且つ彼らの科學がそれと一致しない事を認めて、

その罪が彼らの科學にではなく、基督教の方にあると、決めたところに存する。即ち、彼らは、眞の事情が果してどうであるかと云ふ事ではなく、彼らの科學が基督教よりも千八百年も遅れて、而も既に現代の社會の大部分に影響を與へて居る、然るに基督教は、科學より千八百年も遅れてしまつたと云ふ事を、信する事を喜ぶものである。

此の役割の轉倒から、人々が科學者と同様に、宗教の本質とその眞の重要さに就いて、及び道徳並びに人生に就いて、混亂した考へを持つに至ると云ふ驚くべき事實、更らに一層驚くべき事實、即ち今日の科學が——物質界の諸現象の研究には、確かに大成功を納めて居るにも拘はらず——結局人間生活の方面には役に立たぬもの、寧ろ害さへも與へるものとなると云ふ事實が、生じて来る。

故に、余は確かに、宇宙に對する人間の關係を定めるものは、哲學でも、又科學でもなく、それは常に宗教であると考へるものである。

故に、貴下の第一の質問「宗教なる語を、余は如何に解して居るか」に答へて、余はかう答へる、「宗教とは、人間が、彼自身と永遠無限の宇宙、又は、その起源及び初因との間に設けたる關係である」と。

第一の質問に對する答へより、第二のものに對する答へが、自然に出て来る。

若しも宗教が、人が宇宙に對して設くる關係——人生の意義を決定するところの關係——であれば、然る時は道徳は、人々が宇宙に對して何か一つの關係を取る事よりして必然的に生じて来る如き、左様な人間活動を指示するものであり、又説明するものである。そして、若し吾人が異教的、

社會的關係を個人的關係の擴張したものと考ふる時は二つの、又は、社會的、異教的關係を獨立したものと考へるならば、三つの、左様な根本的な關係しか吾人に知らされて居ないが故に——唯三つの道徳的な教へ、即ち原始的、野蠻的、個人的なもの、異教的、家族的、國家的、社會的なもの、及び人と神との奉仕に關する、基督教的、神的な教へが、存在すると云ふ事になる。

此等の宇宙に對する人間の諸關係の第一からして、その根柢に個人々々の幸福の追求を持ち、それが故に、個人に對して最大の幸福を許すべき凡ての條件を定め、且つは斯る幸福を獲得すべき手段を指示するところの、一切の異教の宗教に通有なる、道徳の教へが生じて来る。世界に對する此の關係より、異教の教へが出て来る。即ち最劣等の形に於けるエビキュリアン、現世及び來世に於ける劣等なる個人的幸福を約束する「ホメット教」の道徳の教へ、濟度 即ち、特に來世に於ける個人的な幸福を目的とする教會基督教の道徳の教へ、及び現世に於いてのみの個人の幸福を目的とする世間の實利主義者の道徳が。

人生の目的を個人の幸福に、勢ひ個人的な苦痛からの脱離にありとする、この同じ教へよりして、粗末な形の佛教の道徳の教へ、及び厭世主義者の世に行はるゝ教義が出て来る。

第二の、異教的な、人生の目的を個人々々の集團の爲めの幸福の獲得にありとするところの、宇宙に對する人間の關係からは、集團の幸福が人生の目的とせられて居るその集團に、人たるものは奉仕しなければならぬと要求するところの道徳の教へが生れて来る。その教に従へば、個人的幸福は、人生の宗教的基礎を形成する人々の全集團の爲めにする事得られると云ふ、その範圍内に於いてのみ正

當であり得る事となる。宇宙に對する此の關係よりして、個人性が常に社會の爲めの犠牲となつて居る、有名なる羅馬及び希臘の道德の教へ、並びに支那の道德が生じて来る。此の關係よりして又、猶太人の道德——選ばれたる人民の幸福の下位に、自身の幸福を置く——及び國家の善の爲めに個人の犠牲を要求する、吾らの時代の教會及び國家の道德が、生じて来る。此の宇宙に對する關係よりして又同じく、その全個人性を家族の爲め、又わけてもその子供等の爲めに犠牲にする、多くの婦人達の道德が出て来る。

一切の古人の歴史、及び或る範圍内の中世及び近世の歴史は、正しく、此の家族的、社會的、又は國家的道德に關する諸行爲の敘述で滿されて居る。そして今日の大多數の人々も——基督教を信奉するの故を以つて、自身の道德を基督教的なるものと考へては居るが——本當のところ、此の家族的、國家的、異教的な道德を守り、且つ若き時代の人々を教育するに當つては、その道德を理想として掲げて居るのである。

第三の、宇宙に對する基督教的關係——、人が彼自身を、至高なる意志のその目的を遂行する爲めの働き人であると思惟するところにあるその關係——から、その人生觀と對應するところの、至高なる意志への人間の從屬を説明し、且つその意志の要求を定める道德の教へが、出て来る。

人間の宇宙に對するこの關係より、世に知られたる最高の道德の教への一切が、出て来る。ピタゴラス派、ストア派、佛教徒、波羅門教徒、及び最高の形の道德信者等の教へ、並びに人間の個人的意志——及び彼自身の幸福だけでなく、彼の家族、社會、及び國家の幸福をも——吾らを此の世に送り

たる者の意志——吾らの良心に依つて明示される意志——を充たす爲めには放棄する事を要求する、眞の意味の基督教の教へ等がそれである。

無限の宇宙乃至その起源に對する此等三つの關係中の、第一、第二、又は第三のものより、如何なるものを道德として信奉し又は教へようとも、又は如何なる風を装はうとしても、各人の眞の偽らざる道德が、そこからして出て来るものである。

それ故に、自己の宇宙に對する關係は、本當のところ自身の爲めに最大の幸福を獲得するにあると考へて居る人間は——どれだけ多く彼の家族の爲め、社會の爲め、國家の爲め、人類の爲め、又は神の意志の遂行の爲めに生きる事が宗教だと考へると彼が云ふとしても——又巧みに作り又は人を偽かうとも尙常に、彼の行爲の眞の動機は、單に彼の個人的な幸福の獲得にあるであらう。それ故に、孰れか一つを撰ばねばならぬやうな場合に際しては、彼は彼の家族又は國家の爲め、又は神の意志を行ふ爲めに、彼自身の個人性を犠牲にはせずして、寧ろ彼自身の利益のために、自身の家族及びその他のものを凡て犠牲にしてしまふであらう。彼は唯個人の幸福といふ事にのみ、人生の意義があるとするが故に、宇宙に對する彼の關係が變更するやうな時が来る迄は、彼はそれ以外の事はする事が出来ないものである。

そして又それと同様に、人生に對する關係が、その人自身の家族、(多くの婦人達に於ける場合の如く) 黨派又は國民(壓迫されたる國民の各員、又は奮闘の時代を政治的に活動する人々の間に見出さる如き)の爲めに盡すと云ふ事にある人は——如何に自身が基督教徒であると力説しても——彼の道

徳は何時も基督教的ではなくして、家族的又は國家的であるであらう。そして一方家族又は社會の幸福、及び彼の個人性の幸福と、他方神の意志の遂行との間に、何か避け難い或る撞着が起る時は、彼の人生觀に依るとその爲めに生存して居ることになるその集團への奉仕の方を、彼は必然的に撰ぶであらう。何故なれば彼は唯、かゝる奉仕にのみ人生の意義があるとするからである。又同じ様に、宇宙に對する自身の關係は、彼を此世に送つた神の意志を遂行するところにあると思惟するその人は、——彼の個人性、又は彼の家族、國民、帝國、全人類等の要求と一致して、彼に附與された理性と愛の働きの依つて認知されるその至高なる意志に戻る行爲をしなければならぬと、諸君が如何に多く彼に説き聞かせやうとも——常に、彼を此處に送つたその意志に従ひ得ないよりは、寧ろ一切の人間のな約束を犠牲にするであらう。何故なれば、かゝるその意志への從隨のうちのみ、彼の人生の爲めの意義を認め得るが故である。

道徳は宗教から、獨立してあり得るものではない。何となれば、道徳は宗教より結果するもの——即ち、人が宇宙に對して持つと感じるその關係より結果するもの——である許りでなく、又宗教の中に含まれ（佛蘭西語で云ふ *implicite* され）て居るから。凡らゆる宗教は、次の疑問「我生の意味は何であるか？」に對する答へである。そしてその宗教の答へは、人生の意義に關する説明に伴ふ、又はそれに先立てる或る種の要求を含むものである。その疑問「人生の意義は何であるか？」は、かうであらう。「人生の意義は個人の幸福にあり、故に汝の達し得る凡ての便益を取り用ひよ。」又は、「人生の意義は、人々の或る集團にあり、故に汝の全力を盡して、その集團に仕へよ。」或ひは、「人生の意義

は、汝を此の世に送りし神の意志を成就する事にあり、故に汝の全力を用ひて、その意志を知り又はそれを充さん事を試みよ。」又同じこの疑問は、次の様な風にも答へる事が出来る。「汝の生の意義は汝の個人的なる悦樂にあり。何故ならば、そは人間の生存の目的である故。」又は「汝の生の意義は、汝がその一員と思考する集團に仕へる事にあり。何故ならば、そは汝の運命なればなり。」或ひは「汝の生の意義は、神に仕へるにあり。何故なれば、そは汝の運命なるが故に。」

道徳は、宗教が人生に關して與へる説明の中に含まれて居るものである。故に、宗教より決して分離し得られるものではない。此の事の正しい事は、かの非基督教的哲學者達が、彼らの哲學より最高なる道徳の教義を導き出さうとする企てに於いて、特に明らかな事である。斯くの如き哲學者達は、基督教の道徳を缺くべからざるもの、それなくしては吾人は一日とても生きる事能はざるものと見て居る。のみならず彼等は、その道徳は既に存在する一事實である事を知つて、彼等の非基督教的哲學にそれを從屬せしむべき何かの方法を見出さうとし、その基督教の道徳が、彼等の異教的、社會的哲學から出来たものと見えるやうに、小刀細工をしようとして居る。彼等の企圖するところのものは、以上の如くである。が彼等のやるその努力が、他の何物よりも増して明瞭に、基督教の道徳は單に異教的哲學より獨立したものであると云ふ事のみならず、又個人的幸福及び個人的苦痛よりの釋放、若しくは社會の幸福等に關するその哲學とは、全く正反對の位地に立つものである事をも示すものである。

基督教的倫理、それは吾人が認知せる吾人の宗教的的人生觀と一致して、集團の爲めの個人性の犠牲

丈けではなく、又神への奉仕の爲めに、個人性及び集團を一樣に捨て、顧みない事をも要求するものである。が異教的哲學は、唯單に、個人の爲めの或は個人の集團の爲めの幸福を獲得する手段を研究するに止まる。従つて、二者の相反するは、當然の事である。そして此の相反を蔽す手段が唯一ある。——即ち、抽象的な條件付きの概念を、一つの上へ又一つと云ふ工合に積み重ねて、露深い形而上學と云ふ領土を固守する事に依つてである。

後期文藝復興期の多くの哲學者達のやり方は、皆さうであつた。そして此の事情——即ち基督教の要求（既に認容されたる）をして、異教的な礎の上に築かれた哲學と一致せしめる事の不可能なる事——に、かの恐ろしき虚偽、曖昧な事、理會し難き事、並びに人生より離間せるもの、一切が、歸せしめられなければならない。これが、近代哲學の特徴である。スピノーザ（彼は事實自身を基督教徒であるとはしなかつたにも拘はらず、その哲學は、基督教的な素地より出て居る。）及びカント（異議なく自身の倫理學の體系を、自身の形而上學と何の繋りないものとして取扱つた天才）を除いて他の凡ての哲學者は、かの立派なシヨベンハウエルでさへも、明らかに彼等の倫理學と形而上學との間に作爲的なる結合を案出して居る。

基督教倫理は、先づ第一に承認されねばならぬところの、確固と立ちて哲學とは何の關りもなく、又それを支ふる爲めの支柱の如きは何も要しない或る物であると云ふ事が、感ぜられる。又、哲學は單に、基督教倫理と矛盾しない爲めに、と云ふよりは寧ろそれに從屬し、且つそれより生ずるやうに見せしめる爲めに、或る何かの提案を工夫して居るものに過ぎないと云ふ事も、感ぜられる。されど

左様な提案は凡て、抽象的に考へられては居るがそれは基督教倫理を、唯辯護する感を呈するに過ぎないものである。それらの提案が實際生活上の問題に適用されるや否や、その不適合な事、及びそれ以上の事即ち哲學の根柢と吾人が道德と思惟するものとの間にある明らかな相反が、忽ち充分なる程度で現はれて来る。

最近になつて非常に賞讃されるやうになつた不幸なるニイチエは、此の相反を曝露する事に依つて價值ある一つの役目をなした。彼が現代の非基督教的哲學の見地よりして、道德上の一切の規則は虚偽であり偽善であると云ふ時、且つ、人が彼自身の超人（Übermensch）を案出してその一人になる事はそれら超人の踏み臺とならなければならない群集の一人となるよりも、より遙るかに有益な、喜ばしき、又より以上合理的な事であると云ふ時の、その彼の言葉は争ふべからざるものである。異教的人生觀に基礎をもつ如何なる哲學的解釋も、人に向つて、彼が欲し、分り、且つ彼自身の爲めに、又は家族、社會等の爲めに幸福であり得る事を知つて居るその幸福の爲めに生きずして、他人の幸福の爲め——欲しもしなければ分りもせず、又は微小なる人間の力では得る事さへ出来ない幸福の爲めに生きる事が、より有益で且つより賢しいやり方であると云ふ事を、證明する事は出来ないものである。人間の幸福にのみ限られたる人生觀を基礎とする哲學は、何時か死ぬであらう事を知つて居る人に向つて、その人の希望し了解する、且つ疑ひもなき幸福を——他人に對する或る幸福ではなく（何故なれば、彼は如何なる結果が、その犠牲から生ずるかを知らないから。）唯——さうする事が正しく且つ善である。即ちそれは至上命令であると云ふ理由の爲めに、放棄してしまふのが彼に取つて善であると



云ふ事を、決して證明する事が出来ないであらう。

此の事を、異教的な哲學の見地より證明しようとするのは、不可能な事である。人々は平等である事——他人をして自身に代へしめて、それらの人々の生命を蹂躪して了ふよりは、他の人々に仕へる事に依つて自己の生命を犠牲にする事の方が、人間としてより善なる事——を證明せんには、人は先づ、自身の宇宙に對する關係をも一度決定し直して見る必要がある。即ち人は、取捨の權利を持つてゐないのが人間の地位であると云ふ事を経験で知らなければならぬ。何となれば、人生の意義は人間を地上に送つた神の意志を遂行する事であり、且つ人間を送つたその神の意志は、他の人々の奉仕に自身の生命を捧げねばならぬと云ふ事にあるからである。而して宇宙に對する人間の關係のうちにかゝる變化の起るのは、唯宗教丈けからである。

異教的な科學の根本的な立ち場から、基督教道徳を演繹し、又はそれに從屬せしめやうとする企てに關しては、次の如くである。如何なる論辯も、又如何に精密なる思想も、今日の科學の一切の基礎たる進化の法則は、普遍的な、永遠な、且つ又不變な法則——生存競争及び適者生存の法則に基いて居る事、又、それ故に、彼自身及び彼の集團の幸福を獲得せんとする各人は、彼及び彼の集團が亡びず、他のものをしてより少く適者たらしめる爲めに、「最適者」たり、且つ彼の集團をもさうあらしめる事に心がけねばならないと云ふ、此の單純にして明瞭な定論を破壊する事が出来ない。

此の法則の論理的な結果及びその人生への適用に驚かされたる或る自然主義者達が、如何に多く、言葉を以つてその事柄を掻き亂し、又は此の法則を驅逐しようとも、——彼等の努力は唯、全生物界

の生命を司配し、且つそれが故に人間の生命をも動物と見做すその法則の避け難い事を、一層明瞭にならしめる許りである。

余が此の論文を書き初めた後、英國の或る學會でなされたハックスレー氏の「進化と倫理」と云ふ演説を集録した論文の、露西亞譯が出た。その論文に於いて、博學なる教授は——我國のベテエコフメ教授、及び同じ主題にて書き、且つ彼らの先輩よりは成功を納める事の少なかつた、多くの人々と同じく——生存競争は道徳を侵害しない事、及び生存競争を人生の根本的な法則としての容認と平行して道徳は存在し得るのみならず、進歩さへもし得ると云ふ事を證明せんとして居る。ハックスレー氏の論文は、凡らゆる種類の諧謔、詩句、及び古代の宗教や哲學に關する總括的な見解で充たされて居る。そして非常に華やかな複雑したものであるから、大なる努力を以つてしてのみ、人はその根本の思想に達し得られる。がそれは兎に角として、その思想といふのは次の通りである。進化の法則は道徳律と逆行す。此れは、古代の希臘人、印度人に知られたる思想である。これら兩者の國民の哲學及び宗教は、彼らに自己放擲の教義を齎した。その教義を、著者は正しくないと考へて居る。正しい教義とはかうである。著者が宇宙律と呼ぶ一の法則が、生物の一切が戦ひ合ひ唯その最適者のみ生存すると云ふあの法則と一致して存在して居る。人間も亦、此の法則に從屬する者である。そして人は、今あるが如くになつたと云ふ事に對して、唯感謝すべきである。然し此の法則は、道徳律と逆行する。しからば、如何にしてそれを道徳律と調和せしむべきであるか？それは、次の方法で仕遂ける事が出来る。一つの社會的進歩の法則が存在する。それは宇宙の進行を沮め、それに代へるに今一つの、倫

理的な進行を置かん事を求めるものである。その倫理的進行の目的は、最適者の生存ではなく、倫理的な意味に於ける最善者の生存にある。ハックスレー氏は、何處から此の倫理的な進行が生れ出でたか説明をして居ない。たゞ第廿の脚註に於いて、此の進行の根底となるものは、一面に於いて人は動物と同じく共同生活を好むが故に社會に有害なるものを自らの衷に抑制し、他面社會の各員は、社會的幸福に反する行爲を極力抑壓すると云ふ事にあると云つて居る。ハックスレー氏に取つては、人々をしてその一員たる集團の保存のために、又は集團の秩序を亂せば罰せられると云ふ恐れのため、その慾望を抑へしめる此の進行が、かの倫理的な法則に、彼が證明せんと欲する存在を與へるものと見えらるらしい。ハックスレー氏に取つては、彼の幼稚なる精神に於いては、今日存在する如き——愛蘭問題、下層階級の貧窮、富者の亂暴なる奢侈、阿片や酒精の賣買、死刑、商業及び政治の爲めの諸種族の虐殺や絶滅、又は隠れたる惡徳と偽善等を持つて——英國の社會に於いて、刑法を侵害しない人が倫理的な法則に従へる道徳的な人間であるやうに見えるらしい。人の住む社會を維持するのに必要な諸性質は、その社會に取つて——例へば、泥棒仲間の各員の諸性質がその仲間に有益であり、又は吾人の時代に於いて、死刑執行人、監守、裁判官、兵士、及び偽善者の僧侶等の諸性質を有益なものとして居るやうに——有益であるが、こゝらの諸性質は、道徳律とは何等共通點を持たないと云ふ事を忘れて居る。

道徳律とは、絶えず發展し且つ成長するものである。故に、或る一つの社會の現存せる規則に合致せしめたり、又はその規則を斧や死刑臺へハックスレー氏は、それらを皆に道徳律の手段であらんと云

つて居る)に依つて保存する事は、道徳律の維持とならないわけではなくて、反つてそれを侵害する事となるであらう。そしてそれと反對に、現存せる秩序に對するあらゆる侵害——イエス及び彼の弟子達に依つてなされた羅馬の地方の規則侵害ではなく、法律處分、徴兵、軍備税の支拂等の仲間入りをなす事を拒絶する人に依つてなされる現代の規則侵害の如きもの——は、唯に道徳律を顯表する爲めの避け難い一つの條件となるであらう。

仲間を食つてはいけなさと考へてさう行動する食人者は、彼の社會の秩序を犯すものである。それ故に、何か一つの社會の秩序を侵害する行爲は、不道徳であるかもしれないけれども、道徳律の範圍を押し擴げる凡ての眞の道徳的行爲は、確かに常に社會秩序の侵害であるであらう。故に、若しも一つの法律——それは倫理的な法律でない。その反對に、概して一切の倫理と相反する法律であらう——が社會に現れたとしても、かの生存競争の法則が、隠れて外にその姿を見せぬやうな形を取つたに過ぎない。それは又同様に生存のための競争である。然しそれは個人から個々人の集團に變つて行つては居るが。それは争闘の中止ではない。たゞより激しく殴らんために、手を後方に振り戻したに過ぎない。

若しも生存競争及び適者生存の法則が、全生命の永遠な法則であるとしたならば(吾人が人間を動物として考へるならば、さうである事を容認せざるを得ない。——然る時は、社會的進歩と、その法則から出來し若しくは偶然に (deus ex machina) (からくりから取り降した神)のやうに)その法則がなくなつたりした時は唯も知らない處から飛び出て來る倫理的な法則とに就いての、どんなに混亂した議論

でもその法則を亂す事が出来ぬ譯である。

若しも社會的進歩が、ハックスレー氏の吾人に説くが如く、人々を集めて集團となすものならば、然る時は、争闘及び生存が、それらの家族、黨派及び國民の間に相續いで起るであらう。又争闘は、吾人が實際生活に見る如き個人間のものと同じく、道德的でないばかりでなく、それよりも寧ろ一層殘忍な不道德なものであるであらう。

假りに吾人が、有り得ない事を有り得るとし、且つ次の一千年の間に、社會的進歩のみに依つて、全人類が一つのものに結合して、單一なる國民、單一なる國家を形成するとしても、——その時ですら、(國民や國家間に行はれなくなつた争闘は、人と動物世界との間に持續され、常に争闘として——即ち吾人の奉ずる基督教道徳の可能なる事を全然排斥して、一つの活動として持續するであらう事は云ふ迄もなく)——その時ですら、その結合を形成するところの個人間、及び家族、黨派又は國民間の争闘は、消滅しない許りではなく、吾人が個人や家族、國民、國家等のあらゆる聚合に於いて目撃する如くに、新しき形を取つて持續するであらう。家族の各員はお互ひに、又は傍觀者とも口論し且つ争ひ、時とするよりひどい程度で、且つ惡意を持つてやる事がある。國家に於いても、正しく此れと同じ事である。一國家内に住む人々の間で争闘が、丁度國外の人々となしたと同じやうに持續される。唯それは、他の形を取つて行はれて居るに過ぎない。一つの場合では、殺戮は矢やナイフで行はれた。他の場合では、それは饑えに依つて行はれる。若し家族が又は國家の兩者内に於て弱者が助けられるとしたならば、それは社會的結合の爲めではない。家族及び國家として結合せる人達の間に、愛と

自己犠牲とが存して居る故に起るのである。若しも家庭の外で、二人の子供のうちの適者が生存し、一方善き母の家庭内では、その二人共が生き残るとしたならば、それは家族としての結合より結果する事ではない。その母親が、愛と自己犠牲とを持つて居ると云ふ事實から起るのである。而して自己犠牲や愛は、いづれも社會的進歩より結果し得るものではない。

社會的進歩が道德律を産出すると主張する事は、ストーブの築造が熱を造り出すと主張するやうなものである。

熱は太陽から来る。そしてストーブは唯、燃料(太陽の活動からの結果)が中にくべられる時のみ、熱を發散するものである。それと同じく道德律は宗教から来る。特殊な形式の社會生活は、宗教的影響の結果——それは道德律である——がその中に入れられる時のみ、道德律を生み出すものである。ストーブは、熱せられれば暖氣を與へやうし、熱せられなければ、冷くその儘で居やう。それと同じく、社會的形式が道德律を取り入れれば、社會に道德的影響を與へやうし、道德律を含まなければ社會に影響を與へる事なしにその儘で居よう。

基督教道徳は、異教的社會的人生觀の上に基礎を置く事は出来ない。且つ哲學又は非基督教的科學より演繹する事が出来ぬ計りでなく、それらのものと合致する事すら出来ない。

それは各々眞摯な整然として矛盾なき哲學及び科學に依つて、常に了解され來つた事柄である。それらは云つた、全く合理的に。「若し吾々の提案が道德律と契合しないならば、道德律の爲めに、それが甚しければ甚しい丈けよくない。」そしてそれらの研究を續けて行つた。

宗教に基礎を置かない倫理的論文、又は世上の宗教問答篇さへも、書かれ、且つ教へられて居る。そして人々は、それらに依つて人類が導かれるものと想像するかもしれない。然しそれは、唯さうであるらしく見える丈けに過ぎない。何となれば、實際のところ人々は、それらの倫理的論文又は宗教問答篇ではなく、常に持ち来り、且つ今でも持つて居る宗教に依つて指導されて居るが故に。それに反してそれらの論文及び問答篇は、唯宗教より必然に現れ来るところのものと酷似して居ると云ふに止る。

宗教の教義に基礎をもたない世上の道德の指導は、音楽に門外漢でありながらコンダクターの椅子に坐つて、演奏しつゝある経験積める音楽家達の前で手を振り始める人の動作に似て居る。その音楽はそれ自身の動力で、又はそれらの音楽家達が以前のコンダクターより學び得たところのものに依つて、暫くの間は繼續するであらう。が併し、音楽に就いて無智なる男のなす指揮棒の運動は、唯に明白に無用なものである許りでなく、又確かに時のたつに伴れて音楽家達をまごつかせ、且つはオーケストラを亂してしまふであらう。これと同様なる困惑は、社會の上に立つ人々に依つて、道德律は基督教的人間に消化され始め、又は幾分既に消化されて居るかの最高の宗教の上に基礎を有せぬと、人々に教へんとするその企ての爲めに、現代に於いて人々の心の裏に起り始めて居る。

道德の教へを迷信と一緒にしないと云ふ事は、實に願はしき事である。が肝要な事は、道德の教へは、人が宇宙又は神に對して取る或る何かの關係の結果であると云ふ事である。若しもその關係が、吾人に取つて迷信的なものと見える形で現はされて居るならば、それを矯正する爲めに、吾人はそれ

を一層合理的に、明白に、且つ又正確に示す事を試み、或ひは從來の、人の宇宙に對する關係（今や不十分なものとなれる）を破壊して、それに代ふるに、一層高き、明白なる、又より多く合理的なものを作成することをすら試みなければならぬ。然し吾人は如何なる場合に於いても、詭辯の上に、又は單に全然無一物の上に基礎を置く所謂世間の非宗教的な道德を、案出してはならない。

道德を宗教と離れたものとせんとする企ては、恰も子供達が、彼らを喜ばす草花を移し植えようとして——彼らを喜ばさず、又彼らに取つて用のない根からそれを抜き取つて、根なしで地面にそれを突き差して置く時の、そのやり方に似て居る。宗教の根底なくしては、丁度根なくしては眞の草花のあり得ないやうに、そこには眞の眞摯なる宗教はあり得ないものである。

故に貴下の二つの質問に對して、余はかう云はふ。宗教とは、人に依つて、彼の分立せる個人性と、無限の宇宙及びその根元との間に設けらるゝ、或る一つの關係である。そして道德とは、人生に對する、その宗教より結果する常住の指導者である」と。(完)

理性と宗教

(一質問者への手紙)

貴下は余にお訊ねになる。

一、特別な知的才能のない人々は、彼らが到達したる内的生活に關する眞理を、言葉で現す事を求めたいものであるか？

二、自身の内的生活に關して充分な又明白な理解を得んと試みる事は、尙價值のある事であるか？  
三、如何にして吾人は、骨折又は疑惑の瞬間に於いて吾らに語るものは、良心か又は吾らの薄弱な精神に誘惑された知力のいづれであるかを知るべきであるか？（此の第三の問は、短かくする爲に、貴下の意味を變へないやうにして余の言葉でも一度云ひ直しました。）

此らの三つの質問は、余に取つては、凡て一つのもの——第二に總括されてしまふやうに思へる。何故なれば、若しも吾人が吾人の内生活に就いて充分な又明白な理解を得ようと試みないならば、然る時は又、吾らが達したその眞理を言表しもしなければ、又さうする事すら出来ないし、又疑惑の瞬間に良心と、誤れる理窟との二つに分れて吾人を導くやうな、そんなものは何も持たない事になるから。然し若しも、人間の心力が（それらの力は大であらうと、又小であらうと）達し得られる、最大の明確さを求める事を正しいとするならば、然る時は又、吾人は吾人が達したその眞理を言表すべき

筈であり、又窮極の點にまで明白にして言表されたその眞理に依つて、骨折や疑問の瞬間に吾人は指導されねばならない筈である。それ故に余は、貴下の根本的な質問に對して肯定的に答へる。即ち、各人は、彼がなすべく此世に送られたその目的の遂行の爲め、又は眞の幸福（此の二つは常に一致す）を得んが爲めには、彼の依存するその宗教的基礎を自身に明らかにすべく心の全力を盡くさなくてはならない、言ひ換へれば、自身の生の目的を明らかにしなければならぬと。

六呎立方に就いて幾何と云ふ風に賃金を貰つて居る無教育な土方らの間に、數學的計算は詐欺的なもので當てにならぬと云ふ確信が、一般に行き渡つて居るのに余は屢次遭遇した。これは、彼らは數學を知らぬが故、又は彼らの掘る土を計算する人々が、故意にか又は不知不識の間に彼らを胡魔化する故かのいづれかにあるとしても、數量を計算すべき數學の正確と適用性とに對する不信仰が、此等労働者の間に固く根を据えた事、及びそれら不信仰の多くは、彼らが證明する必要ありと考へる事すらしない疑ふ餘地のない、信實なものとなつて居ると云ふ事は、どうしても事實である。

無宗教と余が差支へなく呼び得る人々の間にも、同様なる意見——理性は宗教上の諸問題を解き得ないし、又此等の諸問題に理性を適用する事は、間違の重なる基で、又理性で宗教問題を解かうとする事は、馬鹿な高慢心であると云ふ事に結局なる意見——が、根を据えてしまつて居る。

余が特にこれを云ふのは、人は充分な明白な理能を得る事を試みなければならぬかどうかと云ふ事に關する貴下の質問が、理性は宗教問題の解説に適用し得ないと云ふ推測からのみ普通起り得る種類のものであるからである。しかしその推測は、計算が數學の問題を説き得ないとする推測と同じく、

奇體な、又明らかに間違つたものである。

人間は、唯一つの、それを以つて彼自身を知り且つ自身の宇宙に對する關係を知る道具を、神から直接に受け取つて居る。——彼はそれ以外に何物も持たぬ——そしてその道具が、理性である。が不慮に彼は自身の家庭、家族、商業、政治、科學、或は藝術等の諸問題を解明する爲には理性を使用してもいゝが、それをなすべく彼に附與せられた第一の目的であるその事を解明する爲めには、それを使つてはいけなると云ふ事を命ぜられる。人は、彼の全生命の依存するその最も重大な眞理を解明する爲めには、斷じて自身の理性を使用してはならぬし、又左様な眞理をば、理性を離れては何物をも知り得ないにも拘はらず、彼の理性から離れたものとしなければならぬと云ふ風に、考へられるかも知れない。人々は云ふ、「神來に依つて、即ち信仰に依つて認知せよ」と。が事實人は、彼の理性を離れては、信する事さへも出来ないものである。若し人が一つの事を信じて他を信じないとするならば、彼は唯それを、彼の理性がこの事を信じてはいけない、があゝの事を信ぜよと告げるからこそするのである。人に、理性に導かれてはならないと告げる事は、暗黒な罅窟でランプを持つて居る人に向つて、ランプを消して、光りではなく他の何物かに依つて、導かれねばならないと、云ふのと丁度同じ事である。

然し恐らくは、かう云ふ事が云はれるかも知れない。(貴下も手紙の中で云はれたやうに) 凡ての人は皆大なる知力、特に自身の思想を云ひ表はすべき能力を賦與されては居ない、故に宗教に關する彼等の思想の下手な表現に依つて、間違を惹起すかも知れぬと。それに對しては、余は福音書の中の言

葉を以つて答へよう、賢き者より隠されて居る事は嬰兒には示されて居ると。そして此の云ひ方は誇張でも逆語でもない。(人が吾人を喜ばさない福音書中の言葉を、決つてさう考へて居るやうに) が併しそれは最も簡單にして最も明白な眞理、即ち此の世の一切の人間には従はねばならぬ一つの法則が與へられて居り、且つ此の法則を認知し得る爲めに、各人は適當な器官を貰つて居ると云ふ事を説いたものに過ぎない。そして、その故に、各人には理性が賦與されて居り、且つその理性に依つて人の従はねばならぬ法則が各人に示されるのである。その法則は、唯、それに従ふ事を欲しない人々、及びその法則に従はずに居ようが爲めに理性を斥け、又は眞理を認知する爲めにとて與へられた理性を用ひずして、同じく理性を斥けて居る人々の指導を信仰する人々に丈け隠されるものである。

人の従ふべき法則は、凡ての子供達にも受納される位に簡單なものである。就中、人が彼の法則をも一度發見する必要がない故を以つて。吾等よりも以前に生活した人々は、それを發見し且つ言表して置いた。故に人は唯、彼が傳習の形で表はされて居るその提案を、彼自身の理性を以つて、善惡を確かめて——認容するか斥けかすればいゝ譯である。然し人は、法則に従ふ事を欲しない人々の勸告通りに、行動してはならない。傳習に依つて、自身の理性を妨けてはならない。その反對に、理性に依つて傳習を妨遏しなくてはならぬ。傳習は人間より生ずる虚妄なものであるかも知れない。が理性は、確かに神より來り、且つ虚妄なものであり得ないものである。そして、それが故に、その眞理を知り且つ表す爲めには、特に大なる能力を要せぬ。唯吾人が、その理性は人間の裏の最高の、神性な性質であるのみならず、彼が眞理を獲得する爲めに所有せる唯一の道具でもあると云ふ事を、信じさ

へすればいゝのである。

特殊な才能や知的天賦は、眞理を知り且つ述べる爲めに必要ではなく、唯虚妄な事を發明し且つ述べる爲めのみ必要とせられるものである。それらのものが、一度理性の指示を斥けてそれを信する代りに、淺薄にも、それらに眞理として提出されるものを容認し出すと、人々は、云ひ現し又は何かの眞理と結び付けるに、眞の心の大なる精密さと異常なる天分とを要する如き、左様な複雑した不自然にして矛盾多き提案を、(普通法則や啓示、又は教義等の形を眞似ねて) 山と積み上げ、且つ淺薄にもそれを容認するやうになるものである。

人は自身を現代の一人にして、諸の基督教會の孰れか一つの——加特力教、露國希臘正教、或ひは新教——の宗教上の信仰に依つて教育され且つ幼年時代に植え付けられたその宗教的原理を明らかにし、又はそれを實生活に結付けんと欲するところの者であると、一寸假想して見るがいゝ。——その時如何に複雑せる知的努力を、彼の教育が彼に植え付けた信仰の中に含まれて居る凡ての矛盾、即ち、創造者であり又善である神が——惡を造り、人々を罰し、又は料を要求する等の如き、又は、吾人自身が愛と寛恕の法則を信奉しながら、尙人を死刑にしたり戦争をし、又は貧者の作り出すものを奪ふたり、其他の事をするやうな矛盾を、修正する爲めに拂はなければならぬ事であらうぞ。

此等の解き難き矛盾の解放、或は寧ろそれらを人間自らの外へ蔽す事の爲めには、大なる能力と特殊な心的天賦とが必要である。然し、人間生活の法則を知る爲めには、或ひは貴下の云ひ分に依れば人間の信仰を充分且明白に了解する爲めには、何等特殊なる心的天賦も要しない。——吾人は唯、理性

に反對な何かを容認しないやうに、又我等の理性を否定しないやうにと注意して、宗教的に我等の理性を導き且つそののみを信じさへすればいゝのである。若しも自身の意義が曖昧に見えるならばそれは、その人の理性が、その意義を説明するための用に立たない事の證明とはならない。それは唯、彼が餘りに不合理的なものを輕卒に信じ過ぎたが爲めである事と、それが故に、理性に依つて證明され得ないものを、等閑に附せなければならぬと云ふ事を示すものである。

それ故に、貴下の根本的な質問、吾々は吾々の内的生活に就いて、明瞭な理解を得んと努むべきであるか否かと云ふ事に關する余の答は、かうである。それは吾人が生活中に於いてなし得る、最も肝要にして重要な事柄であると。それは、我等生活の唯一の合理的な意義は、吾人を此の世に送つた神の意志の遂行にあるが故に、肝要にして又重要な事である。然し神の意志は、何かの異常なる奇蹟、神の手に依る石板上の法則の記録、聖靈の助けに依る絶對なる書物の編纂、又は聖者或はそれら人々の集合の絶對の正しさ等に依つてはなく、行爲、言葉の兩者を以つて、絶えず人々に自らを明らかにして居るところの眞理の意識を傳へる、凡ての人々に依る理性の使用に依つてのみ認知せられるものである。その認知は、嘗つて一度も完全であつた事はなかつたし、又今後もさうであらう、がそれは人類の進歩するに従つて増大して行く。吾人が長く生活すればするだけ、それだけ明白に、神の意志を認知し、又それに従つて、一層よく、吾人が遂行すべきものを知るに至るものである。それ故に余は、一切の宗教的眞理に關し、各人(如何に微小に、彼自身に又は他の人に彼が見えやうとも——最小のものが最大のものである)に依つてなされる解明は、到達され得べきものであり、又それに就いての



## 神に就いての考察

### 教宗と性理

言表は（何故なれば言表は思想の、完全なる明確さを示す確かなる一の特徴であるから）主要にして又最も神聖な、人たるものゝ任務であると思惟するものである。若しも余の答へが、幾らかの程度で貴下を満足させる事が出来たならば、幸甚であります。（完）

神とは、私に取つては、私の追ひ求めるもの——追ひ求めるが故を以つて私の生活を構成し、従つて私に取つては存在するものである。が神は必然的に、私が理解したり又は命名し得る類ひのものではない。

若しも私が神を理解したとせば、私は彼に到達してしまつた事になり、追ひ求める何物もなくなつてしまつて、生活と云ふものが無くなつたと云ふ事になる。が又これは矛盾した事のやうに聞えるかも知れないが、理解し又は命名する事さへ出来ないのに、尙同時に私は彼を知り且つ彼への方向を知つて居る。そしてそれは、私の凡らゆる智識のうちでの一番確かなものである。

私は神を理解して居ない、が同時に私は彼なしで居る事は常に不安であり、又神と共に居る時のみ不安ではない。尙一層不思議な事には、現在私が知つて居るよりも一層多く又正しく神を知ると云ふ事は、今此の現在の生活に於ける私の要求でもなければ又緊要な事でもない。私は神により近く近付く事が出来る、そして私はさうする事を欲する——さうする事に私の生活はある。然し斯る接近は、私

の智識を決して殖やもしなければ、又殖やす事さへ不可能である。

神を知らんとする空想上の努力は、より決定的に（例へば、我が創造者として、或は恩恵者として）私をして神より一層遠くに斥け、且つ神に接近する事を沮止するものである。

尙一層不思議な事には、私は眞に——即ち、私自身又は他の何物より以上に——唯神のみを愛する事が出来る。此の愛のみが唯、如何なる沮害をも、退歩をも（その反對に凡てのものが増大する）淫逸をも、不信實をも、屈従をも、恐怖をも、又自己満足をも知らないものである。唯此の愛を通してのみ、人は善であるところの凡てのものを愛する。故に人は唯神を通して、又は神に依つてのみ愛し、且つ生きるものである。

此れは私の考へ方、と云ふよりも感じ方である。唯私は「彼」と云ふ代名詞が幾分の神に関する考へを破壊する、即ち「彼」なる言葉は、幾分神を貶下すると云ふ事を附加へなくてはならない。

私の定めた神に就いての定義の上に、マツシユウ・アーノルドの定義を附加する必要がある。その彼の定義は、私が常に神が我々の姿を現はす一つの又主要なる方面を説き表はしたものと信じて來て居るものである。（マツシユウ・アーノルドは彼の定義を舊約聖書の豫言者達から演繹して居る。そして實際、基督以前の時代では、それは充分完全なものである。）マツシユウ・アーノルドに依れば、神は永遠な、無限な、「我々自身ではない」「正義を作る」ところのものである。人はそれを人間生活の法則、又はその手中にある人間生活てふ一部分と關聯せる、神の意志と呼んでいふ。私は此の意義は基督の時代になる迄は完全なものであつたが、基督に依つて、此の法則の遂行には、人間の理性への外

的な義務以外に、又他の、凡ての人間を通じて存在せる一層簡単な内的な動機、即ち愛が必要である事が、吾人に明示された。愛、それは妻や子供の愛ではなく神の愛——神は愛である——愛の愛——即ち親切、同情、及び人間の、死を知らない自然な、祝福された眞の生活の喜び等のその感情である。

二

私は神なる言葉を、より高き物——正義、善良、他人への柔和さ、眞理等——に關する知識を私の精神に送り込んだところのそのものであると解して居る。私の心の裏で此のより高き觀念を充分會得して、私は私自身のうちに神の生活を見出し、且つそれに依つて満足を得て居る。此のより高き觀念が心靈である。私の生活が、その心靈なるものの動作及び生活、となつて初めて私は、美しき喜びしき或物によつて満される、そして私の生活の限界を求め事なくして、唯私と同様に又他の人々にも住むところのその心靈と、合體せん事を求める許りである。此のより高き觀念——心靈を自身に體得し得るや、それを私は周圍に明示し、神を傳導する！私が自身の内に、最高なる者即ち心靈を見出す時は、その時は即ち私は、それに依つて神を認知する。

神の意志を遂行する事に依つて、私自身の裏に神を會得する、彼は何であるかと云ふ事を。彼を見る事、云ひ換へれば完全に彼を定義し且つ明瞭に彼を理解する事は、私に取つては不可能の事である。私に取つては、彼は私の裏の最高のもと呼ぶところのものゝ父である。勿論彼は、私の生活が、肉體中の最高なるもの、即ち私の裏に彼が作り出したところのものゝ實現でなくてはならぬ事を要求する。

る。

三

それは不思議に思へるかも知れぬ、が私は共に語り且つ語りつゝあるところのものゝ關係上、「神」なる言葉を違つた意味に使つて居る事を告白しなければならぬ。その言葉を私が意識して使ふならば不思議である。例へば常用語、スラワ、ボフ（神に光榮あれ）エス、ボーゴム（さようなら）に於いて、その神なる言葉は屢々無意識に私の口から漏れる。

第一の場合、即ち私が意識して「神」なる言葉を使ふ時は、その言葉だけを獨立さして使ふ事は甚だ稀なやうに思はれる。他の言葉と一緒になつて、例へばチイト、ボ、ボーズイ（神の如き態度にて生きる）と云ふやうな言葉でそれが現はされる事がある。私はその言葉を云ふ時は、實際のところ、「正しく、愛深く、合理的に生きる」事を意味するのである。

故に、神はより高き意味での正義、愛、理性である。

私はボーフ——「神」——なる言葉を、創造者と同意義のものとして、はつきりした心持で使ひはしない。神を創造者とする聖書の獨斷的な考へ方は、私の心には合はない。科學的な概念は、單に或點聖書の概念を複雑ならしめる丈で、或點に於いては全然それを破壊し、それに代ふるに、偶然又は自發力なる概念を以つてして居る。此れも亦私を満足させないものである。私の心の中の考へを分析して見ると、初めなき原因を見出す許りである。此處に私が「神」なる言葉に附與する二つの重要な

意味がある。その第一の意味を私は、實際的——理性、正義、愛と呼び、第二を學理的——終極の、終りなき原因——と呼び名付ける。

概して云へば、「神」なる言葉に正確な定義を與へる事は不可能な事であり、又それをその儘にしてしまふ事は更に困難である。最も眞實に近いのはかうであらう。神とは、それ自ら神なる故に神である。それ以上の概念は、諸君が神に近づくその立場の如何に依る。その概念の無数にある事は、同一の圓の中心に對する半徑線の無数なる事、或は同一の山頂に通ずる道の無数なる事に似て居る。而して此等の半徑線及び道は凡て、主觀的なものである。

#### 四

動物として人間に特有な諸活動の外に、人はそれ自らの内に尙それより一層高き生活の法則を意識するものである。その法則は第一に、人間に動物的な好き嫌らひの全領域を附與する。第二に、人に人生を解する唯一の喜ばしき可能性と、此の生命とを與へる。第三に人間の爲めに此の世界を、微少なる砂粒に至る迄生命あるものとし、此の生命を變化する。そして世界の凡ての活動は、彼に取つては、唯一の高き人生の法則への運行である。此の點に、福音書の根柢が存する。福音書の教へは、生きんとする欲望に依つて分離された人間の一性質、一分子を取つて、彼を兩親と友人の居る家に導き兩親の近くに共に居るの喜びを與へるものである。その人はその時から感じる、「彼のものが彼のものに歸つた。」と。

此れは、人がそれを自身の内に意識する時感する生きた或物である。此の生きた或物が彼に生命を與へる。そして生命の喜びは、人の中に於ける「神の子」である。そして人間の仕事は此の「神の子」を高める、そしてそれに依つて生き且つそれと結合させられる。此の仕事の材料は、彼自身の肉體をも含めての、彼がその中にあつて生活するその生の儘の環境である。諸君は此の仕事から脱れる事は出来ない、そして諸君と同じ百の生命も、それを成就するに充分ではないであらう。然し何はともあれ働き続けよ。そして此の仕事だけが唯一の、不滅なものである事を知れ。而して諸君が何んな事になさうとも、若しも諸君のなし得る丈けの凡ての事をなすならば、それを凡てなすであらう。

#### 五

あなたは私に、私が如何にして神を理解したかを聞かれる。よろしい。私の答へは次の通りである。

私は基督を信じる。そして完全な明瞭さを以つて、私は彼が父なる神に關して云ふ事を理解した。そして私は、彼の父なる神との父子關係を認める。私は貴下も同様にこれを理解されて居る事、及び貴下が私に他の或事に就いて訊かれるのを知つて居る。即ち父なる神は、人間丈けにでなく世界に對して、如何なる意義を有するかと。これが私の考へるところのものである。私は父なる神は最始のものであり、心霊であり、意識、愛、思想、生命——永遠なる者、人間に取つての意識の如くに、全宇宙に對して存在するところのものであると云ふ事を知る。若しも私をして動植物の全宇宙に結び付け

る絆があるとすれば、それは此の理由からである。そして一切のものは彼の意志を果たし、祝福を受ける。人は、彼の意志を果たさない時でもそれを意識して居る。そして全世界のものに取つて不變な法則に従つて死んで行く。そして彼が死につゝある間にですら、此の法則を知る。此れが、私が此の事に就いて云ひ得る凡てである。或る時、私が人々が神の意志に従つて生きないのは如何にづらい事であらうかと考へて居た際、突如として、如何に人が生きようとも常にその法則を破れないやうな工合で生活する、故にその人間のみが損をする丈けであると云ふ事が私に明らかになつた。彼は人間として法則を全くして居ない——彼はそれを動物として、或はそれより尙一層低い、腐つた肉の一塊として、それを全くして居る。此の事は、私に取つて明白な、心を慰めるものとなつた。私の心の中では世間一般の誤りも亦明白になつて居る。神は唯、私の爲めにではなく自然の爲めにのみ存在すると云ふ事、或は神は私の爲めにのみ存在して、同時に全宇宙の爲めに存在しないと云ふ事は、屢次考へられる事である。私は明白に渾一、普遍の原因を了解した。何故なればそれを知らなくては、他の事を考へ得ないが爲めである。私の意識は全宇宙の意識である——他言せばそれと同質の意識である。

## 六

私に於いては生命は意識である。意識は私のものではない——それは私の意志とは無關係である。それは欲する儘に來たり又行く、然しそれが私の内にある時は、私はその者に外ならない、意識は、存在する凡ての物の内で、最も確かなものである。意識は時間も空間も有せぬ。それは個人的なる何

物も有せず、善でも悪でもない。私が生きて居る間は私は意識する、そしてそれが私の内にある時に私は無意識であり得ない。此の意識は又神である。私は私の外では、神はどんなものであるかを知らない、私の内の意識は——私の内にある時それを知つては居るが——何處から起つて來たものであるかを知らないやうに。私は同時に、私と意識とは一つのものではなく、二つのものである事を知る、私がその取扱ひ方如何に依つては、意識は私に取つて苦痛ともなり幸福ともなるが故に。

私は、私の意識が私の生命を毒した時を記憶して居る。私は、その時如何にそれに身を打ち込んだかを憶えて居る。そして今私は、それが私に幸福を與へるものであること、及び理性なしでは、それに依る眞の犯すべからざる幸福はあり得ないと云ふ事を知つて居る。

此の意識を旨く私に適合せしめたものは、理性であつた。理性とは意識(私に於ける生命の居住處)を通して私の上に輝く光である。私はそれをかう譬へて見た。私に於ける生命の一時的な居住處はトンネルである。意識は光である。理性はトンネルに適用されたランプである。私はトンネルの外へ出てしまふと、最早やランプの必要がない。然しトンネルに居る間は、トンネルに適用された光としてランプは貴いものである。私に意識が適用されるのは、愛せんが爲め、同胞に使へんが爲めであつて、意識の命令を、私の平安を亂すからと云つて不幸なものと考へずに、その反對に、犠牲として考へるためである——他言すると、此の適用も亦、理性である。

私が理性に従つて生きる時は、順調即ち幸福である。理性なしに生きる時は、私は悪い状態にある。云ひ換へると、理性の缺乏と憂鬱とに悩み、意識の反對のものと情熱とに苦しむ。

神に於いては、善も悪もない——云ひ換へれば、私の外の意識に於ては善も悪もない。善と悪とは私に取つてのみ存在する。そして私は私自身の爲めに、その孰れをもする事が出来る。善は意識への奉仕であり、悪は意識への反抗である。然し意識が私に於ける生命である故に、善は生命であり又生命への奉仕である。然るに悪は自らの内に生命を理解せんとしての失敗である。

神即ち意識は、偏頗な者ではない。意識は愛もしなければ憎みもしない。愛は意識が私の喜びとなるやうにせしめる扶助者である。私に於ける意識は過去も持つて居なければ未來も持つて居ない。そしてその理由の爲めに永遠であり、又不死であらう。私は此處にあつて意識し、此處にあつて永遠である。何となれば私が意識する時は、私は最早や私でない、が唯意識のみは、未來に於いてともなく又何時かの過去の時に於いてともなく、今、此の現在に於いて、現在と云ふものは永遠にして無終である事を以つて、永遠であるから。過去に於いても亦未來に於けると同じく、そこには未來と云ふものも過去と云ふものもないから、永遠な物は何もない——それらは唯さう見える丈である。唯實際物を考へる時の形式に過ぎない——そこには唯現在のみがあり、そしてそれは無終である。

若しも人が意識に對して謀反するならば、然る時は彼に取つて直ちに又永久に、現在は死ぬものである——彼は死の状態にある。云ひ換へれば彼は意識を褫奪される。そして此の死は、少しの免恕をすら與へない絶対のものである。何となれば、意識との抗争より起る此の死は、凡ての生命の褫奪を意味するから。されど人が若し彼の理性を以つて意識に仕へるならば、その時は彼は完全生命に於いてあるものである。そして彼に取つて、そこには、死の形跡すらもなく、恐ろしき未知な何物もない

——彼はかくして、意識それ自らが生存する限り、永遠に生きる。

## 七

人は神を、理性に依つてともなく、又心情に依つてすらも知る事は少い、が神に頼つて居ると云ふ、丁度母親の手に抱かれたまだ乳離れのしない子供に依つて經驗されるものと類似せる感情に依つて、知るものである。その子供は、誰が彼を抱き、暖め且つ養ふのであらうかを知らない、が彼は其處に此の誰かと居ると云ふ事を知る、そして單に知る丈ではなく——その者を愛する。

以前私は人生の諸現象を、それらが何處より來り、又私が何ぞそれらを認知するかと云ふ事を考へる事なしに認知した。

従つて私は、私の見る凡ての物は、悟性と云ふ光からの成果であると云ふ事を知つた。そして私は一切の事物を調和さす事が出來て非常に嬉しかつたが故に、悟性のみが凡ての物の源であるとする事で、全く満足して居た。

然し其後私は、悟性とは曇つた硝子のやうなものを通して私に達する光であると知つた。私は光を見るが、その光の出る處を知らない。けれど私は、その發光處が存在して居る事を知る。

此の私を輝すところの光の發する同じ源は——私はその源を知らない、がその源のある事を知つて居る——神である。

然り、愛は神である。

愛——汝に苦痛を起すもの、汝が罰したものの、憎む者を受せよ、然る時は、汝より彼の心を隠して居た一切のものは消え去るであらう、そして汝は彼の心の内奥に、透明なる水を通して見るやうに、愛の神髓のあるのを見るであらう、そして汝は彼を宥してはいけないうし、又宥す事は出来ないであらう、汝は彼の裏に在つた神を愛さなかつたが故に、又は汝の愛の缺乏より神を見得なかつたが故に、唯汝自らのみを宥さなければならぬであらう。

愛とは、神の人間内への表出である（意識）。従つて自己より離脱し、自己を放し且つ神の如く生きんとする性向である。そして此の性向が、神を呼び出す、即ち愛を他人の内に。

これは、明白に表現されて居ない。

私の考への主要點は、愛が愛を、他人の内に呼び起すと云ふ事である。神は、私の内に呼び起されて、又他人の内の同じ神を覺醒せしめる。

愛すると云ふ事は、吾らが愛する者の欲するところのものを欲すると云ふ意味である。だが人々は愛され得る唯一の者は、常に同一不變のものを欲して居るにも拘はらず、その反對の事を欲する。同

一不變のものは唯、神に依つてのみ欲せられるものである。

神を愛すると云ふ事は、彼の欲するところのものを欲すると云ふ意味である。そして神は一般の幸福を欲求して居る。

「兄弟よ、我儕互ひに相愛すべし。愛ある者は神に由て生れ、且つ神を識れるなり。愛は即ち神なれば也（神は即愛なれば也と書かれてある、が吾々はかう云ふべきである）」だが又神は愛である。何となれば、吾らは神を唯愛の形に於いてのみ知るが故に。又愛は神である。何となれば、若しも吾らが愛するならば、吾々は神のものでなくて神であるから。

九

何うして私が以前、疑ふ可からざる眞理、即ち此の世界及びその中に存在する我等の生命の彼方には、何故此の世界が存在し、又何故に我等が、沸騰する水の中に現れ、破れ、そして消失する泡のやうにしてその中にあるかと云ふ事を知つて居る誰か或物が、居ると云ふ事を、知り得なかつたのは、驚くべき事である。

或る事柄が此の世界で爲されて居ると云ふ事、又それが凡ての生存するものに依つて、即ち私に依つて、私の生命に依つてなされつゝあると云ふ事は確かである。然らざれば何故に此の生命の過剰に狂亂せる太陽や此等の四季が、又就中此の三歳の子供が又はあの心のまだしつかりして居る老婆或は

向ふの發狂者があるか？私の目には明かに意味を持たないが尙元氣よく生きつゝある此等個々のもの、生命への強い執着力をもち、それらのものに生命が確固と植ゑ付けられて居るそれらのものは、他の何者よりも一層よく私に、彼らは賢く且つ善にして私の達し得ないところの或る目的の爲めに、必要とせられて居ると云ふ事を確信さして呉れる。

## 10

何だが、神に祈つて居る間に、神は實に眞に存在するもの、愛である——私が今觸知する、又愛の形に於いて經驗する一切のものである事が明白になつた。そして此れは感じでもなければ抽象的なものでもなく、眞の存在物である。そして私は彼れを感知した。

私の知る一切の事は、神が有り且つ神が自分を知つて居ると云ふ事の爲めである。唯此の點でのみ、人間の、他人、自己、並びに時間空間外の生命に對する關係を確立し得る丈けである。私は此れを神秘的なものに見做さないのみならず、むしろその反對の見解を神秘的なものであると主張する。それに反して此れは、知り得べき、又到達し得る眞實なものである。

## 11

何故あなたは元氣を落して居られるか？あなたは餘りに大きすぎる或る事を期待されて居る——それは私に、靜寂の中ではなく電雷と暴風とに於ける神を期待されて居るやうに思へる。その最もいゝ

事は、あなたも云はれる通り、あなたが「何處へも行き去る事」が出来ないと云ふ事である。此の點に於いて、神の手は最も顯著にして明白である。

あなたは私が、神を認めないやうに見えるると云はれる。それは間違ひである。私は神以外の何物も認めない。

私はあなたに、私の神に關する定義を書き又話したやうに思ふ。それを今、神は何であるかと云ふ質問に對する答へとしよう。神とは私が、その一部分と意識する一切のもの無限の一切なものである。故に一切のものが神に依つて私を取巻き、且つ凡らゆる物の中に神を感知する。

そして此れは一寸も、言葉の上の遊戯ではない、それは私が依つて以つて生きるものである。

神は何であるか？何の爲めに神があるか？神とは、私が有限なる形に於いて私自身の内で知る無限の一切である。私は有限である。神は無限である。私は六十三年間生きたものである。神は永遠に生きる。私は悟性の範圍内で理性を働かすものである。神は制限なしに理性を働かす、私は時々少しばかり愛するものである。神は常に無限に愛する。私は一部分である。神は全部である。私は神の一部分としてより外に私を解し得ない。

或る不可解な疑問が人を悩ます時は、その時人は自身或る全體の健全な身體の病める一員であると感ずる、自身を健全な身體に於ける病める齒であると感ずる、そして全身にその一員を助けて呉れ



るやうにと願ふ。その全身體は神である。その一員とは私自身である。

一一一

最も我等の形而上學的な概念を混亂せしめる迷信の一つは世界は創造された、それは虚無から生じた、そして神なる創造者が居ると云ふ迷信である。

實際吾人は、神なる創造者を想像する根據も、又はさうする必要も持たない。支那人や印度人は斯る概念を有しない。そしてそののみならず創造者や神意と云ふものは、基督教の神父や神靈——愛である神、その一部分が私の衷に生き且つ私の生命を構成し、その一部分の表出と仕事とが私の生命の意義となるところの神とは、一致し難いものである。

創造者である神はさうではない。そして苦痛や悪をも容認する。神靈である神は、苦痛や悪より解放し、常に完全なる幸福である。神なる創造者と云ふものはない。私に與へられた能力に依つて宇宙を認め、且つ私の父なる神を内的に認める私自身と云ふものがある。神は私の靈的な私の起源である——外的な世界は唯私の制限に過ぎない。

人は屢次、神が人に惹起す悪(例へば愛する者を失つて悲みに襲はれる時)に就いて語る。が左様に云ひ且つ考へながら、彼等は矢張神を信じて居ると思つて、神に向つて祈る。

神が悪をするとは！若し神が悪をなすならば、彼は善でもなければ、愛でもない。そして若し彼が

善でないとすれば、彼は存在しない事になる。

これは人々の確信が強過ぎる結果、不正な事をしてそれ善である許りでなく立派な事でもある——彼等が、子供に一切の愛を與へる事は甚だ善であると論定するやうに——と云ふ事から来る事柄である。故に彼等が彼ら自身の誤謬、彼ら自身の罪の結果に過ぎない悪を経験す時は、彼等は彼等自身を責めずに、神を責める。故に彼等は彼等の心の底で神は悪であるとする。即ち神を否定する。従つて神からの慰安を受けない。

人は宜しく靈スピリットの勇者のやうにすべきである——地上に各人の前に彼の衷ハートに神のある事を記憶し乍ら跪く事が、若し肉體的に跪く事が實行出来ないならば、吾人は少くとも精神的にさうする必要がある。

一一三

意識、即ち私の衷ハートに生き且つ私を通して働きつゝある神の感じは、常に感じ得るものではない。

人が自身を全部無制限に、唯その事の何れも考へずに捧げ切つてしまはねばならない多くの仕事がある。その場合に於ては、神を思ふ事は不可能である。それは心を散らしてしまふ、そして不必要のものである。

人は單純に、何の努力もなしに、自身を己が意向に任せてしまふ必要がある。がその時、内的な疑惑、争鬭、失望、危惧、悪意がそこに起つて来る。で直ちに自身の衷ハートに靈的な存在を認め、自身と神

との結合を知つて、人は物質的な勢力より靈的な勢力の下に、身を轉すべきである。そして人生の仕事から逃れんが爲めにではなく、その反對に、その仕事を完成し、その障害となるものに打ち勝ち、且つそれを統御せんが爲めに。鳥の如く——納められたる翼を以つて歩みを進め、然し障害が打ち寄せ來つた瞬間には、翼を擴げて飛び去れ……かくて人は救済を見出し、人の重荷は消滅する。

かう云ふ事が私に起つた。私は生命の問題——生命は如何なるものより成るか？その目的は何であるか？——愛とは何であるか？——と云ふ事に關して抽象的に考へを進め初めた。そして私は歩一歩と、舊約聖書の創造者としての考へのみならず、又父として一切の生命及び私の生命の正しき源としての神の考へ方からも遠ざかつて行つた。そして惡魔が私を誑した。それはその考へ方を全然避ける事は可能なる事であるし、又特に支那の儒教徒、佛教徒及び吾らの無神論者不可知論者との和合の爲めに喜ばしき事でもあると云ふ考へを、私の心に入れ初めた。私は、私のうちにある神のみを、それ以外の如何なる神をも認めず——私自身のうちにその一部分を移し植えたところのその神を認めず、考へ且つ認める事に自身を制限する事は、可能であると考へた。そして不思議な事に、私は突然物懶さを感じ、憂鬱になり、且つ驚かされた。私は此の原因を知らなかつた。併し私は突然恐ろしい精神上の墮落をなし、一切の精神的な喜びと力とを失つたのである事を感じた。

それから私は、この事は私が神を棄てた事から起つたと云ふ事丈けが分つた。そこで私は考へ始め、奇妙にも、神があるか否かに就いて推量し初めた。そして云はゞ私は、も一度新しく神を見出した。

そして私は非常な喜びに充たされ、神に就いて並びに神との親交の可能と義務に就いて及び神が私の願ひを聞くと云ふやうな事等に就いて、非常な確信を得た。そして私の喜びは非常に擴大して行つた。故に私は最近すつと通して、何か非常に善い事が私に起つたやうな感情を味つて居る。そして私は絶えずかう獨り語を云ひ續けて居る。「何故に自分はかくも幸福な氣がするの？さうだ！神だ！神はある、そして私は不安になつたり恐れたりする必要がない。がたゞ喜び得る許りだ。」

私は此の感情が、消滅して心持が鈍つてしまふであらう事を惧れる。しかし今のところ非常に嬉しい。恰も私は、私に取つて最も親しい神を失つてしまふ危機一髪のところであつた、否、實際失つてしまつたやうな氣がした、けれども私は神を失ひはしなかつた、云はゞ神の價値の貴くない事を知つたと云ふに止まる。若しも此の感情が消失してしまふならば、それは唯法悅的な感情に過ぎないものとなるであらう。がそこには、私が新しく得たところのものゝ多くが、残つて消えずに居てほしいものである。

此の感情の主要な點は、完全に保護されて居ると云ふ意識、神があると云ふ事、彼は善である事、彼が自分を知つて居る事、そして私が全然彼に取り圍まれて居ると云ふ事、私は彼から出て來て又、彼は向つて歩み、彼の一部分をなし、彼の子供であると云ふ事等の意識である。一切の惡と見えるところのものは、唯、私が神に信頼せず私自身に信頼するが故にのみ、さう見えるのである。そして彼の意志を行ふのにかくも容易な此の生命からは（此の意志は同時に私自身のものである）唯神へ落ちる以外に何處へも落ちる事が出來ない。そして彼に於いて全き喜びと幸福とがあるのである。

私の書く一切のものは、私が感じたところのものを表現しはしないだらう。私が肉體的の又は道徳的の苦痛に悩んで居やうと、息子が死に瀕して居やうと、又は私の愛するものが死に掛つて居てどうとも仕様がなからうとも、又は悩みが私を待設けて居やうとも、——突然考へが私に浮んで来る——そして神に就いてはどうであるか？」と。そして凡てのものが善となり喜ばしき明白なものとなる。

## 一四

信仰ある人にして、疑惑の瞬間——神の存在に就いての疑惑が襲つて來ない人は居ない。そしてこれらの疑惑は害あるものではない。その反對に、それらは神に關するより高き理解に導くものである。人の知れるその神が、有りふれたものとなつた時は、人はもう誰も信じなくなるものである。我等が全然神を信じ切つてしまふのは、神が再び我等に新しくなつて現れる時のみである。そして彼は、我等が全心をあけて彼を求めるとき、新たな方面から我等に自身を現すものである。

私は神に就いて、又は私の生命の本質に就いて多く考へて來て居る。そして恰も唯、その二つの事に關して疑はしく感ずる爲めにのみさうして來たやうな氣がする。かくして私は神の存在の證據を疑つた。その後、つひ久しからざる以前、私は單に神への信仰に、又は私の精神の不滅に對する信仰に身を任せきつてしまひ度い慾望を感じた。すると驚くべき事には、私は以前一度も感じた事のない程の確かな平安な自信を感じた。故に一切の疑ひや詮議心は明らかに私の信仰を弱めなかつたのみならず、非常なる程度に迄それを強固なものとしたのである。

人は決して云はゞ「わざく」神に行つてはならぬ。「では一寸自分は神の所に行つて來よう。神に従つた生活をしよう。自分はこれまで惡魔に従つて生きて來た。今一寸神に従つた生活をして見よう。誰が知らう——恐らくどんな損害も起りはしないだらう……」と。

これには損害がある。大なる損害がある。神に來る事は嫁に行くやうなものである。人はそれを唯、神に來ない事は嬉しいだらう、又は、嫁入りしない事が嬉しい事であらうが、さうせざるを得ないと云ふ時のみにすべきである。故に私は、人に向つて「わざく誘惑に陥れ」と云ひ度いのではない。が「よろしい、そして惡魔に行く代りに神へ行つて、自分を失ひはしないのは確かでせうね？」といふ質問を發する者に向つて、さう云ひ度いのである——私は有らん限りの聲で叫び度い。「行け、惡魔へ行け、あらゆる手段を盡くして惡魔へ行け！」と。

惡魔に手ひどく火傷を負はされる事は、絶えず十字路に立ち、又は不眞面目に神へ趣く事よりも、數百倍勝れた事である。

## 一五

私はスペンサアの、人が今では無神論と呼ぶかの不可知論者のバルフォアに當てた答へを讀んだ。私は不可知論を、たとへそれが知る事の假想的な不可能性を設くる事によつて、無神論とは異つた何物かにならうと欲して居るけれども、矢張り實際に於いて、彼ら兩者の共通した根柢は共に神を承認しないと云ふ事にあるから、無神論と同じものであると考へる。

兎に角私はスペンサーを讀んだ。彼は、神に對する信仰を棄てやうと欲するのではない、がさうせざるを得ないのである。そして自己を欺く事は唯一のも一つの策であると云つて居る。彼は云つて居る「それ自身すら一切の事物と比較すると極く微小な此の地球上の、一個の無限に小さい泡のやうなものであると云ふ意識には、喜びはない。」(私は、「一切の事物」とは何を意味するかを彼に訊ねたい)「急激な無慈悲な變化から屢次癒し難い事さへある苦痛を蒙る人間は、冷淡にも時とすれば太陽を破壊し、又時とすれば極微動物を死滅せしめる盲目な力に支配されて居ると云ふ考へには、慰安はない。明白な目的を持つて居ない宇宙に就いての冥想は、何等の満足をも齎しはせぬ。宇宙の意味する一切の事を知り度い欲望は、他の人々に於けると同じく又、不可知論者にも強いし、又それらの他の人々に對して共鳴を感じしめるものである。彼は何かの解釋を自身が見出さうとして全然失敗して、遺憾ながら、他の人々の呈する解釋を承認する事の不可能なのを感じるものである。

又他の或る人が、他日私に全然それと同じ事を云つた。「或る一種の旋轉が起つて居る。そしてその時間空間の中で終りなく廻るその渦巻の中に、自分と云ふ者が現れ、生活し、そして消えてしまふ。それは確かな事である。その他の一切の事——即ち自分が其處から出て來且つその者の目的の獲得の爲めに自分が、一切の生存するものと共に生きて居るところの或る何か全智の存在があるとする考へ——左様な考へは虚偽である。」

明瞭な、且つ互ひに相矛盾する二つの宇宙に關する學説がある。それをかう云ひ現はす事が出来る

不可知論者は云ふ、「自分自身を、自分は、自分自身の兩親より生れたる者として、自分の周圍にあつて又自分の探究の對象たる或る條件の下に生活せる他の一切の人々と同じやうに、見る。そして自身及び無生の他の者、及び彼等が存在するその状態とを研究する。そしてこの研究に應じて、自分の生活を順序立てる。その起源に關しても亦同様に、自分は觀察と實驗の兩方法を以つて研究する。そしてそれらの事に就いて、漸次より多くの智識を獲得する。此の宇宙が何處から發生し、何故それが存在するか、又何故自分が生存して居るか」と云ふやうな疑問に關しては、宇宙内の事物の状態に關する疑問に答へ得る位決定的に、明瞭に又確信を持つて答へ得ない故に、それを不問に附して置く。そして斯様な理由で、此の疑問に對する答へ、それは私がそこから出來し、且つ或る理由で自身を人に知らしめて居る或假想的な存在、神がある。(一般にかう云はれる、「そのものより世界が發生した」と。それは基督教の認めないところの世界の創造を意味する)そしてそれが私の生活の法則を定めたと云ふのであるが——此の解答は、多くの自然現象の原因と状態とに關しての科學的解答が有する如き、明瞭さと證明可能性とを持つて居ない故に、自分の承認出來ぬものである。」

不可知論者の云ひ分はかうである。そして觀察とその分析とに依つて得られる知識以外の他の者の可能性を認めないと云ふ點で、彼は正しくはないとしても、少くとも全く論理的であり斷案的である。一方神を認める基督教徒は、云ふ、「自分は合理的な人間であると感ずると云ふ故のみを以つて、自身の存在を意識する。そして自身がかく感ずると同時に、自分及び他の生存する一切のものゝ生命も亦等しく合理的でなければならぬ事を認めざるを得ない。そしてさうである爲めには、それは一つの目

的を持たねばならぬ。自分の生命の目的は自分以外に、即ち自分及び他の生存する一切のものが、生の目的を獲得せんが爲めに使へるその一存在者の内にある。此の存在者は存在する、そして生のある間に、そのものゝ意志或は法則を自分は遂行しなければならぬ。自分にその法則の遂行を要求するところの此存在者の性質、又何時如何にして、時間と空間内で、此の合理的な生命が自分の内に起り、又他の者の内に起つたかと云ふやうな事に關する疑問——即ち「神とは何であるか？」「神は個人的なものか又非個人的のものであるか？」「神は世界を創造したか、したとすれば何うして？」「何時心靈が自分の内に目ざめたか？」「何時又如何にして、それが又他のものゝ内に起つたか？」「それは何處より來て何處へ行くか？」「肉體の如何なる部分にそれが宿つて居るか？」——凡て此等の疑問を、自分は不問に附せねばならない。何となれば自分は前以つて、人々の觀察と分析との領土では、一切のものが無限の時間と空間内に消失するものである故に、確定した答へに決して到達し得ぬ事を知つて居るから。此の理由からして自分は、如何にして宇宙(太陽、世界)が発生し、如何にして精神が発生し、又それは腦の如何なる部分に宿るかと云ふ事に就いての、科學上の答へを承認しないものである。」

第一の場合では、無神論者は、自身を單に一動物に過ぎないとし、従つて外界の感覺にのみ從屬するものである事を許容して、靈的な起源を認めない。そして理性の要求に反くところの生存の愚かなる事に、勢力を振ふものである。

第二の場合では、基督教徒は自身を唯合理的なものとし、従つて理性の要求に合ふところのものゝみを承認して、外的經驗の材料の豊富な事を認めず、又左様な材料を空想的な間違ひの多いものと考

へるものである。

兩者は孰れも正しい。併し兩者間の相違、しかも根本的な相違は、次のやうな事實に依つて起る。即ち前者の考へ方に依れば、人間の生命それ自身と全宇宙との意義を除いては、宇宙間の一切のものは皆劃然として科學的、論理的、合理的なものである。従つて斯る考へよりして、甚だ多くの面白い考慮は出て來やうが、その大なる努力をするにも拘はらずその反對に、人生の指導として必要な何物も出て來はしない。これに反して後者の考へに依れば、人間及び全宇宙の生命は、一定した合理的な意義を與へられる。そしてその意義は、生命に對して最も直接に、單純に、又一般的に容易く承認され得べき適用性を有し、同時に、科學的研究の可能性を斥けないのみならず寧ろ此の場合に於いては、それらを本當の場所に置くところのものである。

## 一六

道德律を承認してそれを生存競争から演繹しようとする進化論者の企て程よく、神の存在を證明するものはない。

道德律が争闘から出て來ない事は、分り切つた事である。しかも彼等は道德なくして吾人は居られないと感じ、その存在をも認め、且つそれを自身の提案より演繹しようとする。けれどもそれを進化の學說より演繹しようとする事は、シナイの山でヘブライの神に依つて與へられた律法から、それを演繹すると同じように(或はそれ以上)不思議な事で、又不合理な者である。彼等の誤り、それ

はそれなしとしては如何なる合理的な人生觀もあり得ないところの、人間の精神的我を神の造るもの、神の一部分であるとする意識を否定するところにある——此の誤りは、彼等に、不條理な矛盾した奇怪な事、即ち彼等自身の人生觀より除外したその同じ神を、再び道德の形で容認すると云ふ事を強ひる。

## 一七

「過日一佛蘭人が私に質問した、「道德の基礎を正義と美の上に置く事は、正しい事ではなからうか？」と、即ち再び世人が命名する事を恐れて居る同じその神の事を。」

我等は我等が知つて居るところのもの、我等に必要な、喜ばしき又確實な事を云ひ現すべく努めようではないか。そして神(貴下が除外する事を必要とせられて居るその同じもの)も亦、我等を助けるであらう。神の名を呼ぶ事に依つて、私は私の不完全な事を認める。神の弱き小さな器である私は、私自身——神を受入れ得るところの私のその部分——を、私が神を受け得又はそれに償ひするとせば、私に入つて来るやうにおつびろけて居よう。

わけても、彼は私に取つて、私が何處に赴き又誰に向つて行かうとするかと云ふ事を云ひ現す爲めに、必要なものである。此の單調な地上の生活に於いては、神を感じなくつても、又此の種の形の思想や表現なしで、やつて行けるかもしれない。が過去の生活から今の生活へ、又今の生活から他の生

活へと云ふ此の推移と關聯して、私はどこより來り又どこに行くかと云ふ事を、彼に依つて云ひ現す事をしない譯には行かない。そして此れが、最も眞の事情に近い云ひ表し方である、神から神へ、即ち時間空間外にあるところのものより、再びその同じものにと云ふ事が。

## 一八

貴下が理解並びに神に就いて云はれる事に全然私が賛成であると云ふのではない。が私の考へが貴下の考へと符合して居るのである。私は貴下の考へに賛成でない、と云ふ譯は、斯様な事柄を話す場合、自身の考へを正確に云ひ現す事は屢々困難な事であるし、又言葉と云ふものは、廣い意味にも狭い意味にも取られるから、一人の人の考へに完全に適合した定義を作る方法は、決してあり得ないからである。然し私達は同じ方向に、考へ且つ感じて居る事が分る。そしてその事が私に大きな喜びを與へる。此等の事柄に就いて考へまいとするのは、不可能な事である。が自分達各々は、我れ知らず、自己流儀に考へるものである。各種の信條のやうな風に自身の考へを形式立てる事は、無益な事である許りでなく、危険でもあらう。モーゼが「殺す勿れ」と斷言し、基督が「惡に抗する勿れ」と斷言したやうに、生活に適用されるべき推論を形式立てる事は可能でもあり、又必要でもある。けれど私は繰返して云ふ、私も同じ方向を取つて考へ、又神の理解は人の純潔と謙遜と愛の度合に應じて達し得られると云ふ貴下の言に、全く賛成であると云ふ事を。

此の世界の只中に捨てられた、この私は何であるか？誰に自分は戻つて行くべきであるか？誰から返事を受けるべきであるか？——人々からであるか？

彼等は知りません、彼等は笑つて居ます、彼等は知る事を欲しません、彼等は云ひます、「それは馬鹿な事だ。そんな事は考へるな。此處に世界と、人を悦ばすものがある——生きよ！」と。

然し彼等は私を欺く事は出来ませぬ。私は彼等が云ふその言葉を、彼等が信じない事を知つて居ます。彼等は又私と同じやうに、死や彼等自身や、彼等が呼び申す事の出来ない主なるあなた様に就いての恐れに、悩み且つ喜んで居ます。

私も亦永い間、主なるあなた様をお呼び申す事が出来ませんでした。そして又彼等と同じ事をして居りました。私は此の自己偽瞞を知つて居ります。そしてそれが何んなに胸を壓しつけるか、又あなた様を呼ばない者の胸に隠されて居る絶望の火は、どんなに恐るべきものであるかと分ります。何んなに彼等がそれを鎮めやうとしても、それは私の胸を燃やしたと同じやうに、彼等の胸をも燃やす事でございます。

然し主よ、私はあなた様を呼びました。そして私の苦みは止み、私の絶望は消えてしまひました。私は私の心の弱いのを呪ひます。が私は主の道を求めて失望は致しませぬ。私は主の近くに居られます事を感じ、主の道を歩む時、あなた様のお助けを感じ、又あなた様から道を踏み迷つた時はあなた様のお有しを感じます。

あなた様の道は明白で容易くあります。あなた様の輓は易く、あなた様の重荷は軽い。しかし私は永い間、あなた様の道から迷ひ出てゐました。又私の青年時代の忌むべき事柄のうちには傲慢にも、私の重荷を振り捨て、輓から離れ、且つあなた様の道を歩まないやうにと教育を受けました。そしてあなた様の輓も重荷も私にとつては、いゝものであつて軽いものであると知つてゐながら、重いものとなつてしまひました。

主よ、私の青年時代のあやまちをお許し下さい。そして出来るだけ勇んで、あなた様の輓に堪へるやうにお助け下さいませ。(完)

本論文は、最初の六章はセネカで書かれた「神に就いての考察」と云ふ題文から、他は日記、書簡、手記、未定稿其他心覺えに書き付けた書類の中から抜いて纏めたものである。この編纂者であるチェルトコフは云つて居る。「此處に現はされて居る思想は、元々著者に依つて公表を企圖された種類のものではない。従つて著者が世上に發表する際のやうな、正確さと注意深さを欠いて居る。故にこの思想を承認し又はそれに依つて利益を得ようとする人々は、言葉の上の不正確な點を全體の意味に應じて理解し、省略されてある點は、最も表現されてある思想に都合のいゝ意味で埋合せなければならぬ。」

大正十一年八月廿一日印  
大正十一年九月五日發行

定價金七十錢



宗教とは何ぞや

譯者

加藤 一夫

發行者

神田 豐穂

印刷者

小島 爲吉

印刷所

早稻田印刷株式會社

東京牛込早稻田編卷町三六二

東京市神田區表神保町十番地

發行所

春秋社

電話東京二四八六一番  
電話神田二一三八七



# トルストイ名著名集

トルストイの思想を全世界に流布せしめしに就いては、フリー・エージ・プレス社の功を没すべからず。曩に吾邦曠古の大出版たりしトルストイ全集を完成せし吾社は、茲に江湖の熱需に促されて該全集の名篇を選出し、茲に極めて簡素低廉の小冊子として頒布す。

編一第  
譯耶三新島宮

## 人生論

版六四  
頁十八百  
錢十八價定  
錢八金料送  
の邦境的  
文に幸の  
の全ある  
譯をを  
書痛越  
は論せ  
本論せ  
書し  
只もの  
一の  
卷一

編三第  
譯殺村木

## 藝術とは何ぞや

版六四  
頁卅百二  
圓一金價定  
錢八金料送  
也術後杜  
の論に月翁  
導全をを  
火世費せ  
線界にし  
と於名  
なりける  
し民  
もの衆  
の藝

編三第  
譯吉源田細

## 私の懺悔

版六四  
頁五十四  
錢五十四價定  
錢八金料送  
文字みに古  
也熱誠於毫  
深於杜末  
刻翁の遜  
真此の色  
に書な  
泣は  
血あ  
の大る  
の代

吾等は窃かに本書が東洋のフリー・エージ・プレスたる使命と價値とを有すべきを確信す。今後と雖も續々これが刊行を繼續して、『トルストイ全集』を購むる機を欠せし讀書子の渴望を充たし、併せて此の北歐の大偉人の思想を廣く傳播せしめん事を期す。

504  
78

終